

Studies on Matsue Castle

松江城研究 1

2012年3月

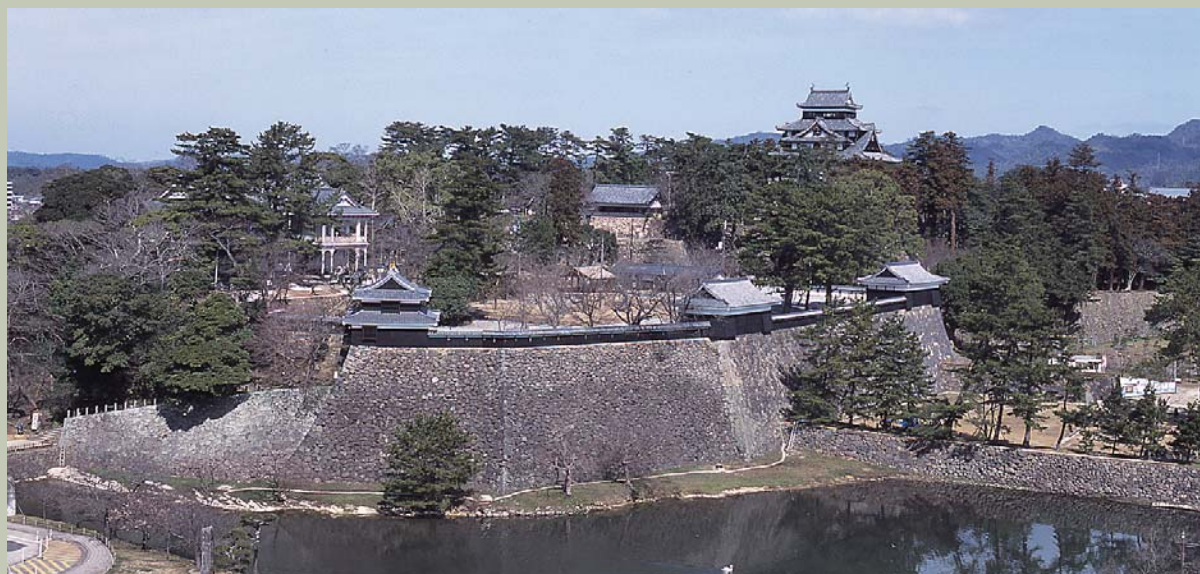
松江城研究報告会「松江城研究の最前線－わかったこととこれからと－」

基 調 報 告	「松江城研究の最前線」	山根正明 (1)
分野別報告	「松江城の縄張りについて」	山上雅弘 (8)
	「松江城天守と城郭施設について」	和田嘉宥 (15)
	「松江城下町遺跡の遺構と町割り」	松尾信裕 (21)
パネルディスカッション		(28)

堀尾氏の出雲支配における支城について (1) 中井 均 (43)
－三刀屋尾崎城－

松江平野の古環境 (1) 渡辺正巳・瀬戸浩二 (49)
－県道城山北公園線発掘調査に関連して (1) －

【史料翻刻・解題】『(竹内右兵衛書つけ)』 和田嘉宥 [1]



(松江城)

松江市教育委員会

は じ め に

ここに『松江城研究』を創刊することといたします。

松江城と城下町松江については、先人による長い研究史と厚いその成果の蓄積があります。しかしながら、現今の城郭史や都市史あるいは近世史や近現代史、さらに関連諸科学の研究の深化に照らしてみたとき、やはりたち後れた研究状況にあると言わざるを得ません。

すでに、『松江市史』の別巻として『別編 松江城』を刊行することが承認されております。これを担当する松江城部会には、文献・歴史地理、城郭史、建築史、土木史のそれぞれの分野から、全国各地の新進気鋭の研究者に参集していただくことが出来ました。部会員の皆さんには、全国的な視野に立って史料を収集し、最新の研究視角と研究動向を踏まえた調査と研究を進めていただいております。

そうした調査や研究の成果は、平成29年度刊行予定の『別編 松江城』に結実させていただくことになるわけですが、刊行以前に、論考やコラムあるいは史料翻刻の形で広く斯界の研究者やご関心をお持ちの方々に提供し、批判を仰ぎたいと考えております。

本号では、昨年11月に実施しました「松江城研究報告会」の記録を特集としました。「松江城研究の最前線～わかったこととこれからと～」と題するこの企画も、前述のようなねらいと願いによるものです。

二本の論考は、縄張り調査と自然科学的方法によるもので、これまでの研究には採り入れられることのなかった調査方法による成果です。また、「竹内右兵衛書つけ」は久しく待望されていた史料で、このたび初めてすべてを翻刻し、その全容を解説とともにご紹介するものです。いずれもが、松江城と城下町松江についての研究を大きく前進させるとともに、環境史や建築史をはじめ関連諸科学の研究に大きく裨益するものと思っております。

なお末筆ながら、玉稿をお寄せいただいた皆様に厚く御礼を申し上げますとともに、読者からの真摯なご批判をお待ち申し上げます。

2012年3月

松江市教育委員会
教育長 福 島 律 子

松江城研究報告会

「松江城研究の最前線－わかったこととこれからと－」

一、平成23年11月26日（土）島根県民会館において開催した松江城研究報告会「松江城研究の最前線－わかったこととこれからと－」の基調報告、分野別報告、パネルディスカッションの記録である。

- ・基調報告 「松江城研究の最前線」 山根正明
- ・分野別報告「松江城の縄張りについて」 山上雅弘
- 「松江城天守と城郭施設について」 和田嘉宥
- 「松江城下町遺跡の遺構と町割り」 松尾信裕
- ・パネルディスカッション
- パネラー 山上雅弘、和田嘉宥、松尾信裕
- コーディネーター 中井 均

二、松江城研究報告会は『松江市史』の『別編 松江城』の編纂に向けて行っている調査や研究の成果を市民に広く公開しようとするものである。また、中国・四国地区城館調査検討会と共催することで、同会々員からの情報の提供と議論の深化をはかった。

三、この記録は、当日配付した資料および録音をもとに、基調報告、分野別報告、パネルディスカッションの要旨を収載したものである。

四、『松江市史』の『別編 松江城』の編纂にあたっている松江城部会の委員は下記のとおりである。

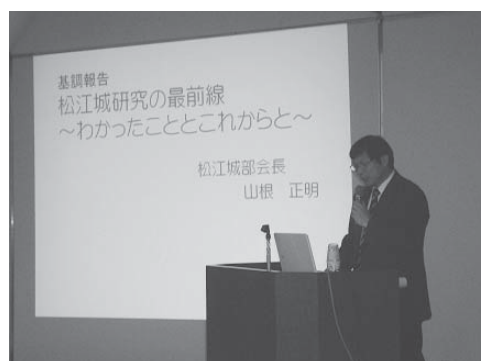
グループ等	氏 名	所 属 等
文献・歴史地理G	部会長 GL	
	山根 正明	松江市教育委員会史料編纂室
	堀田 浩之	兵庫県立歴史博物館
	渡辺 理絵	山形大学農学部
城郭史G	GL	
	中井 均	滋賀県立大学人間文化学部
	先山 徹	兵庫県立大学自然・環境科学研究所
	西尾 克己	島根県古代文化センター
	乗岡 実	岡山市教育委員会文化財課
	松尾 信裕	大阪城天守閣
土木史G	山上 雅弘	兵庫県立考古博物館
	GL	
	河原莊一郎	松江工業高等専門学校
建築史G	渡辺 正巳	文化財調査コンサルタント(株)
	GL	
	和田 嘉宥	米子工業高等専門学校名誉教授
松江城部会担当	足立 正智	飴屋工房
	福井 将介	松江市教育委員会史料編纂室

松江城研究の最前線 ～わかったこととこれからと～

松江城部会長 山根 正明
(松江市文化財課)

はじめに

松江城と城下町松江に関しては、長い研究史と厚いその成果の蓄積があります。ここでは、近年の調査と研究の成果をかいつまんで報告することとします。ただ基調報告とは言うもののあくまで概要ですし、いわゆるトピックを取り上げたものでしかありません。この後のお三方の報告によって、さらに詳しい内容と、その調査と研究成果の意味するところ、さらには他の城郭や城下町との比較検討、あるいは調査と研究の深化による今後の解明の見通しなどをご理解いただきたいと思います。



したがって、ここでは、三人の報告される分野については重複を避けて簡略に、報告に含まれない分野、つまり文献史料や歴史地理学的方法による成果、あるいは開府以前の自然景観や土木史的分野についてはややていねいに報告することとします。

1. 宍道湖・大橋川・中海とその周辺

開府以前の松江地域については、ひなびた水辺の村里といったイメージが広く信じられていましたが、文献史料や古絵図による研究の深化によって修正を迫られています。

既にこれまでも、明代の『日本図纂』に安来や平田とともに「白潟」が記載されているところから、中国や朝鮮半島にまで知られた内海港であったことは認められていたところです。また、『松江市史』編集委員長である井上寛司島根大学名誉教授によって、中世の西日本海水運の構造と、その中に占めた美保関の役割や重要性も既に指摘されていたところです。^(注1)

こうした先行研究に加えて、宍道湖と、大橋川を経て中海につながる内海水運、さらにこれに連なる河川水運に光が当てられてきました。その結果、佐陀水海や古松江湖など潟湖(湖中湖)の広がる景観と、その周辺のいたるところに形成された港津の存在も浮かび上がってきました。たとえば、宍道湖北岸の平田や佐陀江・満願寺江、大橋川西端の白潟や東端の馬潟、中海南岸の八幡津や出雲江あるいは安来、中海東岸の弓ヶ浜半島の外江や米子、などはその一例です。さらには、これらの港津の間を、細川幽斎が佐陀より平田まで乗船したという「湖水の小船」が結ぶ光景も同時に明らかにされています。^(注2)

そうした中で、宍道湖と中海をつなぐ大橋川の咽喉部ともいえるべき白潟と末次には、それぞれ砂州が形成されていました。南岸の白潟砂州は元山(床几山)の裾から北に向かって伸びており、北岸の末次砂州は荒隈山の裾から東に向かって形成されました。つまり、南北の両岸には途中の離れたT字型に砂州が形成されていたわけです。そしてそれぞれの東部には広い水界が広がっており、北岸のそれは古松江湖と呼ばれています。

さらに、北岸には島根半島の三坂山山地から伸びた宇賀丘陵が、逆T字型に末次砂州に向かって突き出していました。この低丘陵の上に築かれたのが末次城であり、現松江城であるわけです。また、南端

に荒隈城が築かれた荒隈山も、同様に三坂山山地から宍道湖に向かって伸びた低丘陵です。

2. 開府以前の白潟と末次

白潟の売布神社に伝わる「明応四年(1495)正月八日 松浦道念寄進状」^(注3)によりますと、白潟には「両目代」と「にし・ひがしおとな中」のいたことがわかります。一般に、目代は、租税を徴収して取りまとめたり、町を代表して他との紛争の調停に当たったりした町の有力者を言います。おとな(乙名・大人とも)も、住人を代表する有力者をさす呼び名です。したがってここから、15世紀の末の時点で白潟には東西二つの町場が形成されていて、二人の目代とそれぞれの乙名たちとが町の運営の中心を担っていたと推測できます。

なお、この寄進状は、松浦道念が、米十四俵で買い取った三ヶ所の土地を、子孫の繁栄を願って売布神社に寄付したものです。ここで特に注目したいのは、道念がこの寄進行為の確認と保証を「両目代」と「にし・ひがしおとな中」に求めていることです。おそらく白潟の町は、二人の目代とそれぞれの乙名たちをリーダーとして、自治的に運営されていたと考えられるのです。

そして、こうした力量は、当時のことですから軍事的な実力を裏付けとしていたと推定されます。そして、白潟の町の有力者は守護の京極氏やその後継者となった尼子氏との結びつきを強くしていたらしいのです。そのためか、雲芸攻防戦(1562～1566)の初期には毛利方の本城氏による放火攻撃を受けています。尼子家復興戦(1569～71)においても、「白潟衆」は尼子勝久方として毛利氏の兵糧輸送を阻もうとしたのですが、毛利勢に撃退されたことがわかります。

なお、新出の「松浦文書」^(注4)の分析が進めば、松浦氏の性格と活動を含めて、白潟だけにとどまらないさらに豊かな地域史像が描かれるものと期待しています。

松浦道念田地寄進状(売布神社文書)

白方御はしひめきしん申下地之事
合六百文しり、在所ハ一所か□ミ 一所なへかた
一所にし原

右彼下地ハ、代物十四俵ニ永代かい申候てきしん申候、
かやうニ仕候上者、我らかしそん悉はんしやうニ御ま
ほりあるへく候、若 公方事又わたくし事何事にても
候へ、うりけんのむねニまかせて、両目代又にしひか
しおとな中より御はたらき候て、末代御きしんあるへ
く候、仍永代きしん状如件

明応四年正月八日

道念(花押)

「明応四年正月八日 松浦道念田地寄進状」

橋北の末次地区については、平安末期より東福寺領末次荘（保）が成立していました。末次荘（保）を基盤としたらしい末次氏は、雲芸攻防戦の初期に毛利方に転じて、末次森分のほかに元のごとく「市屋敷」を安堵されています。したがって、末次荘内にも市場集落が形成されていたと見られます。

また、毛利氏がこの地域を制圧してからのことですが、河村又三郎が白潟・末次・中町の磨師・塗師・鞘師・銀細工などの「司」に任命されていることも注目すべきでしょう。つまり、大橋川を挟む両岸には武器の製作に携わる職人たちがいて、毛利氏は河村又三郎を通じてそうした職人集団を取り込もうとしていたことがうかがえます。

このように、橋で結ばれた白潟と末次は、開府以前にすでに市場機能に加えて船荷の荷揚げや保管といった港湾機能、さらには刀鍛冶や銀細工などの高度な技術者集団の住む、両岸が一体化した町場を形成していたと見てよいでしょう

なお、歴史地理の分野では、「堀尾期松江城下町絵図」（以後「堀尾期絵図」と略称する。同図については後掲の松尾報告と山上報告の付図を参照されたい）の史料批判が行われて、信頼して利用できるようになったことは特筆されるべき成果です。この史料は、島根大学附属図書館に架蔵されている絵図ですが、その史料性についてはこれまで幾分疑問が呈されておりました。つまり、堀尾期の制作ではなくて後世の成立ではないかということです。この疑問の背景には、松江城周辺や奥谷あたりの街路が現在のそれとあまりにも酷似していること、逆に天神川より南の雑賀町周辺の街路が南北方向の縦型として描かれており、現在の東西方向の町割りとは90度異なること、などがあげられておりました。

島根大学では、高安克己元副学長を中心に絵図に関する専門家を集めて検討されましたし、絵図に使われている和紙（上質の雁皮紙が用いられている）に対して、放射性炭素年代の測定も導入されました。その結果、制作年代として1600年代はじめの2～30年間のいつ頃かという可能性が最も高いという結果が出ました。

もともと、「堀尾期絵図」は家臣の屋敷配置を記した屋敷割り図です。したがって、これに記載された堀尾氏の家臣の没年から、既に島根大学の松尾寿名誉教授によって元和6(1620)年から寛永10(1633)年の間の成立という説が提唱されておりました^(注5)が、それと符合する結果ともなりました。また、松江歴史館の西島太郎学芸員は、料紙に残された角筆の凹線からこの絵図の制作工程を復原し、堀尾忠晴の時期に作成された原本（清書図）そのものと判断されています。^(注6)

なお、雑賀町周辺の縦型の町割りについては、堀尾期における足軽屋敷の配置計画であって、後世、おそらくは松平期になって横型の町割りとして新たに整備されたものと考えられています。

もとより絵図ですから、後の時代になって一部分が加筆されたり修正されたりしたという可能性がないとはいえません。したがってなお詳細な検討は必要ですが、「堀尾期絵図」は開府当時の、具体的には堀尾忠晴段階の松江城と松江城下の景観を描いた絵図として今後のさらなる分析と活用が待たれるところです。

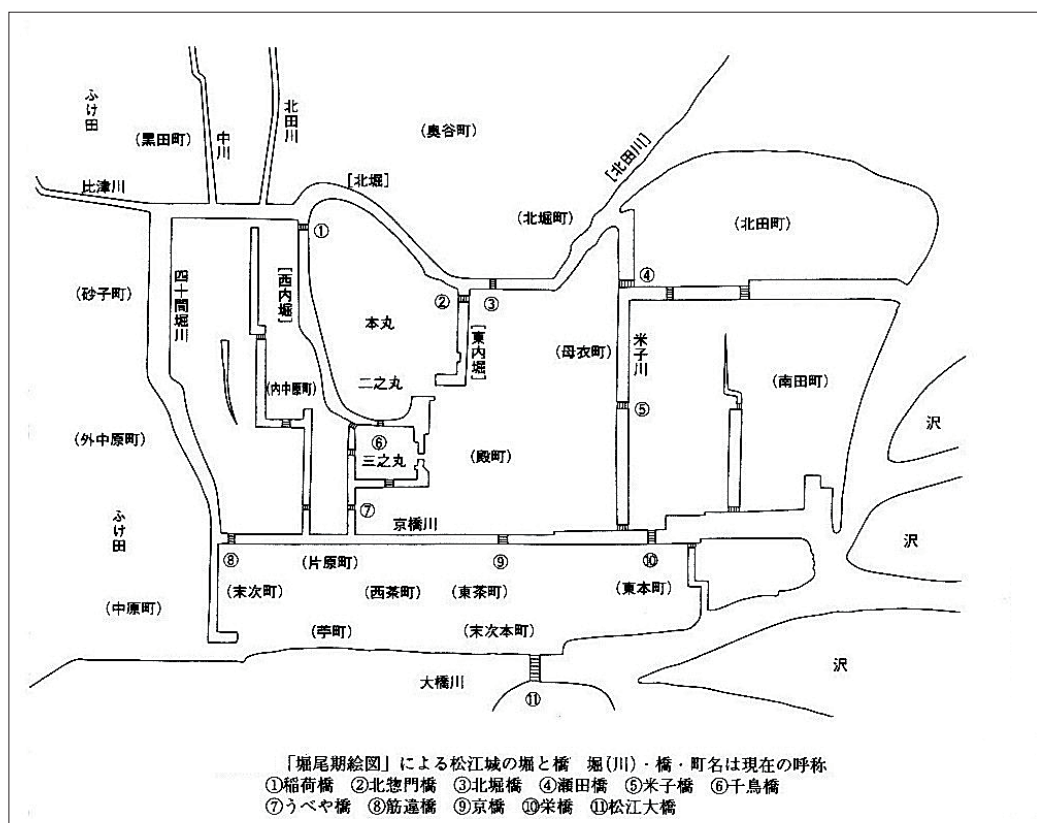
3. なぜ松江か 水の恵みとその活用

このことについて松江では、堀尾吉晴と忠氏親子が元山（床几山）に立って城地を選定したとき、吉晴が荒隈山を推したのに対して忠氏は亀田山（末次城の故地）を主張して意見が食い違ったが、忠氏が早世したために、吉晴は息子の遺志をくんで亀田山に松江城を建設したという伝承が市民に広く信じられています。しかし、はじめに松江ありきではなく、出雲・隠岐の両国を支配する拠点としての居城と城下町の場所を様々な視点から広く検討したものと思われます。そうした検討を経た上でやはりこの松江を選定したのは、前項で述べたような宍道湖・大橋川・中海という出雲国を東西に貫く水の大動脈

のうちで、白潟と末次が大橋川の咽喉部ともいべき位置を占めていたことと、開府以前に両岸が一体化した町場を形成していたからであります。

したがって、松江城と城下町松江は、水の恵みを受け止めるとともに十二分にそれを活用することを目指して建設されています。まず、大橋川と白潟砂州の南側にあたる天神川は、まさに水による自然の障壁です。つまり、大橋川北岸の居城と城下町の主要部を、この二重の遮断線で防衛しようとしていることは明らかです。「堀尾期絵図」によると、天神川の西北端の付け根は勢溜りとされ、L字型の土塁で枳形が造られています。

さらに、居城と城下町の主要部には巧妙に堀を巡らすことで防御線としています。末次砂州の北側には京橋川と呼ばれる堀が掘られ、外堀を構成しています。砂州上に配置された町人地（現茶町等）と内山下（現殿町等）の間に架けられた京橋の北側の付け根にも勢溜りが設けられていました。



「堀尾期松江城下町絵図」による松江城下の堀と橋
松江市ふるさと文庫6『堀尾吉晴－松江城への道』より転載

おそらく、この京橋川の開削は、末次砂州の北側の後背湿地を利用して行われたものと思います。というのも、一般に砂州の裏側は砂州を越えてあふれた水が滞留して水分の多い軟弱な土地になりがちですが、末次砂州の北側の後背湿地についてはこれとは別の要因も考えられるからです。

それは前述した末次地域の地形環境によっています。つまり、前述のように三坂山山地からは、南側の大橋川に向けて、宇賀丘陵が逆T字型に末次砂州に向かって突き出していました。その南端にかつて荒隈城が築かれた荒隈山も、三坂山山地から宍道湖に向かって伸びた低丘陵です。したがって、二筋の低丘陵の間、つまり白鹿山付近を北端とする集水域から流下した山水は末次砂州の北側に滞留したものと考えられます。

現在、上記の集水域から流下する山水は、宇賀丘陵に沿った東側の北田川と、中央部の中川、西側の比津川によって運ばれています。このように三本の川によって制御される以前は、おそらく宍道湖に向

かって二筋の低丘陵の間を自在に蛇行しながら南下していたのでしょう。

いっぽう、宍道湖の湖水は、南方から伸びる白潟砂州によって遮られますから、吐出口としてはその北端しかありません。そこへ北方から流下した山水が流れ込むのですから、その先端部分に砂州が形成されたのでしょう。そして、その川口は東側にL字型にねじ曲げられ、さらに砂州を東方へと成長させていったものと考えられます。末次砂州の成因とその成長は以上のように推測することができます。

もちろん、末次砂州が成長して河口を東へ東へと移動させると、白鹿山付近を北端とする集水域から流下した山水はまずは途中で滞留して低湿地を形成します。これが「堀尾期絵図」には「ふけ田」（湿地）と表記されている地域で、現砂子町から黒田町に広がる標高が1mを下回る低地にあたります。

したがって、西側の外堀にあたる四十間堀はこのような低湿地を利用して開削されたものでしょう。つまり四十間堀は、北方から流下した山水と、周囲の低湿地からの浸出水を蓄える貯水池の役割を果たしています。そして、さらにこれを京橋川（南側の外堀）へと誘導する機能を持たされていました。

ただ、土木史的に特に水理学や河川工学から見ると、白鹿山付近を北端とする集水域の山水の全量を、四十間堀を経て京橋川へ誘導し、さらに京橋川を通じて古松江湖に落とすことはできないのだそうです。^(注7) つまり、簡単に言って、あふれ出る水は「ふけ田」はもとより武家地をも浸水させてしまうようなのです。

ここに、宇賀丘陵を切断するという大工事が行われた理由があります。つまり、北方から流下する山水をじかに古松江湖に排水する必要がある、そのために宇賀丘陵を掘削して水堀（いわゆる北堀で、この部分では松江城の内堀と外堀が一体化している）を掘る必要があるというのです。現状でも、宇賀丘陵沿いの北田川と中川の流量はほとんど北堀が受けて排出しているのです。

もとより宇賀丘陵の切断工事は、北方の白鹿山あたりから丘陵伝いに松江城を攻撃しようとする敵に対抗する大規模な堀切の機能も持たせたものでした。この土木工事によって、江戸時代の軍学者の言ういわゆる「陽山」に改造したわけです。なお、宇賀山を掘り崩したとありますが、丘陵の山頂部（ピーク）ではなくて宇賀丘陵の鞍部を掘り切ったものと思います。

さらに、四十間堀から北堀、そして京橋川という幹線となる水堀に加えて、北田川と京橋川を南北につなぐ米子川は東側の外堀を構成するものでしたし、幹線から派生して本丸と二之丸を取り囲む内堀や、内中原には中堀も掘られました。そのような水堀の開削によって、内山下はもとより田町や内中原の武家地の複郭化がはかられたのでした。

なお、こうした鳥瞰図的な松江像に対して、織豊系城郭の成立から近世城郭への発展という城郭史のなかに位置づけて分析する視覚も重要です。織田信長が安土城を築城したのを最初として、信長とその後継者である豊臣秀吉自身と配下の武将たち（言うまでもなく堀尾吉晴は秀吉子飼いの大名の一人）によって、石垣を巡らし瓦葺きで高層の礎石建物のそびえる城郭が築かれます。礎石建物と瓦、石垣の三要素をセットで備えた城郭を、中世の山城に対して織豊系城郭と呼んでいます。シンポジウムのコーディネーターを務められる中井均氏は、この織豊系城郭^(注8)という概念を、最も早く明確に打ち立てられた研究者です。

なお、この視覚からは、同時期の他と比較した松江城の縄張の特徴はもとよりですが、たとえば堀尾氏による浜松城や富田城の改修と松江城との連続性や断絶、出雲国内で支城として整備された三刀屋尾崎城や赤名瀬戸山城の特徴、あるいは破城を含めた堀尾氏の城郭政策、石材を初めとする大量の資材の確保や労働力の編成など、解明すべき幾多の課題が残されています。

4. イメージの修正が必要か 天守の再調査とその意義

松江城の天守については、昭和25年から30年にかけて行われた解体修理にあたって詳細な記録がとられて報告されています。『重要文化財松江城天守修理工事報告書』^(注9)がそれです。これをていねいに読み解くことによって、解体修理直前の天守の構造や施工の状況を知ることが出来ます。

ところが、最近の調査によって、当時は注目されなかった事実が光が当てられました。それは、松江城の国宝化を推進するために設けられた松江城調査研究委員会の神奈川大学西和夫教授を中心とする建築史部会の調査による成果で、要約すれば、天守の旧観は望楼部が現状より狭く造られていたということです。つまり、後世、東西方向に切妻屋根が張り出されて現状のような外観になったということです。

私たち松江に住む者にとっては、松江城天守こそが天守建築のスタンダードになっています。つまり、各地に現存する天守を見る場合はもちろん、復原天守や古写真などでしか見ることの出来ない天守に対しても、無意識のうちに松江城の天守を基準としてそれと比較対照しながら見ていると思います。

松江城天守の基本構造は、二重の大屋根の上に望楼部が載せられたいわゆる望楼型なのですが、その絶妙なバランスによって、日々仰ぎ見る私たちに天守の安定感や重厚さを印象づけてきたと思います。それが、このたびの調査成果とこれに対する各方面からの批判的検証によっては、私たちの固定的なイメージを改める必要があるでしょう。

5. 姿を見せ始めた城下町松江 城下町遺跡の語るもの

城下町遺跡の発掘調査が進められた結果、地下に埋もれた武家屋敷や町人地のありようが浮かび上がってきています。発掘調査は大きく二カ所で進められています。

一カ所は、松江歴史館の建設にともなって行われた調査です。松江歴史館の敷地面積のほとんどが調査範囲とされましたから、市街地でのまとまった調査の規模としては最大のものと言えます。しかも調査地点は、堀尾・京極・松平の三代のいずれの時期にも筆頭かそれに次ぐ重臣の屋敷地ですから、当主やその家族などの公私の生活をはじめとして、さまざまな情報を提供してくれています。また、ふいごの火口が出土するなど、武家地とされる以前の使われ方も興味をそそる成果です。^(注10)

もう一カ所は、県道城山北公園線（通称大手前通り）の改修工事にもなう発掘調査です。これは道路の拡幅工事によるものですから、松江城下の橋北地区を、東西に横断するベルトのように調査地点が設定されています。この中には殿町と母衣町の内山下と呼ばれた中核地域、さらに外堀に沿って配置されていた米子町から南田町も含まれます。

もちろん、個々の調査範囲は狭く、しかも改修工事の進捗状況に追われて調査期間を設定せざるを得ないなど、調査員泣かせの発掘調査となっています。したがって、ベルトのような調査範囲の全容が明らかになるのはまだまだ時間を要しますが、興味深い成果が現れています。たとえば、敷き詰められたウラジロは敷葉工法として現代につながる技術ですし、大畦と無数の足跡とは開府以前の水田景観を彷彿させる発見と言えるでしょう。

むすびに代えて

基調報告でありながら、はじめにお断りしたとおりに、文献・歴史地理分野と土木史分野に厚い報告となってしまいました。城郭史と建築史からの三人の報告と、シンポジウムの記録で補完してくださるようお願いします。

なお、『松江市史』『別編 松江城』の編纂に当たっては、1 文献・歴史地理、2 城郭史、3 土木史、

4 建築史、の 4 分野に分けて、グループごとに調査と研究を進めてもらっています。もちろんそこには各分野の第一線の研究者を専門委員に委嘱しております。別掲の松江城部会委員名簿をご覧いただき、情報や提言を直接にあるいは間接的にお寄せくださるようお願いいたします。

(注1) 井上寛司「中世山陰における水運と都市の発達」『戦国期権力と地域社会』1986 所収、「中世西日本海地域の水運と交流」『海と列島の文化 第2巻』1991 所収 など

(注2) 長谷川博史「中世白潟と内海水運」島根県中世史研究会報告 2009 など

(注3) 売布神社文書は現時点では未刊行であるが『松江市史 史料編 中世』に収載される予定

(注4) 東京大学史料編纂所蔵「松浦文書」

(注5) 松尾 寿「島根大学附属図書館所蔵『堀尾時代松江城下図』について」『島根大学附属図書館報 松風』54 1997 所収

(注6) 西島太郎「『堀尾期松江城下町絵図』の制作工程と伝来」『日本歴史』第755号 2011 所収

(注7) 元島根県河川課長塚本隆富氏のご教示による

(注8) 中井 均「織豊系城郭の画期」『中世城郭研究論集』1990 所収など

(注9) 重要文化財松江城天守修理事務所 1947

(注10) 松江市教育委員会・教育文化振興事業団『松江城下町遺跡(殿町287番地)(殿町279番地外)発掘調査報告書』2011

松江城の縄張りについて

城郭史グループ 山上 雅弘
(兵庫県立考古博物館)

はじめに

関ヶ原の合戦（1615）の恩賞によって堀尾吉晴は出雲・隠岐の大名となり、当初は尼子氏以来の月山富田城を居城としましたが、慶長12～16年（1607～1612）にかけて松江に新城を築きます。しかし、この築城前の慶長9年、藩主である息子の忠氏が亡くなり、孫の忠晴が藩主となります。幼少であった忠晴は吉晴の後見によって築城を実施することとなります。

元和6年～寛永10年（1620～1633）頃に作製された「堀尾期松江城下町絵図」（島根大学附属図書館蔵）によって築城当時の松江城の姿をみると、松江城及び城下町（武家地・町人地）の姿が描かれていますが、ほぼ江戸時代に見る町の姿が出来上がっていたことがわかります。つまり近世松江の城郭及び町は堀尾氏によってほぼ確定していたのです。そこには堀尾氏の並々ならぬ思いを感じることができます。



1. 縄張り

まず、松江城の基本的な縄張りを確認したいと思います。松江城は三坂山山地から宍道湖に張り出した亀田山（標高28.4m）に選地されました。築城は、亀田山周辺および三之丸を囲んで内堀を巡らし、城郭域が確定されました。主要な郭は頂上に本丸、南側に二之丸、本丸の東側の山裾に二之丸下ノ段が配置されました。さらに、本丸の北側には北之丸（現護国神社・上御殿跡）や城山稲荷神社などが立地する平坦地があります。また、本丸西側は西内堀との間に後曲輪・外曲輪などと呼ばれた郭がありました。一方、南側は三之丸とその西側に御花畑がありました。このうち御花畑を除いた範囲が城郭域と考えられます。さらに、外郭には町を囲む堀として西側に中堀があり、東側の米子川および西側の四十間堀が外堀の役割を果たしていました。^{（注1）}

そして、亀田山周辺の郭で特徴的なことは、北之丸（現護国神社・上御殿跡）や城山稲荷神社、後曲輪・外曲輪といった北側や西側の郭には石垣がほとんど見られず、郭造成も簡易で、重要な施設が置かれた形跡がないことです。むしろ、自然地形をそのまま残しているといってもいいぐらいです。さらに、天守・櫓などの配置についても天守が東側に寄り、本丸の祈祷櫓・武具櫓、二之丸の太鼓櫓・中櫓・南櫓などが東面に集中します。このように松江城の景観は、東側を重視した構造となることも特徴的です。^{（注2）}

さらに、東側が重視される点は、大手道の配置や石垣の構築にも如実に現れています。東側の石垣は高石垣で構成され、高さも10m前後のものが多く、大規模で整然とした石垣が築かれています。

また、大手道についてもこの点は同じです。大手道は城の南東側、柵門から二之丸・本丸へと上るルートを通ります。まず、城外から柵門を潜ると馬溜と呼ばれる広大な虎口空間に入ります。ただ、虎口空間とはいっても1つの郭といえるほどの大きさがあり、ここからはそびえ立つ高石垣や天守・櫓群（太鼓櫓・中櫓・南櫓）を望むこととなり、この虎口が松江城の玄関口であることを強く印象づけています。

さらに、馬溜の北奥には櫓門形式の大手門（南惣門）が江戸時代にはあったようです。一方、これに比べ西側の通路や門には大規模なものや格式を強く意識したものは認められません。

2. 慶長期、西国大名の築城

【築城時期と入国】

松江城の概略を確認しましたが、次に西国大名の築城についてみておきたいと思います。慶長期は、関ヶ原合戦によって領地を獲得した外様大名たちによって、全国的な新規築城に沸いた時期でもあります。西国の主な外様大名の築城を上げてみると次のようになります。

慶長6年（1601）には姫路城（～同14年）・高知城（～同16年）・福岡城（～同12年）・熊本城（～同12年）・小浜城（～寛永19年）、慶長7年には伊予松山城（～寛永4年）・小倉城（～同13・15年天守上棟）・佐賀城（～元和元年）・今治城（～同9年）、慶長9年には萩城（～同13年）・津山城（～元和2年）となります。（なお、括弧内の～年は一応の工事が完了した年です。）

ここで特徴的なのは、多くの城郭が慶長9年までに築城を開始し、松江城が築城を開始する慶長12年前後には、外様大名の築城は一応の工事を終えたものも少なくない点です。つまり、松江城の築城は開始がやや遅れた印象が強いのです。ここで思い出されるのが、松江築城に当たって吉晴・忠氏父子の間で候補地をめぐって意見が食い違い、忠氏の急死によって吉晴がこれを受け入れた逸話です。この話の真偽は別として逸話の裏側には新城の候補地や工事方法について藩内で議論があったことが推測されます。おそらく、実際の築城開始について足踏みする要因があったのでしょう。

ここからは推測ですが、その1点目は堀尾氏が領主として移封後すぐに領内に影響力を持ちえたのかどうかという点です。富田城では出雲国内を治めるには限界があったのですが、地縁のない堀尾氏ではいきなり領地の奥深い場所に移るのは無理だったことが推測されます。次に、私が大きな問題だったと推測するのが地形の問題です。亀田山そのものは丘陵上にありますが、周囲は湿地が大半を占めており、郭や武家屋敷が立地する上ではかなりの工事を要することが予測され、その工法や選地プランについて躊躇があったと思われるのです。さらに、藩主の急逝も影を落としたでしょう。つまり、こういった要因が重なって築城に二の足を踏む時間が長くなった結果、藩内に意見対立を生む結果となったのではないのでしょうか。これが、築城開始が慶長12年まで遅れた真相ではないのでしょうか。ただ、この出足の遅れが後々の松江城の築城に大きく影響を及ぼしたと思えます。

【慶長期築城の諸特徴】

この時期の築城の特徴としては、次のことが考えられます。

①慶長期（1596～1615）、関ヶ原合戦から大坂の陣までの期間は、新たに領地を得た大名たちの築城が慶長6～9年頃までに開始されます。しかし、その工事の多くは彦根城・姫路城などの幕府方ないしこれに近い大名の城郭では第1期工事と呼ぶべきもので、元和・寛永期（1615～44）に第2期の追加工事が行われることが一般的でした。一方、外様大名では元和の一国一城令（1615）によって城の築城は規制を受けることとなってしまいます。従って、着工が早く元和年間までにさまざまな工事に着手できた城郭では、城の背後に至るまで高石垣や建築物を構築できましたが、着工の遅れた松江城ではこれが叶わなかった可能性があります。

②公儀の援助による築城である彦根城のような城郭の築城でも、慶長期の築城箇所は限定的で、築城工事には長い時間と多くの労力を必要としたようです。^{（注3）}

③多くの城で古材の転用や、旧石垣の転用など、旧城の資材や縄張りを活用することは一般的に行われており、こういった現象は当時では一般的なあり方でした。②と③からは、当時の築城にとって工事

実施や資材の調達が現在の感覚とはかなり異なって、制約の多いものであったことが推測されます。

④新興大名たちの築城は、旧主の勢力や地域有力者たちの反発がかなりあったと予測されます。このことは土佐の浦戸一揆などで知られるとおり、史料にはあまり現れませんが、松江城においても注意深く検討する必要があります。

さらに、縄張りの特徴としては、次のような点が考えられます。

①元和期以降のような、全体に方形を意識した縄張りの城郭が、まだこの時期は未発達な段階でした。特に松江城のように丘陵を取り込んだ城郭では、中心部が不定形な形状になりやすいようです。

②本丸の詰め城化が進行する過渡期で、御殿の場所とともに徐々に本丸が空間地化する傾向がありました。

③枳形虎口が採用され虎口空間の大規模化と門構造の恒久化が進みますが、定型化したものではなく、バリエーションが見られます。その城独特のものが多く特徴的な築城が各地で見られました。

④一般大名の築城においても大手道が他の登城道と区別され、防御的な側面と、権威と格式を意識した側面の両面から特別な道として整備され、意識的に大規模化が計られました。

③については、この後に登場する親藩・譜代の平城である篠山城・名古屋城・明石城・尼崎城・高槻城などが典型で、強く方形が意識されています。慶長期はこの現象がまだ過渡期で、方形化や詰め城化・枳形の定型化などの諸要素は未完成であったようです。

3. 松江城の検討

以上、築城と縄張りについて基本的なことを確認しましたが、ここからは松江城に戻って縄張りを検討してみたいと思います。

【大手道と枳形虎口の問題】

松江城の大手道は他の通路に比べて特に厳重で大規模に構築されています。これに加えて、天守や櫓群など周囲の構造物との景観もこの道を意識した設計となっています。こういったことは、高知城の大手道の通路幅や、津山城の幅10 m以上の大手階段にも共通するところです。時代は少し下りますが、鳥取城でも大手の枳形から二の丸への登城道があり、近年この復元に向けた整備が進められています。こういった構造は織豊期ではもっぱら信長・秀吉などの天下人の専売特許でしたが、この時期には一般大名の居城でもかなり意識しているようです。

さらに、登城道に合わせて大手門に相当する部分には大型の枳形が整備されることも一般的でした。ただ、こういった枳形は戦国時代に発生し織豊期城郭へと段階を経て発展した遺構といわれてきましたが、実際には整った方形の空間と、高石垣で周囲を囲む形態は慶長期頃からのものと考えられます^(注4)。さらに織豊期から慶長年間の前半頃の枳形には前門（一の門）に高麗門、後門（二の門）に櫓門のような定型化したものばかりではなく、前門（一の門）を欠く事例^(注5)や、大型の櫓門（もしくは楼門）の前に前庭空間を持つだけのものなど、バリエーションがあったようです。こういったバリエーションがなくなり画一化が進むのは大坂の陣（1614～15）後の元和年間以降^(注6)ではないかといわれています。従って、この時期の枳形には独特のものが多く、松江城の大手虎口が広大な空間を占めて、見るものを圧倒する構造を持つことも、この時期の特徴と考えられます。ただし、大規模化は防御的な側面（もちろんそのことも充分意識はされていますが）のみでこのような構造になるのではなく、権威や格式を意識した発想も大きく影響を及ぼしていると考えられます。また、松江城全体でも、一の門・二の門が揃い、方形の虎口空間をもつ典型的な枳形は存在しません。この点は姫路城の内堀内^(注7)や高知城においても同様のことが言えます。慶長期末～元和期頃以降に見られるような定型化した虎口構

造はまだ一般化していなかったのです。まさに松江城の縄張りの特徴はこの時期の時代を反映していると考えていいでしょう。

【方形プランと慶長期築城】

松江城の城郭部分においては“表側”である東側や三之丸などを見る限り、方形プランをかなり意識した縄張をもつといえます。このことは城下町の碁盤目状の設計ともあわせてみると、原則的には方形を意識することを目指していることがわかります。しかし、亀田山の北・西側では不定形な地形が放置されたままですので、方形プランが貫徹した状態とは言いがたい状況です。この点は、やはり高知城・姫路城をみても共通しています。一方、慶長14（1609）年築城の篠山城、同15年築城の名古屋城、元和3（1617）年築城の明石城などでは台地や丘陵を無理やり改変して方形の郭を造っています。従って、単純に松江城の工事が実施されなかったというのではなく、松江城築城の段階はこのような徹底した築城の考え方が生まれる前夜だったために、工事の実施に積極的になれなかったとも考えられるのです。この点においても松江城の縄張りは慶長期の特徴を示しています。

【詰の丸となる本丸】

さらに、本丸に目を転じてみましょう。本丸の内部には前述の『堀尾期松江城下町絵図』ではいくつかの建物が描かれますが、御殿はなかったようです。つまり築城当時から本丸は、天守を中心とする詰の丸であったことが推測されます。しかし、その割に本丸は広い面積を有しています。ところで、姫路城では池田期に天守の前面にある備前丸に御殿があったといわれます。また、彦根城でも本丸の天守前に元和年間までの短期間、御殿が置かれてましたが、その後山麓の二の丸に移っています。鳥取城も二の丸が御殿となりますが、山麓の最上段の郭は天球丸で、この郭はどのような機能を持っていたかは明確ではありません。山頂の郭が手狭であるため山麓に御殿を移すという事例もよくあることですが、多くは元和年間以降に行われています。例えば、先ほどの姫路城は元和年間に三の丸に御殿を移動しますが、明石城でも寛永8年（1631）の本丸御殿大火によって御殿を三の丸に移しています。

このように、実は近世城郭では本丸が詰の丸として象徴的な空間となる現象が慶長期以降には進行しました。ただし、例外もあります。例えば津山城は築城以来、本丸に御殿が維持されています。さらに広島城も本丸御殿のままです。これらの城郭では周囲の土地利用が確定しており適当な移動場所がなかったことが予測されることと、もともと広い面積の本丸が確保されていたことが、移動しなかったことの理由として考えられます。しかし、その意味で言うと当初から詰の丸を計画していたとするならば、松江城の本丸は広すぎる気がします。高知城の本丸は天守のみが建ちますが、あまり広くありません。一方、明石城は元和4年の築城ですが、元々本丸御殿を建てるために広い面積を確保していました。松江城の場合も、御殿施設が本丸に構築されても、広さからすれば不思議ではなかったはずです。これらを考えてみると、松江城では本丸において何らかの方針変更が起こった可能性を私は考えたいと思います。つまり、松江城の本丸は当初、御殿を設置することを計画したものの、途中で二之丸に変更したのではないかと思うのです。あくまで推測ですが、このように考えれば、本丸の広い空間を説明できるのではないのでしょうか。

【その後の築城】

慶長期の松江城の築城は他大名に比べても遜色のないものだったと思われます。さらに、城下町についても大規模な設計と短期間のうちに広い面積の造成工事を実施しており、その後の松江の町の発展にとって大きな恩恵となったことが考えられます。そして、このことから築城と町造りにかける堀尾氏の強い意気込みが垣間見えてきます。

しかし、城郭を見ていて思うのはその後のことです。彦根城や姫路城における元和年間以降の築城が

松江城でも行われたのでしょうか。結論から言いますと、規模の差はありますが、あまり積極的に行われなかった可能性が高いでしょう。

堀尾氏のあとに京極氏が藩主となります。わずか4年の治世であったのですが、多くの土木事業を行ったことが伝わっています。^(注8) とりわけ、土木事業では京極忠高が若狭土手を建設したことが印象的に伝わっていますが、京極氏のみの事跡という点は何か不自然です。現代でもこのような大規模な土木工事は設計から始まって完成までには長い時間を要します。おそらく、縄張りや事前の準備を含めるともう少し時間が必要だったと考えたほうがいいでしょう。そうすると、こういった土木事業は堀尾氏の段階からさまざまな計画が進められ、若狭土手の工事も着手直前の段階にあったと考えるほうが自然です。つまり、堀尾〜京極へと藩主家（家臣団も含めてですが）の交代はあるものの、インフラに対する公共工事は中断なく続けられていたことが推測されるのです。こういった事業が領内において優先されたことや、元和の一国一城令（1615）による幕府の統制によって、城郭内の西・北側の築城は放置されたのではないのでしょうか。

さいごに

いろいろと松江城の縄張りを考えるための検討を行ってきましたが、以上までのところをまとめておきたいと思います。堀尾氏による松江城築城は、基本的にはこの時期の一般的な縄張りに則ったものでした。ただ、城下町も含め全体的な都市造りが築城と同時に進められ、慶長16年までにほぼ完成したと思われませんが、この点については、堀尾氏の並々ならぬ決意と、徹底した意思が感じられるものでした。縄張りについていえば、亀田山の造成、内堀の掘削や高石垣の構築は大規模なもので、東側を限定的に構築するという制約はあるものの、大手道の整備や天守・諸櫓・御殿などが一貫した設計プランの基に構築されました。築城・町造りという一連の事業における基本的なプランが、その後の江戸時代を通じて大きく変更されなかったことをみても、これが優れたものであったことが窺われます。

しかし、譜代大名や幕府方に近い他の城郭で行われた第2期工事とも呼ぶべき、北側・西側の増補・改修は松江城ではほとんど実施されなかったと考えられます。これには福島氏の改易（元和5年）に見るように、元和の一国一城令による幕府の締め付けが大きく影響しているものと思われる。これに加えて、領内のインフラ整備や城郭・城下町の補修や改修が忙しく、城郭について北側・西側のさらなる築城に踏み出せないまま、藩主家の交代などが続いたことなどが影響したのではないのでしょうか。松江城が慶長12年ではなく、もう少し早く築城を始めていれば、亀田山の北側・西側についても工事が進められた可能性があります。築城初期の段階での躊躇が後々の城郭構造にも影を落としたことは否めないでしょう。しかし、江戸時代を通じてこの姿が維持され、松江城の“かたち”として今日まで親しまれてきました。築城にまつわる歴史的な経過も含めて、この姿こそが尊重されるべきものと思われる。そのことが先人の歴史を踏まえることでもあるでしょう。

(注1) 島根県『新修島根縣史通史編』一 1968

(注2) 山根正明『堀尾吉晴－松江城への道－浜松、富田、松江、城普請の軌跡－』松江市教育委員会『松江市ふるさと文庫』6 2009

(注3) 早川 圭「彦根城跡本丸御広間の建物遺構について－近世初頭の山城における本丸御殿の再検討－」城郭談話会『近江佐和山城・彦根城』2007

(注4) 高田 徹「近世城郭における枡形虎口」『中世城郭研究』14号 2000、山上雅弘「枡形虎口」『季刊考古学』第103号』2008

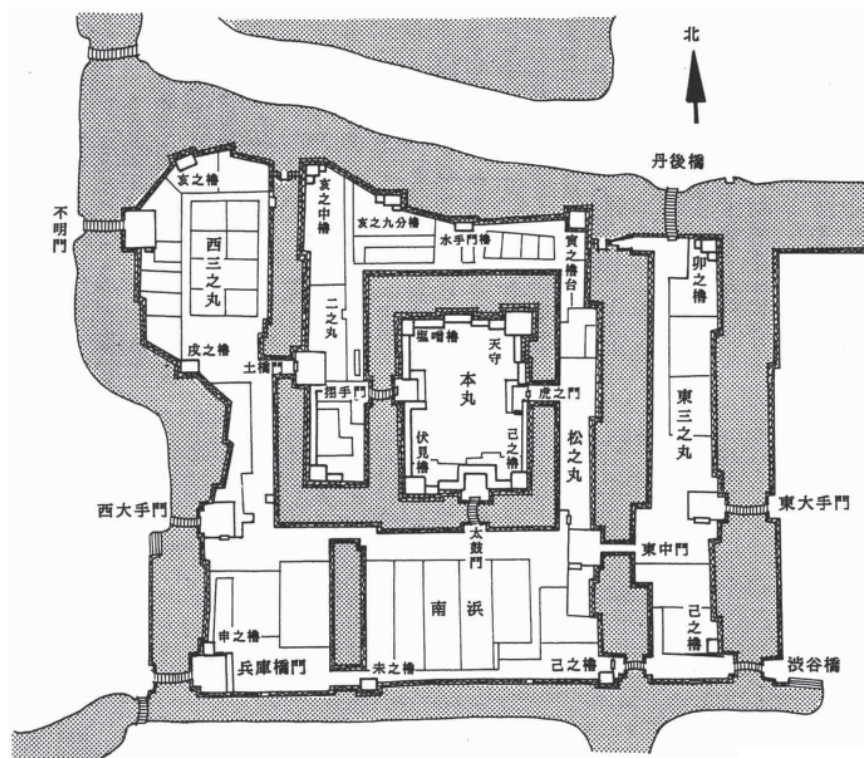
(注5) 中井 均「虎口『空間』について」織豊城郭研究会『織豊城郭』第6号 1999

(注6) 千田嘉博「集大成としての江戸城」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集 1993

(注7) 多田暢久「姫路城」『よみがえる日本の城』4 2004

(注8) 西島太郎『京極忠高の出雲国・松江』松江市教育委員会『松江市ふるさと文庫』8 2010

尼崎城跡



尼崎城縄張図（松岡利郎1991「尼崎城の特徴」『大阪春秋』第64号 P16 より転載）

堀尾期の松江城



「堀尾期松江城下町絵図」(主要部)(島根大学附属図書館蔵)

松江城天守と城郭施設について

建築史グループリーダー 和田 嘉宥
(米子工業高等専門学校名誉教授)

はじめに

堀尾氏によって慶長12年(1607)から同16年(1611)にかけて築城された松江城は、堀尾氏断絶後、京極氏の時代を経て、寛永15年(1638)に松平直政が入府し、以後、松江城の維持・管理は230年間にわたって松平氏によって行なわれてきました。明治になって郭内の諸施設は取り壊されることになりましたが、天守は残り、昭和25〜30年に解体修理され、今日に至っております。



現存天守については、基調報告にありましたように『重要文化財松江城天守修理工事報告書』(以下『工事報告書』と記す)に詳細な記録がまとめられていますが、平成22年に松江城調査研究会(会長／西和夫)が組織され、改めて総合的な調査研究が実施され、『松江城天守調査研究報告書』(以下『中間報告』)^(注1)にまとめられています。まず、この『中間報告』から「創建当時の姿」の検討結果を報告しておきます。

天守を除く城郭施設は現存していませんが、松江松平藩時代初期の城郭施設の状況は『(竹内右兵衛書つけ)』(以下『かきつけ』)^(注2)によっておおよそ把握できます。また、松江城の諸施設は同時期に書かれた『松江城縄張図』(以下『縄張図』)^(注3)と照合することによってその所在も明らかにできます。『かきつけ』及び『縄張図』によって確認できる松江城城郭施設の特筆すべき事柄を抜き出し、それぞれについて確認事項及び検討内容をあげてみます。

『かきつけ』の城郭に関する記録年および『縄張図』の制作年は不明ですが、その記載内容から同時期に書かれたものと考えられます。両史料の記載内容を通して制作年代を検討したいと思います。

松江城の城郭施設の修理関係記録については、いくつかの史料及び刊本によって確認できます。これら史料及び刊本にある修理関係の記録を抜き出し「松江城城郭修理関連年表」(付表)を作成してみました。これらの記載事項から、ここでは特に松江城天守の変遷について考察を加えてみたいと思います。

1. 創建当時の天守の姿について

西和夫氏によってまとめられた『中間報告』は、第1章「調査について」、第2章「本論」、第3章「創建当時の姿の検討」からなります。ここでは、第3章「創建当時の姿の検討」の要点を述べ、創建当時の松江城の姿について考えてみたいと思います。

報告書では、まず、「天守の大きな特色として、地階から3階までと4・5階とではさまざまな相違があることを指摘することができた。」と述べ「一部新たな知見を加え」次のように整理されています。

- ① 1・2階の柱は彫込番付、3階以上は墨書番付が付されている。
- ② 地階の部材に「富」の刻印をもつものが少なくとも2本ある。
- ③ 4・5階は1〜3階より修理が多い。
- ④ 5階の柱は縮められている。

⑤ 1～4階と5階では柱の太さが異なり、5階だけが細い。5階の面幅は1／14～1／13で、4階以下は面をとらないか、丸太の様相を残す太い材である。

⑥ 5階はかつて薄縁または畳敷きで、建具が入っていた。

報告書は、上記を踏まえて、「天守の歴史的発展」（望楼型から層塔型へ）をベースにして、松江城天守は「1・2階の大きな屋根が最初の館の形式をとどめ（ただし、破風位置は変っている）、3～5階が望楼部分で、当初はもう少し小さい望楼があつて、後に現状の3～5階に変わったのではないかとということが考えられる。」と、創建当時の松江城天守の姿について新たな仮説を立てています。類例として取り上げられた犬山城については「慶長6年（1601）の創建時に2階建て（入母屋屋根の館、小さい望楼があつたらしい）であつたものを元和年間（1615～23）に3・4階を増築し、その10数年後に唐破風が付加されて現在に至っている。なお、3・4階の増築以前には小さな望楼がのつていたと思われる痕跡が、創建当初からの部材である2階小屋梁から見出されている。」と述べ、そして、「松江城天守も1・2階と3階以上、特に4・5階で様子が異なること、望楼型であることから、犬山城に見られるような成立過程を考えてみる必要があると思われる。」と述べ、さらに「松江城の地～2階と3階から上、特に4・5階では様子が異なることが再確認された。」ことから、「何故、上階と下階では様子が異なるのか、検討することが必要となる。」と、新たな検討課題があげられています。そして「当初の望楼部分を考えるとき、注目すべきことのひとつは、東西方向の5階の床下にある桁が東西にある4～5階通柱の内側にしか入っていないことである。」即ち「5階東西方向の床下の両端まで桁が入っていない。」ところから「この桁の長さがかつての望楼の大きさを示しているのではないか。」と新たな仮説が立てられています。

「まとめ」では、「従来、松江城天守の特色等についてさまざまな論考が出されたが、今回提示した仮説のような造営過程にまで踏込んだものはない。ただし、仮説の明確な裏付けはできていない。富田城からの移築問題、望楼の改変問題など、今後検討すべき問題も多くこのさされている。これらについては今後の課題としたい。」と、いくつかの問題点をあげ、「天守の1・2階と3階以上では様子が異なる」点の検討課題としては、「各階の柱の時代判定が有効」として、「①富の刻印のある部材 ②地～2階の部材 ③3階以上の部材 ④5階の部材、のそれぞれについてサンプルをとり、測定してみることはできないか、検討したいところである。」と時代判定の必要性を強調し、さらに「『富』の刻印のある部材は富田城から運搬されたものではないかとする伝承」があるところから、「『富』の刻印のある部材については、白太部分まで残存」しており、「年輪年代法による検討も行うことが必要ではないかと考えている。」としています。現在、この部材調査が松江城国宝化推進室によって進められております。

2. 『かきつけ』に見る松江城城郭施設について

『かきつけ』の城郭施設は天守・本丸、二之丸、二之丸下ノ段、新屋敷に分けて記載されています。これらの城郭施設を『縄張図』と照合すると、施設等の所在位置がほぼ明らかになります。「松江城城郭施設図」（付図（P〔58〕～〔59〕）は『縄張図』を基に作図したもので、付した番号（本〇、二〇、下〇等）は『かきつけ』に記載されている諸施設の位置です。その上で、『かきつけ』の記載内容について検討を行い、特筆すべき事柄を列記し、それぞれに対して確認事項及び検討事項を取りあげてみます。

1) 天守（本1）

- ・柱の数が、現存天守に対して地階で2本、5階で4本少ない。→現天守は『かきつけ』が記された後に改修されているためか、階によって柱の本数が現状と異なる。
- ・現存天守では、地階と上層階の柱通りが同じであるが、『かきつけ』では地階と1階の柱通りが一

部異なる。→後の改修により、地階部分の柱位置が替えられた可能性はないか。

- ・地階では中央列の柱2本が太く書かれている。→何故か（姫路城のような通し柱の痕跡とは考えられないか）。
- ・「三重目也西ニ破風在リ（後略）」、「四重目也南北ニ破風在リ」→この記述では、三重目には、当時、東側の妻は入母屋破風でなかったことになるが、ここは「東西」と記すのを誤って「西」と記したのか。

2) 本丸（『かきつけ』には「御本丸中」とある）

- ・「同太門西南之角へ取付御門 三間ニ五間也 下ハ御門ニメ上ハ走り也」→一ノ御門（本8）は二重で、上の重には「太門」とつながる「走り」が通っていた。（現状の一ノ門とは大きく異なる）
- ・「同所ニ御薬蔵式間ニ六間半ニシテ在たるのよし 今ハなし」→以前、「北行ノ太門」（本22）の近く（南？）に「式間ニ六間半」の「御薬蔵」が建っていた（但し、所在位置は確定できない）。
- ・「御天守南ニ六間半ニ八間之家有之のよし 今ハなし」→以前、天守（本1）の南には「六間半ニ八間之家（本丸御殿?）」が建っていた。
- ・「松江城縄張図」では「御台所」（本24）に薄紙が張られている。→『かきつけ』に記録された後、取り壊されたと思われる。
- ・「(前略) 此はん所ト太門之間ニ式間ノ塀東西ニメ有リ 石かん在也」→「はん（番）所」（本22）と「太門」の間に塀があるが、下（?）の「石かん」は「岩盤」（or「石棺」）か。
- ・「拾間四尺塀北より取付東へきりきり門迄之塀壹間余也」「きりきり門柱中すみ壹丈式尺計 棟東西ニ立」→腰曲輪の東にある門は「水の手門」ではなく「きりきり門」（本28）。
- ・「二ノ門式間はり三間 柱中すみ壹丈式尺余 但此門ハ二ノ丸と御本丸境也」→「二ノ御門」（本31）が本丸と二之丸の境界になっていた。

3) 二之丸（『かきつけ』には「二御丸中」とある）

- ・「下台所（中略）但 御作事小やニ成て有」→「下台所」（二4）は「御作事小屋」になっている。
- ・「同所より御広間へ之廊下（中略）但御作事小や物置ニ成て有」→「廊下」（二5）も「作事小屋物置」になっている。
- ・「御廣間より御書院へ之御廊下 壹間半ニ四間半 棟東西ニメ式間分東ノ方ろく屋根 壹間半ノ分ハ登りかんき 屋根も登り也」→この「御廊下」（二9）は西の1間半分が「かんき＝階段」である。
- ・「大門 桁行中壹丈四尺（中略）やくい門也」→「三ノ御門」（二31）は瓦葺きの薬医門だった。
- ・「二ノ丸中塀」（二37）は「総延長六十間余」→二之丸の西側（裏側）には屏風状の湾曲した折れ塀が巡っていた。

4) 二之丸下ノ段（『かきつけ』には「御本丸二丸下ノ段」とある）

- ・「大手之御門 三間半ニ八間ニメ式重也 志やちほこ有」→「大手御門」（下1）は桁行8間半に梁間3間半で二重、棟には鯨が付いた城内で最も大きな「御門」であった。
- ・「御小人小や 式間はり八間瓦ふき」の「御小人小や」（下3）は『縄張図』では上に紙張が張られている。→『かきつけ』に記載された後に取り壊されたためと考えられる。
- ・「源蔵居所 式間半はり十式間（以下略）」→「御門」（下1）と「御（米）蔵」（下5）の間に60坪の「源蔵居所」が建っていた。但し「源蔵居所」がどういう施設かは不明。
- ・「会所 三間ニ三間半 東ニ壹間半四方之中門共ニ」→「御蔵」（下5）と「御蔵」（下6）に囲まれた庭には「会所」（下7）があり、「下雪隠」（下8）、「塀」（下9）も付随していた。
- ・「荻田表長ヤ 三間はりニ東西ハ式拾式間 南北同（以下略）」→「荻田表長屋」（下12）はL字に

折れる建物。『縄張図』では、その内側に「荻田居所」と思われる建物平面が記されているが、『かきつけ』には「荻田居所」（住居部分）については何も記されていない。なお、「荻田屋敷」は『御作事所御役人帳』（以下『役人帳』^(注4)）より延宝7年（1679）の建築であることがわかる。

- ・「きりきり御門番人居所 三間二八間瓦ふき」→「きりきり御番人居所」（下18）は馬洗池の東側にある「御門」（下21）の東側に建っていた。（『縄張図』には貼紙あり不明）
- ・「東ノ楼門」（下16）に続いて、「丑寅ノ角柱より取付東へ壱間之堀」（下32）があり、さらに「此東より取付北へ式拾間、此の北より取付西へ四拾壱間半也」、「少戌ノ方へ振ル 此西より取付北へ五間 此北より取付戌亥ニ当りて三拾九間五尺式寸 此内忍折込六ヶ所有 先ハ新御屋布分堀也」とある。→「東の御門」からは、総延長107間ばかりの堀が折れ曲がり「新御屋敷」（上御殿、後山御茶屋）まで続いていた。

5) 新御屋敷（『かきつけ』には「新御屋敷之内」）とある。

- ・「南ノ表長屋三間梁二拾五間未申より辰巳に当り棟立」の記載のみ→「新御屋敷」は「出丸」（『元文絵図』）、「上御殿」（『御本・二・三丸御花畑共略図面扣』）、「後山御茶屋」（『御城内惣間数』）及び『役人帳』などと称される施設に該当し、「新」とあるところから、新しい施設と思われる。

3. 『かきつけ』および『縄張図』、『松江城惣間数』の制作年代について

『かきつけ』に記された諸施設は、『縄張図』と照合することによって、諸施設の所在と形態（階高、屋根葺材等）がわかり、幾つかの施設については、変更内容（消失、名称変更など）も確認できました。ただ、『かきつけ』に記されているのは本丸、二之丸、二之丸下ノ段だけで、三之丸については何も記されていません。（三之丸にどのような施設があったかは別の史料によって、改めて検討します）。

ところで、二之丸下ノ段には、「荻田表長屋」のことが記されていますが、「荻田屋敷」が建つのは前述したように延宝7年（1679）です。このことから、『かきつけ』に本丸・二之丸・二之丸下ノ段の諸施設が記録された時期は天和（1681～84）頃と考えられます。とすると、本丸・二之丸・二之丸下ノ段の諸施設が調査され『かきつけ』に記されたのは『列士録』^(注5)にある「元祖 竹内宇兵衛」と見られます。この「竹内宇兵衛」は松平直政に仕えて出雲に入国した「竹内右兵衛」の孫にあたり、寛文11年（1671）の親の跡を継いで「御大工頭」になり、享保2年（1717）に士列（御取立／作事奉行）に列しています。また、この「竹内宇兵衛」は貞享度造営の佐太神社では貞享元年（1684）に「指図板」も拵えています。その筆跡は『かきつけ』と同じとみなしてよいでしょう。これらのことから、竹内宇兵衛が「御大工頭」の時（1671～94）、1680年代に城郭の調査が行われ、『かきつけ』に城郭諸施設が記録させたと見なすことができます。

『縄張図』は、本丸・二之丸・二之丸下ノ段の城郭施設や石垣等が方眼上に正確に表示されており、前述したように『かきつけ』記載の城郭施設の所在並びに平面が具体的に確認できます。この図の制作年代ですが、①「荻田屋敷」は間取りらしき図が見られる、②二之丸の「下台所」（二4）は「御作事小や」に名称が変わっていない、等から1680年代でも『かきつけ』に城郭施設が記録される以前と見なすことができます。一方、「二之丸下ノ段」の貼紙「此所屋敷地」の下には「神谷勘左衛門居所」とあります。「神谷勘左衛門」は元禄11年（1698）から宝永7年（1710）まで「天守鍵預り」役でした。このことから、『縄張図』は17世後半から18世紀初頭にかけて書き加えられてきた城郭図のようでもあります。

この他、城郭施設について記録されている史料に『御城内惣間数』^(注6)があります。本史料は奥書に「明和三年丙戌卯月初旬写之者也 御破損方」とあり明和3年（1766）に書写されものであることがわかりますが、原本の制作は、「後山御茶屋」（元禄7年建築）に関する記述が確認できることから1694年

以後であり、さらに、「中廊」（二之丸下ノ段）の「御役屋敷」冒頭の記述「宝暦五年亥二月迄立直し出来」など、宝暦の修理に関する記述がいくつか見られるところから、18世紀中頃と見なしてよいでしょう。

4. 松江城天守の修理について～むすびに代えて～

最後に、これらの修理記録及び関連事項により天守の修理に関する事柄について考察を加えておきます。創建以来の松江城の修理に関する記録及び関連事項をわかる範囲で抜き書きしたのが付表です。

- 1) 松平氏時代の天守修理の初見は延宝2年（1674）で、以後、何度か行われているが、修理に関する墨書は元文4年（1739）以降のものが多く確認されている。3階以上の階を中心とする本格的な修理事業は、「天隆院年譜」に「天守修理」が記されている元文3年以降と考えられないか。
- 2) 『修理報告書』には「四重南隅」に「御奉行竹内佐助（中略）御大工斎田彦四郎（中略）四月九日」の墨書があると記されているが、この年代は、『役人帳』と斎田家『列士録』から延享3～4年（1746～47）頃と考えられる。また、この墨書に御作事所の奉行、大工名が記されているところから、この頃の修理を注目できる。つまり、3階から上部の修理は、18世紀中頃に行われたと考えられないか。
- 3) 修理に関する墨書（記録）から、天守は『かきつけ』が記された後に何度も修理が加えられていることがわかるが、柱の包板の一つに「享保四年（1719）亥十月改」（『修理報告書』による）とある。「包板」（「寄せ木」ではない）による補強（？）は、この頃から行われたと考えられないか。
- 4) 享保3年に斎田彦四郎によって天守の小形（模型）が作られているが、現存する模型との関連性はないのか。関連するとすれば、この模型は、享保3年当時の天守の姿であり、その後（18世紀の中頃の修理によって）、現状天守のように改変されたとは考えられないか。
- 5) 現存する天守の模型は二重目の大屋根の棟および三重目の屋根の棟に勾配が付き前面が下がっているが、現天守の棟は水平である。この違いは何を意味するのか。この模型は以前の天守の姿（創建当時の姿？）を伝えるものか。

（注1）『松江城天守調査研究報告書』（2011年3月、神奈川大学 西和夫）

（注2） 松江歴史館所蔵。松江市有形文化財。松江藩御大工の家柄であった竹内家に伝わる木割に関する家伝書で、内容は①年表②地形及び方位③武家住宅④松江城城郭施設からなっている。本誌P〔1〕～〔59〕参照。

（注3） 松江歴史館所蔵。

（注4） 野津家（松江市）所蔵。この史料については拙稿『松江藩御作事所と御大工に関する研究』（2001年2月、私家版）でその全容を明らかにしている。

（注5） 原本は国文学研究資料館所蔵、複写本は島根県立図書館所蔵。藩士の系譜・業績が記されている。

（注6） 国文学研究所資料館所蔵。

付表 松江城城郭修理関連略年表

西暦	和暦	月日	事 項	引 用	出典
	慶長 5	11	堀尾吉晴、出雲国主	堀尾帯刀吉晴、関ヶ原ノ戦功ニヨッテ出雲国ヲ賜フ	①
1603		8	松江築城認可される		⑧
		9 8 4	堀尾忠氏没す	忠氏様、八月四日ニ御遠行	②
1605		10	この年、吉晴新城の城地を亀田山に決定し、家老等に築城の準備をするように告げる		⑧
1607		12	松江城着工	慶長十二歳丁未ヨリ普請始り、同十六才辛亥マテ五年ノ間ニ城成就セリ、是今ノ亀田山ナリ	①
1608		13 12 2		松江越、十月二日	②
1611		16	天守竣工	御天守四重目並塩蔵之大般若札ニ慶長十六年辛亥と有之（中略）成就祈禱と見る	③
		2 5		山城様初而江戸御出、二月五日松江御立、五月二日ニ御帰城	②
		6 17	堀尾吉晴没す	吉晴様遠行、六月十七日	②
1633	寛永 10	9 20	堀尾家断絶	山城様ハ廿日ニ御果被成候	②
1634		11	京極忠高、松江藩主	閏七月六日出雲隠岐二国を賜ひ、二十四万石を領し、翌八月十七日来つて松江城に入る	④
1637		14 6 16	京極忠高逝去し、京極家断絶		⑧
1638		15 2 11	松平直政、松江藩主	竹内宇兵衛松江城を修理す	⑤
1674	延宝 2	9	石垣修理、上御殿	右之通絵図書付之所石垣築直申度奉存候以上 別之郭、今ノ上御殿ト云フ	⑥
1676		4	天守附櫓破風の修理	延宝四年卯月□□ 大工□左衛門	⑦
1679		7	荻田屋敷建築	荻田屋舗出来	⑨
1681	天和 1	6 21	荻田父子が、松江城二之丸下ノ段の荻田長屋住む		④
1686	貞享 3	5 19	松江城修復願いを幕府に提出		⑧
1687		4 8 18	佐田神社建立	佐田本社建立 八月十八日棟上 十九日遷宮	⑨
1690	元禄 3		三之丸寝間建築	三丸新御寝間出来	⑨
		5	姫様御殿建築	奥御姫様御殿共三百坪余出来	⑨
1694		7	後山御茶屋建築	後山御茶屋出来 田中御茶屋出来 天倫寺御霊屋出来 初	⑨
1697		10	石垣修理	三丸御門北多門石垣崩れ直し	⑨
		13	天守破風の部分修理	（懸魚の六葉）□禄十三庚辰四月 大工伝七同喜平地作	⑦
1718	享保 3	6 18	天守模型制作	御天守小形拵差上付而為御褒美二百疋被下之（斎田彦四郎「列士録」）	⑩
1720		5	この頃、城内図作成	三月御城内分限絵図被仰付出来差上付而八月御褒美二百疋被下之（斎田彦四郎「列士録」）	⑩
1732		17	この頃、城内修復	御巡見御越付而御城内御修復御用二付式人扶持御加扶持被下之（斎田彦四郎「列士録」）	⑩
1738	元文 3	3 11	天守修理	是日告ルニ月相府以ス雲藩松江城 天守遂テ年致シ損スル五層皆朽ルニ故斬修之	⑪
		7	石垣修理伺い	出雲国松江之城石垣元文二丁巳年十二月二日破損所之伺	⑫
		4	天守四重屋根の修理	（裏）元文四年四月廿日 檜皮中万といふ□	⑦
1741	寛保 1		天守三重屋根の修理	（表）寛保元年西 （裏）檜皮 権四郎 西五月卅日	⑦
1742		2	千鳥城大修理、寄木を加う		⑬
		3	天守四重屋根の修理	寛保三年亥四月廿九日 大工定次郎	⑦
			この頃、稲荷社造営	御城内稲荷社御造営ニ付肝煎被仰付（斎田彦四郎「列士録」）	⑪
1750	寛延 3		二之丸上台所取毀	（上台所）御議定ニ而崩ス	③
1755	宝暦 5		きりきり門迄の塀修復	東側不残建直し南北路ニ成ル	③
		8	下ノ段米蔵修復	（南御蔵）御修復、三拾九間ニ成ル 西ニテ三間縮	③
1778	安永 7		石垣破損	出雲国松江之城石垣破損之覚	⑭
1799	寛政 11	3 14	幕府の修繕願い	松江城修繕を官に請ひて充される	⑰
1815	文化 12		天守五重東棟の修理	文化亥六月十四日 未□文化 谷吉一二	⑦
	明治 3		天守四重屋根の修理	明治三年巳三月十四日此所屋根仕舞仕候此節…	⑦
1875	明治 8	5	天守を除く櫓等撤去	天守を除く櫓等一切の建物が解体される	⑦
1890		23 1 21	松江城地が第五師団から松平直亮に払下げらる		⑬
		27	天守の大修理	明治廿七年秋 天守閣大修繕之際 棟梁	⑦
1898		31 10 2	川津の楽山神社を移転して松江神社建立		⑬
1903		36 9 16	興雲閣完成	松江城山に興雲閣完成	⑬
1934	昭和 9	5 1	松江城史跡指定		
		13	旧国宝指定	松江城ハ堀尾吉晴築キシ所ニシテ、慶長十三年起工、慶長十六年功ヲ竣ヘタ（以下略）	⑯
1955		30 3 31		松江城天守閣修復工事完了 4.1 竣工祝賀会举行される	⑧

①『雲陽大教録』 ②『堀尾古記』 ③『御城内惣間敷』 ④『松江市誌』 ⑤『藩祖御事蹟』 ⑥『延宝二年絵図』 ⑦『重要文化財松江城天守修理工事報告書』 ⑧『松江の歴史年表』 ⑨『御作事所御役人帳』 ⑩『列士録』 ⑪『天隆院年譜』 ⑫『元文三年城郭図』 ⑬『島根県史年表』 ⑭『安永七年松江城図』 ⑮『松平不昧伝』 ⑯『旧国宝建造物指定説明』

松江城下町遺跡の遺構と町割

城郭史グループ 松尾 信裕
(大阪城天守閣)

1. 松江城下町の構造

城下町の建設は慶長12年（1607）に着工され、慶長16年（1611）に完成したとされています。松江城下町が築かれた慶長年間、日本各地に大名の城下町が建設されていました。この時期の城下町はそれまでの山城を中心とした狭隘な地形を選択せず、流通の便がよく広い空間を確保できる沖積平野に城下町の建設が進められていました。領国の支配を貫徹させるために、また、様々な物資の流通路を掌握することができる広い平野部に城下町がつくられるようになったのです。



この頃の城下町の基本的な形を見てみますと、天守が建つ本丸を核として、その周囲に付属の曲輪を設けた城郭を築きました。城下町の中心となる城郭は、平坦部につくられることもありますが、多くは小高い丘を利用していることが多いです。やはり、戦国時代以来の防御を優先した考えが残っているのかもしれませんが、城下町周辺を見通せるように、あるいは、城下から見上げられるように小高い場所を選地したのでしょう。

城郭の周囲には上級から中級の家臣団の屋敷地を配置しました。そして、その外側に町人地を配置し、それらを囲むように寺社や下級の家臣団屋敷を配置しています。近世城下町は身分や階級の違いによって住む人たちの場所を決めており、武家社会の秩序を表現したものと言えます。

城下町は領国内の中心都市でしたので、領国の各地から様々な物資が集まる場所でした。また、領国内の産業の中心であり、領国内に住む全ての人たちの生活必需品が集まる場所でした。そのため、城下町は領国各地と道路でつながり、その道路が城郭や家臣団が居住する地域を避けるように、城下町の中を貫通し、その道路に面するように商品の流通や生産にかかわる町人が住まう地域が設定されました。

城下町の主な居住者は武士ですが、その生活を支える町人を住まわせる必要があります。城下町の主である大名は、町人を自らの城下町に居住させるために、城下町の中に町人達が集まって住む一角を建設します。その形は、日本全国ほぼ共通しており、城下町を貫通する直線に伸びた道路に面して、あるいは、城下町を取り囲むように鉤型に折れる道路の両側に、ほぼ等間隔の間口を持った奥行きが等しい敷地を配置させています。この形の最初は、織田信長が建設した尾張（愛知県）小牧城下町ではないかと考えられます。

城下町が平坦な平野部に建設される場合、城下町以前にはその近隣に海や川に面した港町が存在していた場合が多くあります。これはその港町から遠隔地との水運を介した流通機能と、領国内の周辺地域へつながる道路が存在していたことに着目したからなのです。新しく領主になった大名は、そうした既存の流通拠点を城下町に取り込むことを行います。

松江を選んだ理由の一つには、中世から存在していた末次や白潟の集落の存在が大きいと考えられます。これらの集落はこの地域の拠点となる町であり、磨師や塗師・鞆師・鉦細工師などの手工業者が住んでいたことも記録に残っており、中国の明代の史料には白潟を出雲地方の港湾の一つと記しており、

一定程度の規模の港町として発展していた可能性があります^(注1)。

松江は宍道湖に面する流通に適した土地でしたが、城下町が建設される前のこの土地は、城が築かれる亀田山の周囲には低湿地が広がっており、近世初頭になっても深田や湿地が残っていました^(注2)。生活空間に適した所と言え、宍道湖の水流によって形成された砂州が宍道湖の北岸東端と東岸北端に延びており、そこに末次や白潟と呼ばれる中世の小規模な集落が展開していたようです。

松江を選択した堀尾忠氏は、狭隘な富田城下町を離れて、宍道湖の周囲に広がる平野部に移転してきたのですが、広い城下町空間を確保するためには、低湿地を生活可能な土地へと造成していかなければなりません。そうした城下町建設時の土木工事の跡が近年の発掘調査で確認されています。

こうした土木事業は松江だけのことではなく、江戸や大坂をはじめとする多くの城下町で行われており、近世城下町の大きな特徴と言えます。たとえば、山を切り開いて城郭を築くにしても、本丸や二の丸・三の丸と呼ばれる曲輪を広い平坦地にする必要があります。切り取った土砂で低い谷を埋め、広い曲輪を出現させていったのです。家臣団屋敷や町人が住まう城下町へも切り取った土砂を盛土して造成したのでしょう。平野部でも凹凸のある土地も平坦にしないと建物を建てることができませんし、湿地は厚い盛土で覆い、乾燥した土地へと変えていかなければなりません。近世城下町は、建設以前のその場所の歴史を包括し、様々な努力によって出現したニュータウンと言えます。

2. 武家屋敷地と調査成果

「堀尾期松江城下町絵図」^(注3)を見ると、松江城下町の武家屋敷は内堀で囲まれた本丸と二之丸と、その南に接続する三之丸を中心に、その周囲に上級家臣団の屋敷地を配置しています。特に500石以上の家臣の屋敷は、城の東の殿町や母衣町に集中しています。堀尾氏の後の京極氏や松平氏の時にも同じような配置が見られますので、城の東側が重臣達の居住空間だったようです。殿町と母衣町、さらに城の西の内中原町は城に近いこともあり、外堀によって囲まれていました。殿町と母衣町は内山下とも呼ばれる場所で、中級以上の家臣団が居住する空間でした。

外堀の東にある南北の田町は城下町以前には低湿地で、名前もその地形や土地利用に由来するものでしょう。発掘調査では最下層に沼地のような環境で堆積した地層が見つかり、城下町建設の際に造成されて出来上がったことが確認されています。ここには重臣の下屋敷も配置されており、東からの攻撃に備える目的もあったのでしょう^(注4・5)。西の外中原町は重臣の下屋敷もあるものの、多くが下級家臣の屋敷地として利用されています。このように、東西南北の道路によって整然と区切られた街区の中に、階級や身分の違いを基に石高に相応しい広さの屋敷地が宛がわれていたのです。

松江もそうですが、多くの城下町は街区を方形あるいは長方形に区画する道路を敷設し、整然とした街並みを形成しています。それには町作りの基準となる方位が存在するのですが、これについては後ほど町人地について考えた後に検討します。

また、城下町建設以前、この地域は低湿地が広がっていましたが、そうした環境をどのように克服して城下町を建設していったのでしょうか。以下で、松江城下町遺跡で行われた武家屋敷の発掘調査の成果を基に検討していきましょう。

近年、松江城大手前の駐車場から東に延びる城山北公園線と呼ばれる東西道路の拡幅工事に先立つ調査と、松江歴史館建設に先立つ調査がありました。

そのうちの一つである松江歴史館建設に先立つ調査の成果を見てみましょう^(注6)。ここは殿町の北西角に位置し、堀尾期以来、京極期、松平期と連綿と重臣の屋敷が存在していました。最下層の湿地の地層を覆い尽くす人工的な盛土で生活可能な敷地へと造成し、その上に屋敷の建物などを構築しています。

屋敷地の全域が発掘調査されていけませんので屋敷地全体の建物配置ははっきりとしませんが、屋敷地のある街区方位に沿う溝で屋敷地を囲い、その中に敷地方位に軸をそろえた建物がありました。

推定される入口から少し入った場所に中心となる建物があり、その脇には客間をもった建物と池を配した庭園も造営されていました。池は単に窪んでいただけでなく、岸には石を貼り付け、景色としての巨石も用いられていました。この屋敷の主は庭園を愛でながら憩える空間まで持っていたのです。また、周辺部には小規模な建物や台所と推定される建物が配置されています。これらの背後には畑があったことが判明しています。武家屋敷は町屋とは違い、一つ一つの敷地が塀で区画され、外部から見られない状態に遮断されています。その周囲に溝が巡らされることもあります。そうした区画施設に囲まれた中に、屋敷の主の石高に見合った生活を満たす建物や付属設備が整っていたのです。

この屋敷地からは多くの生活道具が見つかっています。その中でも陶磁器が多く見つかっています。生活道具はその時代の生産技術を反映するもので、その形や作られ方から、いつの時代につくられたものがある程度わかっています。

松江が城下町として建設される前後の16世紀後半から17世紀前半は、国内の陶磁器生産が大きな変化を見せる時期でした。それまで日本で使用される食器の多くは中国から輸入される陶磁器に頼っていたのですが、東海地方の美濃で瀬戸美濃焼が大量に生産されるようになり、広く国内に流通するようになってきました。この時期は国内のいたるところで城下町が建設され、そこに居住する人々の食器として使用されるようになったのです。

この頃の国産陶器は鉄釉を掛ける色彩の濃いものや灰釉を掛けた黄色みを帯びた単彩のものばかりでした。そのような中であって白い生地に絵を描いた中国製の青花は日本人の憧れだったのでしょう。その青花を模倣するように、美濃では白い釉薬が発明され、その上に鉄釉で簡単な絵を描いた志野と呼ばれる焼き物が出現します。ほぼ同時期に九州の肥前でも鉄釉で絵を描いた唐津焼が作られるようになりました。その後、美濃では緑色の釉薬を掛ける織部と呼ばれる焼き物が作られます。そして、国内で初めて白い生地の磁器（伊万里焼）が肥前で生産されるようになります。

こうした陶磁器の生産技術の変化が国内各地の城下町遺跡の発掘調査で把握され、ある程度の年代もわかるようになってきています。大坂をはじめとする近畿地方の城下町では志野や唐津焼が食器として使われるようになるのは16世紀末のことで、大坂では豊臣秀吉が没する慶長3年（1598）頃から志野や唐津焼が見つかります。そして、織部は少し遅れて出始め、大坂の陣の頃に大量に出回ります。よく、「桃山の茶陶」と呼ばれる茶会席の華やかな食器は、秀吉のころではなくその息子の秀頼の時代の食器なのです。そして、肥前磁器（伊万里焼）は大坂夏の陣の時には使われておらず、大坂が徳川の直轄地となった1620年代中頃になって多く使われるようになっていきます。

こうした出土する食器の変化からそれぞれの遺跡の時期がある程度判明するのです。この屋敷地で出土した陶磁器もそうです。この屋敷地では大きく4面の生活面が確認されています。一番下に堀尾氏が城主として松江に入ってきた直後の生活面があり、それ以降の生活面が上に形成されていました。

最初の生活面からは国産陶器では九州肥前の唐津焼と呼ばれる陶器が多く出土しており、17世紀前半になって大坂に出回る肥前磁器（伊万里焼）は見つかっていません。その代わりに中国製の青花がたくさん出土しています。美濃の焼き物である志野はあまり見つかっていません。生産地が遠いことが原因なのでしょうか。江戸時代になっても中国地方の日本海側では美濃の製品よりも肥前の製品が多く流通しており、陶磁器のことを「からつもん」と呼ぶこともこのことに起因しているのでしょうか。こうした陶磁器の年代観から堀尾氏が城下町を作った最初の生活面は17世紀初頭と考えてよいでしょう。城下町建設が1607年とされている松江の年代観に適合します。

この生活面の上に、京極期の生活面がありますが、そこから出土する陶磁器には肥前陶器の唐津焼が相変わらず多いですが、肥前磁器の伊万里焼も含まれるようになります。さらに上層の松平期の生活面では肥前磁器（伊万里焼）が圧倒的に増加してきています。併せて、それまで多く見られていた中国製の青花が減少してきます。これは中国の明から清への交替に併せて中国からの輸出が大きく減少したことにも原因がありますし、肥前の磁器生産の活発な動きがあったことがわかります。こうした食器の変遷はこの家老屋敷だけのことではなく、他の武家屋敷でも同じです、また、日本各地でも同様の傾向を示します。肥前で陶磁器生産が陶器から磁器へと大きく変化し、それを大量に国内各地へと流通させるようになったのです。

3. 町人地の構造

松江での町人地の発掘調査は数多くは行われていません。一部、大手前線の建設に先立って米子町の一角が調査されている程度です。町人地の構造は、道路に接して間口を開く建物が敷地の間口いっぱい建てられるのが特徴です。武家屋敷とはそれが大きな違いです。また、敷地の間口は武家屋敷よりも狭く、奥に長い敷地です。この構造は日本各地の城下町と共通する構造で、この時期に出現した城下町の一般的な形です。

町人地の構造がわかるのは、今に伝わる「堀尾期松江城下町絵図」や「京極期松江城下町絵図」です。この二つの絵図には城の南に東西方向に広がる末次地区や、大橋川の南に広がる白潟地区の町人地が一つ一つの敷地の境まで丁寧に描いてあります。さらに、それらの絵図では敷地の背後の町境でもある背割下水の線も直線になっているのが確認できます。それらを見ると、町境が直線になっているので、同じ町に属する敷地の奥行きは、同じであることがわかります。

末次地区では今でも町の境となる背割下水が残っています。これまでに何度か末次地区を歩いてみましたが、末次地区の北にある外堀に面する片原町とその南の苧町や西茶町・東茶町の境になる背割下水は幅1m未満の下水として今でも生き続けています。江戸時代初期に設定された背割下水が現代まで踏襲されているのです。

末次地区は苧町から末次本町までの東西道路の両側に間口を開く町と、北の外濠に面する片原町があります。当時は道路の両側に町人地が建ち並ぶ苧町・西茶町・東茶町・末次本町が中心だと言えます。片原町は道路の一方には外堀がありますので、両側町とはなりません。道路の片方の腹にだけ町屋が連なる片腹（原）町なのです。町名は町の構造まで如実に言い表しているのです。昔からの町名は町の歴史を物語ります。簡単に町名変更はすべきではないのです。

さて、松江では町人地の発掘調査はさほど行われていませんが、町人地の調査を数多く行っている大坂の事例を紹介しその構造を見て行きましょう。近世城下町の町人地の構造は全国的によく似た構造をしており、今後、松江城下町で町人地の発掘調査が行われればその参考になると思いますし、他の遺跡の町人地の構造を見ることで松江の町人地がどのような形をしていたか推測できます。

大坂では秀吉が大坂城を築く直前から町人地の建設が始まっています。豊臣時代の大坂城下町は中世から都市であった四天王寺門前町と渡辺津と呼ばれた港町を町人地として取り込む手法を採用しています。四天王寺門前町は古代以来崇拜されてきた四天王寺の周囲に形成された町です。室町時代には七千軒もの町屋があったと記載する史料もあります。ここには様々な手工業者や商人が居住しており、新しく建設される大坂の流通や経済を支える町だったのです。また、渡辺津も古代には難波津として存在していた港でしたが、中世には京都から四天王寺参詣や和歌山の熊野参詣の中継港として繁栄していました。秀吉はそうした以前から繁栄していた都市を自らの城下町に取り込みました。まさに堀尾吉晴が松

江開府の際に末次や白潟を取り込んだことと同じ手法で城下町を建設しているのです。

町人地の中の敷地を発掘調査しますと、最下層には秀吉以前の遺跡がありますが、そこで見つかる遺跡の方向は秀吉の城下町とは異なった方向になっています。新しく建設した城下町は以前の町の上に盛土したり削平したりして平坦な土地を造成し、その上に新たな基準に則った直線の道路を等間隔で敷設し、計画的な配置をもった町となって出現しています。

発掘調査の成果では、道路に面した敷地の表部分に礎石を用いた主屋が建ち、一番奥には蔵が建ちます。ただ、敷地全域に建物が建て込むのは少し遅れるようで、蔵がなく大きなゴミ穴が広がる敷地も見つかっています。敷地の所有者の経済力の違いによって敷地の活用には違いが認められます。隣との敷地境は板を護岸とした溝です。

敷地の裏の背割溝は城下町建設当初にはなかったのではないかと考えています。隣との敷地境の溝が一番奥まで直線で延びておらず、敷地の途中にある大きなゴミ穴で止まっている敷地があるからです。当初は明瞭な背割溝がなかったのかもしれませんが。その後、町の拡大に伴って整備されてから背割溝が敷設されたのではないかと考えています。下水は流出先となる堀や川まで繋がるようにしないと排水できません。城下町全体の排水システムが完成しないと下水が機能しないのです。大坂では東横堀川や西横堀川などの主要な堀川が掘削されることで排水システムが完成したのではないかと考えています。

敷地内の利用は時代が新しくなると活発になり、敷地全域に礎石建物が建てられるようになります。それに伴って大きなゴミ穴は作られなくなり、建物のない狭い空間に小型の四角いゴミ穴が作られるようになります。また、主屋や蔵の地下に穴蔵が作られます。初めの穴蔵は壁や床に板を貼ったものでしたが、17世紀末頃から加工した石材を使用するようになります。火災に遭っても焼けないようにしたのでしょう。敷地奥に建てられていた蔵も基礎構造が変わります。初めは1m間隔で礎石を並べる礎石建物でしたが、これも17世紀末頃から壁の下に大きな石を敷き詰めたベタ基礎のような構造へと変化します。これは壁構造が以前より厚く作られるようになったために、基礎を頑丈にしたのであろうと考えています。火災に遭っても財産が焼失しないように、財力をかけて重厚な壁をもつ堅牢な蔵を建設したのでしょう。先に述べた敷地境の溝の護岸も木製の板から石へと材料が変化します。板よりも堅牢な石材が建築資材として需要が増し、それに伴い石材を加工し販売する生産流通体制も整備されてきたのでしょう。

松江城下町でも同じようなことが発見されるのではないかと思います。今後の発掘調査が期待されることです。

4. 城下町建設の基軸

松江は城を中心に武家屋敷や町人地の道路がほぼ同じ方向で建設されています。南北道路は概ね北で4度ほど東に振った方向であり、東西道路は東で南に4度ほど振っています。この方向が何に規制されたものなのかを考えてみます。

松江を建設する時は城郭のある亀田山の周囲には低湿地が広がっていたことは最初に述べました。生活空間として可能だったのは、末次地区や白潟地区くらいしかなかったのではないかと述べました。そうすると、城下町の基軸を最初に設定できる場所は町人地である末次地区や白潟地区しかありません。この二つの地区は宍道湖の水流によって形成された砂州で、周囲よりも一段高くなっていたと推定できます。また、そこにはすでに町場が形成されており、そこに武家屋敷を配置するには町人地の移転を強要しないといけません。

当時の城下町建設政策にあたって、城下町を繁栄させる町人の存在は無視できません。堀尾吉晴も以

前から居住していた末次や白潟の町人を優遇するために、また、既存の港湾機能を存続させるために町人地の移転は強制せず、同じ位置に町人地を設定したのではないかと考えます。その際の基本軸として、末次地区の砂州の中央に、砂州の脊稜線に沿った新しい方向の直線道路を設定し、新たな町人地として出現させたのではないのでしょうか。砂州の中央に道路を敷設することで広く町人地が確保できます。それが末次地区の両側町となっている芋町・西茶町・東茶町・末次本町なのではないかと考えます。この道路は芋町と西茶町の境で屈曲が見られ、この街区の北側の敷地の奥行きも同じ位置で少しずれていますが、この道路の北にある片腹町ではその場所で東西の街区の奥行きを少し違って、堀に面する片原町の通りは一直線になるように調整しています。

この末次地区の東西道路の方向を城下町の街区の基本軸として、これに平行・直交する道路を配置する城下町全体の基本設計が行われたのではないのでしょうか。末次地区の東西道路に平行して城の南外堀が掘削され、それに直交するように東西外堀が掘削されて城郭を囲繞するようになったのでしょうか。西の外堀は一部が斜めになっていますが、これはそれ以前の地形をそのまま利用したのでしょうか。武家屋敷地が広がる城郭の東の殿町や母衣町さらに田町も、城下町全体の基本設計に基づいて街区が建設されたと考えられます。

城の東にある殿町や母衣町さらに田町の調査では、城下町の地層の最下部に素掘りの大きな溝が見つかっています。これは現在の道路と同じ位置にあるのではなく、少しずれた位置で見つかっています。湿地であった地域の土壌を乾燥させるための排水溝と推定されますが、現在の道路と同じ方向に延びています。城下町の街区を設計するための溝であり、その広がりが最初の城下町の範囲を示しているのではないのでしょうか。



「堀尾期松江城下町絵図」（島根大学附属図書館蔵）

白潟地区では大橋から南の白潟天満宮までの白潟本町・天神町が両側町を形成していますが、この道路は末次地区の道路とは直交せずに北で西に振り、また一直線とはならず白潟本町と天神町の境で屈曲し、微妙に撓んでいます。これは白潟地区の基盤となる砂州が北で西に振った方向に形成され、曲線を描いていたのではないかと考えています。

松江城下町は建設時期や城主の交替時期などがわかっており、松江歴史館や城山北公園線の発掘調査では松江開府以来の生活面や地層が良好に残っていることがわかりました。それぞれの生活面から出土する陶磁器などの生活道具の組み合わせも特定できます。松江城下町は形成過程や生活道具の年代観を提案できる良好な材料が埋もれているのです。松江での今後の発掘調査や城下町研究の成果は、日本各地の近世城下町遺跡の研究の進展に大いに貢献できると考えられます。

(注1) 山根正明、『堀尾吉晴－松江城への道』 松江市教育委員会 『松江ふるさと文庫』6 2009

(注2) 島根県教育委員会、「平成22年度石見銀山遺跡関連シンポジウム 都市「松江」と石見銀山」パネルディスカッションにおける西島太郎氏の発言 『平成22年度 石見銀山遺跡関連講座・シンポジウム記録集』 2011

(注3) 松江市教育委員会、「堀尾期松江城下町絵図」(島根大学附属図書館蔵)『絵図で見る城下町 松江』 2007

(注4) 松尾 寿、『城下町松江を歩く』Ⅰ ふるさとブックレット 山陰の自然と文化2 1986 たたら書房

(注5) 松尾 寿、『城下町松江の誕生と町のしくみ』 松江市教育委員会 『松江市ふるさと文庫』5 2008

(注6) 松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団、『松江歴史館整備事業 松江城下町遺跡(殿町287番地)・(殿町279番地外)発掘調査報告書』 2011

松江城研究の最前線 わかったこととこれからと

日 時：平成23年11月26日（土曜日）13：00～

※パネルディスカッション：15：20～16：20

会 場：島根県民会館 三階会議室

出席者：コーディネーター 中井 均氏

パネラー 山上 雅弘氏

和田 嘉宥氏

松尾 信裕氏



司会（福井将介氏）

それでは予定した時間になりましたので、パネルディスカッションに移りたいと思いますが、開会の前に、中国・四国城館調査検討会会長の田中 義昭先生をご紹介します。田中先生、どうぞ。後ろのほうにおられます。（拍手）

続いて、本日報告していただいた先生方以外の、『松江市史』の松江城部会の先生方を紹介いたします。まず、城郭史グループのグループリーダーをお務めいただいている中井 均先生です。（拍手）中井先生は、現在滋賀県立大学の人間文科学部の准教授です。先生にはこの後のパネルディスカッションのコーディネーターをお願いしております。

次に、同じく城郭史グループの西尾 克己先生を紹介します。西尾先生は島根県古代文化センターのセンター長をお勤めです。（拍手）

続いて、同じく城郭史グループの乗岡 実先生を紹介いたします。乗岡先生は岡山市教育委員会の文化財課にお勤めです。（拍手）

なお、先ほど分野別報告をしていただいた大阪城天守閣の松尾 信裕先生、兵庫県立考古博物館の山上 雅弘先生もこのグループです。また、本日はご欠席ですが、城郭史グループには他に兵庫県立大学の先山 徹先生がいらっしゃいます。

次に、文献・歴史地理グループの堀田 浩之先生を紹介いたします。堀田先生は兵庫県立歴史博物館に学芸員としてお勤めです。（拍手）

なお、本日もご欠席ですが、山形大学農学部の渡辺 理絵先生も文献・歴史地理グループです。

続いて、建築史を担当していただく建築史グループには、本日はご欠席ですが足立 正智先生がいらっしゃいます。先ほど分野別報告をしていただいた和田 嘉宥先生が建築史グループのリーダーです。

最後に、土木史グループを紹介させていただきます。土木史グループのグループリーダーは河原 莊一郎先生です。河原先生は松江工業高等専門学校環境建築工学科教授です。（拍手）

続いて、渡辺 正巳先生です。渡辺先生は文化財調査コンサルタントを経営され、島根大学汽水域研究センターの客員研究員もお勤めです。（拍手）

それでは松江城部会の先生方の紹介が終わったところで、パネルディスカッションを始めさせていただきます。中井先生、山上先生、和田先生、松尾先生、よろしくお願いいたします。

中井 均氏

コーディネーターを務めさせていただきます中井と申します。改めてよろしくお願い申し上げます。実は1時間しか時間がないので、早速始めていきたいと思うのですが、今日は三人の先生から、松江城の縄張について、天守の修理の問題、それから城下町ということをテーマにそれぞれ報告をしていただきました。これに沿いましていくつか論点を整理していきたいと思います。



中井 均氏

まず松江城の縄張なのですけれども、私も聞いていて大変興味深かったのは、東側の石垣についてです。我々はどうも松江城という南から見るイメージがあるのですが、東側に石垣がそびえている。私は前に来たときに堀川めぐりの船に乗り、あれ良いですね、観光というよりは、あれで北側と西側に石垣がないというのがよくわかるのです。そういう正面性の問題について、もう一度考えてみたいと思います。特に重臣屋敷も東側にあるということで、まず間違いなく松江城は東側が正面なのだとすることが物理的にはわかるのですが、ではなぜ東側が正面なのでしょう。山上さん、お考えをもう少しお話しただけないでしょうか。

山上 雅弘氏

今日の報告では少し時間を超過して申し訳ありません。私が考えております、なぜ東側なのかということですが、南北を主軸とする築城では、南側に向かって大手を開くのが通常だと思うのです。ですが、松尾先生のお話にもありましたように、元々の中世の末次・白潟といったような町場が、築城に先行して、つまり築城の以前にかなり広い範囲にあったのではないかと考えられるのです。

そういう前提から考えますと、三之丸から大手門を出ると、いきなり町人地のほうに出てしまうというのが問題です。そうなると、堀尾家の重臣クラスが藩主と距離が置かれてしまうところから、まずは東側に一旦向いて、それから南に出たのではないかと考えております。

中井

ありがとうございます。特に東側については、今のお話にもありましたように重臣屋敷の問題もありますので、松尾さん、その辺りはどうでしょうか。

松尾 信裕氏

お城そのものを見ますと、やはり東側に重臣屋敷が固まって置かれているということもありますので、お城は東を向いているかなというイメージはあるのですが、城下町全体として見ますと、やはり大橋がかかっている南のほうに向いているというイメージを持ちます。お城から、例えば江戸に向かうにしても南に大橋を渡って白潟を通って行くというルートですので、城下町としては南のほうを向いているというイメージを持っています。

中井

大変面白いですね。城は東を向きながら城下町は南を向いているという、松江では城と城下町のこの関わり方というのが大変面白いのではないかなと思います。

建築のほうで和田先生、例えば天守の正面性というどうしても附櫓の関係からいくと南側になるのだと思うのですが、その辺りはどうなのでしょう。天守を見る場合、やはり正面性というのはあるのでしょうか。

和田 嘉宥氏

天守そのものが南を向いているのは、宍道湖がありますから、これに向かっているのではないかと思います。ただ附櫓についてですが、後で取って付けたのではないかという説があります。これは松江城

調査研究会の西和夫先生が言われていたのですけれども、天守閣は方形だけれども付櫓は少し台形になっています。それで、あれは堀尾氏が富田から持ってきたものかもしれないということをちらっと言っておられました。

そこら辺りは今後検討しないといけませんけれども、基本的にはやはり南が正面だと言って良いと思います。この問題については、場合によっては風水とかそういったものも考えていく必要があるかもしれません。そこら辺りは私ではわかりませんが、基本的には先ほども言いましたように、海上からのアプローチとかそういった観点からにしても南だし、やはり南が正面だけれども、城下の広がりから東がメインの入り口になっているという、折れ曲がった形態というのはそれなりに理解もできていると思います。

中井

ありがとうございます。松江の城と城下の問題なのですけれども、松江だけではなかなかこれは解決できないと思います。この慶長年間(1596～1615)ぐらいの城造りには、そういう正面性みたいなものが出てきているのは間違いないようです。

今日は中国・四国城館調査検討会という研究会との共催ですので、それぞれの地域で研究されている方が沢山お見えです。そういった方々の意見もお尋ねしながら、松江城についてより深く切り込んでいけたらと思っています。とりあえず正面性みたいなものが松江城の縄張りの中に実際にあるのかないのかというようなところを、『松江市史』の城郭史グループの一員でもあります岡山市教育委員会の乗岡さんが来て下さっていますので、岡山城の事例をご紹介いただけたらなと思います。

乗岡 実氏

岡山市教育委員会の乗岡といいます。岡山城は、実際には宇喜多秀家という大名によって慶長年間よりはもうすこし早い時期に近世城郭としての形成が始まるのですが、城下町を含めた全体、あるいは本丸の縄張りには明確に正面性をもっています。

城下町も含めての全体構造で言いますと、本丸は、位置が北東隅に非常に偏っている。岡山城には後樂園という庭園がありまして、観光ルートに準じて後樂園から旭川越しに城を見るのだと思っている方、あちらが正面だと思っている方がいらっしゃるかもしれませんが、あちらの方向には全く城下町がない。ましてや慶長年間には、後樂園はまだ出来ておらず城外でした。つまり、本丸は背後に旭川を背に負った形で、その北東方向は軍事的にも守りが弱い。逆に南、それから西側にだけ城下町が形成され、堀が幾重にも廻りそちらが正面です。

それから、城の最中枢である本丸の構造に限ってみても、やはり南西側に構造や施設のあり方が偏っています。いわゆる大手筋の方向です。

例えば、本丸に入る城門は全部で3ヶ所あるのですが、枡形の虎口があって、その前後を一ノ門と二ノ門で固める構造は、南西側の1ヶ所だけです。しかも、石垣の特徴で言いますと、そこには非常に大きな鏡石を貼り付けた石塁がある。対して、他の城門の石垣はそれほどのことではない。その枡形門を出たところには筆頭家老の屋敷、城主が池田氏の時代では伊木家という3万3千石取りの屋敷がありました。そういうことで、岡山城は松江城以上に明確で強い正面性を持っているという事例です。

中井

ありがとうございます。私は滋賀県にいる関係で、山上さんが先ほど紹介された彦根城につきまして少し述べさせていただきます。彦根城も慶長9年(1604)から築城が始まるわけですが、元々大坂城に向かった西側が大手正面でした。しかし、大坂夏の陣(1615)の後、今度は参勤交代との関係で東側に大手が移ります。このように、正面性は、敵にむかっての正面から参勤交代ということで完全に大手が

替わるというようなお城もあるのです。

そういう意味で、松江城の場合は、南から城下町に入り、さらにそこから直角に左に折れて東を正面にしてあの巨大な枳形に入り、さらに何回か屈曲して、最終的に本丸には今度は南側から入るというような、そういう構造で造られたのではないかというのが今日の山上さんの報告だったと思います。それが、何と言いますか高石垣の構築された場所であるとか、あるいは櫓が並んでいる位置とかから導き出せるのではないのでしょうか。

それからもう1点は、そういった正面性というのは、単純に大坂城を向いているとか、参勤交代の終点の江戸を向いているとか、あるいは軍事的な問題だけではなくて、やはり風水みたいなものの影響があったのか無かったのか、ということです。これについては、『松江市史』の編纂で城郭史グループの一員として一緒にやっております兵庫県立歴史博物館の堀田さんがお見えです。堀田さんは、姫路城で城郭の風水といますか立地について、『姫路市史』においても既に著作があります。城の正面性みたいな点について、堀田さんに少しコメントいただけたらと思います。

堀田 浩之氏

失礼いたします。まず松江城のお話からなのですが、『旧藩事蹟』という文献を見ますと、「松江城の大手の門口は東向きだけど、天守は南向きである。」と書いてあり、明治時代の地元でも、正面性について関心のあったことがわかります。つまり、天守の向きに着目すれば、大橋川を介した橋南の町屋や宍道湖上からの視座が考えられますが、山上の主要部への登り道や山麓の重臣屋敷が東側に位置するように、城郭の中核は東を正面とする意識は譲れなかったものと思います。そういう面で、城山付け根の南東麓方向に枳形虎口の「馬溜」があるのは、武士の論理による城郭本来の空間構成（東→西）と天守が誘導する城下・郊外からの視線（南→北）という「松江」地域全体の位相からの、二つの異なる方向性が融合した結果であるとも言えるのです。

なお、東大手ということで類例を探せば江戸城があげられます。東京駅からずっと西へ行くと皇居(旧江戸城内)に入っていくわけですが、地形の高低差にしたがい、海岸から山の手へと江戸城の正面性の方向が自ずと示されます。しかし、半蔵門の辺りから麴町といった江戸城の背後の空間について、考えを及ぼすことは少ないと思います。つまり、通常の城郭研究では「大手（防御正面）」をまず意識してしまうことで、表裏の差を無意識のうちに生じ、背後の部分への関心を閉ざす傾向があったわけです。

正面性という観点から城郭史を考えた場合、特に近世城郭では見栄えの良さを追求してきちんと工事する所と、ある程度は未完のままでも良しとする所を併存させていたのではないかと私は考えています。その時に、理論武装として風水という思想が出てくる可能性があるわけです。玄武（北）、朱雀（南）、青龍（東）、白虎（西）という「四神相応」を地理上に見立てたものなのですが、大手正面（表）は南側で、裏手となる北側は（奥）を表現する空間となります。ただし、江戸城の場合、真北ではなくて西を玄武の方向に見立て直しているはずで、山の手の高台と、遙かに望む富士山の方向を玄武の奥行きとし、隅田川の低湿地や江戸の入り江を朱雀と見立て、北辺を流れる神田川を青龍とし、城下町の南に「虎の門」まで仕立てています。東西南北の方向に関係がないとしても、地形の（低→高）、それから川の流れの（下流→上流）という、大まかなポジショニングと動線の方向性が求められたのではないかと思います。

最後に姫路城の場合ですが、ここでは街道の付け方に注目しておきたいと思います。姫路城は三重の堀で出来ていますが、北西の部分というのは男山という山があって、堀がきれいに廻っておりません。城郭としては未完の部分を残して弱点と言えますが、正面の背後（裏）にあたるという位相の解釈なのでしょう。したがって城下の空間を確保しているのは、南と東の二方面です。ともに南の方は山陽道、

東の方は生野へ行く但馬道が通過していますので、街道という外部からの動線(視線)を城下に取り入れ、城と町に正面性を与える要因になったものと考えられます。正面性という当時の城と城下のベクトルを見いだすことで、近世城郭の空間特性の議論が、今後なされることになれば、と思っております。以上です。

中井

ありがとうございます。今まで縄張り研究というのは戦国時代の城に対しては盛んに行われてきましたが、しかし松江城でこうした縄張り自体を分析することが無かったと思いますので、今回の山上さんの報告につきましては、まさに新しい視点からではなかったのかなというふうに思います。

それからもう1点、山上さんの報告を聞いていて私が大変興味深く思ったのは、本丸の問題です。あれだけ広大な面積を持っていながら、実は建物がほとんど無いということです。山上さんの報告では、御殿を建てるつもりだったようです。しかし、堀尾氏の段階ではそれが出来なかったのではないかなということなのですが、その辺りについてもう少し、山上さんにお話していただけたらと思うのですが。

山上

この頃の、つまり慶長期ぐらいの築城では、例えば先ほどの姫路城などでもそうなのですが、池田氏による築城の時には天守が建つ南側に備前丸という郭がありますが、そこに御殿があったと言われております。それが慶長期以降、いつの段階かというのははっきりしませんが、三ノ丸のほうに降りてきたと言われております。

先ほどの彦根城においても、元和年間(1615～24)になって本丸の御殿が二ノ丸のほうへ降りてきます。このように、江戸時代の初めごろは、近世城郭では本丸そのものは詰の丸として使われるようです。特に天守が建つようなお城では、そこはいわゆる最終的な郭として維持されて、空間になっていくことが多い。例外もちろんありますけれども、慶長期から元和期にかけてはそういう過渡期ではなかったのかなというふうに考えております。



山上 雅弘 氏

そのように考えたときに、松江城は慶長12年(1607)に築城が始まるのですが、当初の設計と実際に運用していく段階でお城の城郭構造の変化・変遷がそこに見て取れるのではないかなということを推定して、本丸が広いわりに空間となっていることの原因を説明させていただいたわけです。つまり、元々御殿を建てようとして広い本丸を造ったものの、途中で詰の丸に変更したと考えています。ところが、私は知らなかったのですが、和田先生から実はその古い段階にそこにお屋敷が建っていたという文献があるということを聞きまして、実は驚いているのですが、ともあれそういう経緯であのようなことを申し上げたわけです。

中井

ありがとうございます。そこで和田先生のご報告にありました『(竹内右兵衛書つけ)』の問題なのですが、本丸に元々あったと言われる、六間半に八間ですか、その建物というのは大きさからして御殿的なものと考えてもいいのでしょうか。和田先生いかがでしょうか。

和田

どうでしょうね、『(竹内右兵衛書つけ)』には「家」とあります。ところでこの史料には、本丸について、例えば一ノ門に関しては、その上に「走り(武者走り)」があったと記述されています。それから本丸の中には御薬蔵がありました。二間に六間半の建物です。多分これは天守の北西のほうかもしれません。それから天守の南には「御天守南二六間半ニ八間之家有之の由」と記されています。「由(よし)」です

からはっきりとはしていませんが、さらに「今はなし」と『(竹内右兵衛書つけ)』は記しています。だから基本的にはそういった建物があったということが伝わっていたのでしょう。時間が経って、いつの頃かにこれがなくなっていたということでしょう。

それからもうひとつ、「御台所」があります。これは、単に天守の御台所じゃなく、台所があるからにはそれにふさわしい建物つまり御殿が建っていたと言えると思います。

中井

ということで、実は山上さんの仮説が立証されるのではないかと考えているのですが、山上さんそのへんについていかがですか。

山上

是非そうあって欲しいなと思っているのですが、もし今後チャンスがあれば発掘調査をしていただければと思います。二之丸からも唐津焼が出ていると聞いておりますので、そういった生活空間、たとえば台所のような場所をおさえて調査が行われ、その当時の遺物とかが出てくるともっと面白いかなと思います。

中井

我々は松江城というと植え込みのある広い本丸というイメージしか持っていないのですが、ひょっとすると慶長12年の築城では堀尾氏が本丸に御殿を建てていて、そこが居住空間ではなかったかということですね。

和田

「堀尾期松江城下町絵図」の中にも、本丸の南と北の方に付属の建物がありますので、これからの検討課題になってくると思います。ただこの絵図の表現は非常にラフなものですから、正確ではありません。この絵図をどう考えるかということは十分な検討が必要だと思います。

中井

ありがとうございます。今山上さんの話にもありましたように、実は彦根城でも天守の前に本丸御殿跡の礎石が現在もそのまま残っています。当初は山の上で住んでいたということが明らかなのですね。ですから私も山上さんと同様に、この慶長期の平山城というのは元々山上の郭に臨戦態勢で住んでいたのではないかと。それがある時期、面白いですね、大名っていうのは、上で住むのが嫌になって下に移っていく、山麓部分に移っていくのではないかと考えられるのです。今後、本丸も含めて発掘調査をすると面白いと思うのですけどね。

たとえば平城ではありますが、岐阜に加納城というお城があります。慶長6年(1601)に築城が始まりますが、絵図には本丸に建物が描かれていません。御殿がずっと二之丸にあったということですね。それが近年岐阜市教育委員会の発掘調査で、本丸から大量に瓦が出てきています。何らかの建物があつたということですね。ですから、元々はどこでも慶長期の築城というと本丸にそういった御殿空間が存在したという可能性が非常に高いのかもしれない。我々が見ている姿というのは決して築城当時のものではないということですね。今回この山上さんの報告で、私も改めて松江城でも築城当初は本丸に御殿があつたのではないかなと思っております。

縄張りについてまだまだ議論をしなければならないのですけれども、時間の関係がありまして、次に天守の問題に移りたいと思います。今日の和田先生の報告で、私も含めてですね、松江城の天守というのは堀尾氏の時代に造られたものがそのまま今でも残っている、無骨なね、何というか戦国期の天守がそのまま残されているという表現がよくあるのですが、堀尾氏段階のものではないという話を聞いて、意外というか驚いたんですけれども、和田先生、松江城以外にそういう創建当時そのままではなくて、

今見ているようにかなり改修を受けている天守というのは他にもあるんでしょうか。

和田

先ほど紹介した報告書ですけれども、その中で神奈川大学の西和夫先生は、それと類似した例として犬山城をあげられています。犬山城は昭和36年から40年に解体修理が行われたのですが、移設説は考えられないそうです。部材からは移設を示す資料が得られなかったそうです。それで今の犬山城は現在地で増築されているということです。そここのところを読みます。

「1・2階と3・4階とでは材の古さや仕上げ方法に明らかな差異があり、3・4階は増築したもので、装飾的役割をする唐破風も部材から判断すると3・4階よりもさらに後の付加であることが判明する。すなわち犬山城は、慶長6



和田 嘉宥 氏

年の創建時に二階建てのもの（入母屋屋根の館に小さな望楼）があつて、それを元和年間に3・4階に増築した。その後に唐破風の付加がされて現代の姿に至っている。なお3・4階の増築以前の小さな望楼が乗っていたと思われる痕跡が、創建当初からの部材である二階の小屋梁に確認できる。」

ということで、創建当時の姿は今の犬山城の姿とは多少違ったものではないか。それが程度立証されつつあるということです。犬山城の成立過程にならえば、松江城の場合も1・2階と3階以上では多少建築的にも変わるものがあるところから、特に4・5階では様子が異なること、望楼型であることが共通しています。このことから、犬山城に見られるような成立過程が考えられるのではないかと思います。

それからですね、部材そのものを見ますと、1階とか2階に残る古い材、粗い材料、これは皮付きや丸太をバサッと切ったようなもので、荒削りなものが何本もあります。最初はそういう材で1、2階が造られた可能性があるということです。

中井

ありがとうございます。どうも我々も今残されている天守が創建当時のものだというイメージが凄くあるわけですが、今日のお話によって、実は松江城の天守についてはまだまだこれから検討していかなければならないということがわかりました。建築史の先生方が調べて分析をされているので、ほぼそういう具合に変遷しているのだらうと思います。

日本最古とか言われていた犬山城の天守ですら、実は慶長以降の建て替えであるということが近年わかったということで、大変面白い成果ではないかなと思います。ただ、建築については我々素人に近いもので、なかなかパネルディスカッションにはならないのかもしれませんが、どうでしょう、山上さん。今日の話を聴いて思われたこと、一言お願いします。

山上

ひとつは、お話を聴いていて考えたのですが、ちょっと話がずれるかもしれませんが、富田城から資材を持って来ているのではないかと感じました。この当時の、つまり慶長年間の築城では、松江城も他の城と同じように新たな材で一気に造るのではなくて、かき集めてきて、いろんな建物などに使っているのではないかと思います。現代の我々から見ると、建築というのは一気に必要な資材を集めて、バツと造ってしまうというイメージがあるのですが、この当時の建築・土木は、ツギハギと言ってはなんですけれども、ちょっとずつ材料を集めてきて時間をかけて造っていることが多いと言われています。

それから天守についての今日のお話は率直に言って驚きです。やっぱり天守といいますと、創建当初のものがずっとあるというイメージでおりましたので、これからもう少し天守についても検討し直していかなければいけないなと思っています。ちょっと感想めいたことしか申しあげられませんが。

中井

松尾さん、和田先生の話を聴きながら、横で「うん、うん」とうなずいておられたので、松江城天守については相当興味深く聴かれていたなと思うのですが、すみません、何かコメントがありましたら。

松尾

正面観の話をもう一度させてもらいますと、歴史館にジオラマの模型が置かれていますよね。あれは、すごくわかりやすいです。今の松江城は、木が多すぎて正面も何もわかりにくいですね。木を取っ払った姿がイメージできるのは、歴史館にあるジオラマ模型ですので、模型をもう一度見られたら、あ、東に向いているというイメージを多分お持ちになると思います。是非見ていただきたいです。

中井

ありがとうございます。ところで今日のパネルディスカッションとは全然関係ないことですが、各地に残っている近世城郭は、明治以降に木が生えすぎて景観が非常にわかりにくくなってきている。今の松尾さんのお話は、聴かれている松江市の教育委員会の方なんかはこれからおそらく考えてくれることだろうと期待しています。

彦根城では、とうとう彦根の駅から天守が隠れて見えなくなってきたので、ようやく今、市のほうが驚いて、木を伐採するための検討委員会を作って、自然や環境の方と一緒に、この木は切っても良い、この木はだめというようなことをやっています。おそらくこれは全国的にこれから進んでいくだろうと思います。そこで初めて江戸期の、今おっしゃったような正面性というのが見えてくるのではないかなと思います。これはちょっと余談で申し訳なかったのですが。

天守については、山上さんが言われたその「富」の刻印なんですね。これは山上さんが今いみじくも富田城から移したと断言をされたわけですが、「富」は富むという意味なのかもしれないし、これはまた非常に問題なのですね。その辺は、和田先生はどうお考えでしょうね。その「富」という刻印については。

和田

正直なところよくわかりません。そういう可能性がないかということで、調査委員会では色々な角度から検討しているところです。

堀尾家の給帳を見ますと、大工は格式も高く、士分階級で、大工職で100石くらいもらっている人があることがわかります。松平氏の場合、大工というのは足軽階級なのです。堀尾家の大工に関しては、国宝化推進室でもいろいろ調べていますが、堀尾時代の大工の地位は高かった。そういった大工たちの働きも含めて、堀尾氏が富田から持ってきた材であると推測できるかもしれないということです。もちろんさらに検討する余地があると思います。

中井

おそらく、「富」と書いてあったら富田城なのだろうなと私も単純に思ってるんです。そんな、松江が富むようにとかいうことで「富」と書いてあるわけでは決してなくて、これは富田から持ってきてるのだろうと。それはすごく面白い。私自身は今日和田先生の話聴きながら、大変面白かったことのひとつなのですね。元々堀尾氏は富田城に入っているということ。それから富田城で城普請をやっているわけですから、それを解体して持っていくというのは当たり前話でありまして、この辺りも慶長期の、全国的な城造りの特徴のひとつなのかもしれないのです。年輪年代でも慶長3年(1598)ぐらいという推定が出ているということになりますと、これも大変面白い成果だと思います。また、これを建築のほうでさらに分析を進めていただければと思っています。

もうひとつ、今度は城下町の話です。城下町についてまず一点、私自身が押さえておきたいなと思っ

たのは、これは城下町だけではなくて、松江全体に関わる話になりますけれども、よく言われているのは、慶長5年の関ヶ原の合戦の後、いったん堀尾吉晴は富田に入る。しかし富田は非常に狭い。だから松江に移したというわけです。

果たして本当に富田が狭いのか、ということですね。この点、私は決して狭くないと思っております。ですから、城下町につきましても、本当に富田が狭いから松江に移らなければならなかったのかという点について、少し議論をしたいと思うのです。それから松江の城下町の話にいきたいと思うのですが。松尾さん、どうですか。僕は富田は決して狭くないと思うのですが。

松尾

私がスライドを出したのは、ほとんどが実は近世城下町です。富田というと中世の尼子氏の城下町として、山城がありその麓に町屋が展開するというような形だと思います。有名なのが、まだ信長の段階ですけど、浅井を滅ぼした後豊臣秀吉が小谷城を貫きます。一時入ろうか入るまいか逡巡した後やはり狭いという思いで長浜を造ります。長浜はこの段階で成立した近世城下町なのです。それは琵琶湖に面するところにお城を造って、東側の内側にお城に向かう縦方向の道路を造って、そこに両側町の平面形態の城下町を造りました。

つまり、こういう町を造るのには小谷はたしかに狭かった。やはり、富田であれ小谷であれ、山城があってその麓、谷筋あるいはその山城の近くを通る街道に沿ったようなところでできる街村状の町、それだけではやはり近世城下町を展開するには難しい。だから領国経営という面からもやはり領国の中心、あるいは山根先生がおっしゃっていましたように、交通の大動脈を押さえられるような場所に出て行くというところからは、やはり富田は狭い、あるいは遠い。やはり辺鄙なところだったのじゃないのかなと。そういうイメージでやはり富田から松江へという移動はあったのではないかなと思っております。

中井

今松尾さんがおっしゃった大事な点は、近世城下町なのか、戦国城下町なのか、ということですね。私は決して富田が狭いと思っているわけではないのです。城下町を造る意味では、当然あそこは尼子時代から城下があったはずなのですが、それはあくまでも戦国的な城下町の在り方であって、近世の、ずっと松尾さんがパワーポイントで紹介されたような、ああいう城下町は造れない場所だということではないかと思っています。その点も踏まえて、山上さんどうですか、その富田と松江というのは。

山上

そうですね。富田はやはり地形的に言うと起伏が激しいというか、ああいうふうに街村を通して両側町を作っていく上では制約があったのかなと。領国の端であるということも併せて。それと山根先生もご紹介しておられますように、元々松江には既存の町があった、町場が存在したということで、松江にお城を移す。近世的な領国経由を行う上ではその必要があったのだらうと思います。

中井

ありがとうございます。そういう意味で、例えば富田には実は城下町といいますか、富田川の河床遺跡というのがありまして、江戸の初めくらいまで実はあそこには町が存在したわけですね。その調査、あるいは富田城自体の調査に関わってこられた、安来市の教育委員会の船木さんが会場にお見えですので、富田の状況を河床遺跡も含めてご紹介いただけたらと思います。

舟木 聡氏

安来市教育委員会の舟木でございます。富田城と城下町について述べよということですが、皆さんよくご存知のように、富田城は戦国期には尼子氏の居城でありました。その頃の城下町というのははっきりわかっていないのですが、今日会場にいらっやっています古代文化センターの西尾克己さんが発

掘された昭和55年の調査、「富田川河床遺跡」という城下町の遺跡ですが、ここの調査では5面の遺構面が見つかっております。一番上の遺構面が1666年、寛文6年の大洪水で壊滅した城下町。それから、一番古いところでは第5遺構面と呼んでいます、16世紀の第3四半期、およそ16世紀半ばくらいの遺構面が一番古いです。

さっき言いましたように、尼子時代の城下町の形状というのはよくわかっておりません。第5遺構面でも、井戸と石垣、石組みと呼んだ方がいいですかね、それが見つかるくらいではっきりわかりません。おそらく中世の富田城の城下町というのは、富田城が月山の中心にあります、その富田城の周辺に谷がいっぱい入り組んで入っております。大きなところでいうと新宮谷とか塩谷という谷がありますが、そういった場所に家臣団が屋敷を構えてそこに住んでいたと思われます。一般民衆とか寺院は現在の富田城の北西方向、ちょうど今飯梨川が流れている辺りですが、そこに城下町を形成しているというスタイルがどうやら中世のスタイルです。

おそらく近世に入っても、ほとんど基本的にそのスタイルをずっと踏襲したまま城下が存続したようです。それは、新宮谷にあります尼子家の旧家臣団の屋敷、たとえば県の史跡になっております新宮党館を発掘していても、唐津焼ですとかわりと新しい遺物が出土します。ですので、おそらく堀尾氏の、近世初期の家臣団も、ちょっと推測の面があるのですが、昔の中世の家臣団の屋敷跡の平地が大きいので、そのまま利用してその辺に住んでいるのではないかと考えております。

城下町はですね、発掘の事例で言うと、完全に町人地とそれから寺社が並んでおります。発掘調査では、お寺があったと思われるところからはかなり高級な輸入品の陶磁器なんかが大量に出土しますし、あとは大きな道路が、およそ南北方向でしょうか、6mだったと思いますが幅のかなり広い道路がドーンと真ん中に通っていて、その左右に密集して長屋が形成されているという形状であります。近世の松江城のような広い城下町にはなかなか造りにくいところなのかもしれません。近世の城下町に造成するという面では、富田はかなり不便な地域だったのかもしれない。

中井

ありがとうございます。先ほど松尾さんの話にもあったように、近世的な城下町が富田では形成しえなかったということなのですね。今お話しにあったように、おそらく月山のタコ足状に延びていく尾根の間の谷に、城下というか武家地を造ったりすることは出来ても、それをひとところにまとめることが出来なかった。逆に言いますと、慶長5年(1600)以降堀尾氏が入ってきたときに、堀尾氏は家臣団を全部抱えていったん富田に入るわけですよ。ですからあそこに堀尾氏時代の城下町も確実にあったはずなのですね。しかしそれは、今舟木さんがおっしゃったように、毛利時代ですかね、尼子・毛利時代のもをそのまま使わざるを得ない。それではやはり近世の城下町は造れないということで、新しく城地の選定ということになるわけですね。

この事情は彦根でも同じです。井伊家が上州の高崎からまず移って入るのは佐和山城です。ここにはやはり戦国期の城下町がそのままあります。発掘をするとその時代のもも出てくるのですが、ここでも近世の城下町は造れないということで移動するのですね。ですから大事なのは、戦国時代の城下町ではもうだめだということですね。新たな城下町を建設しないといけないということになってくる。

そこでもう一度、振り出しに戻るのかもしれませんが、少し城下町の細かい話をする前に、じゃあ富田がだめだったら何で松江だったのか。元々の課題である、なぜ松江なのかという点について、お一人ずつ、松江の地の利といいますかね、その点について一言いただけたらと思います。

松尾

理由はやっぱり、山根先生が最初に報告されたように地形の話が究極だと思っております。やはり日

本海海域から、美保関から中海に入って、そして大橋川を通ってきて宍道湖に行って平田を目指す、そういう海運の大動脈は大きいなと思いますね。聞きながら、平田ってどんな町だったかなと思ったりはしたのですが、とりあえず白潟や末次はそういう水運の拠点で一定の集落、港湾都市があったと。それは文書のほうでも紹介されていたかと思います。大人（おとな）と呼ばれる町人が住むような、自治も一定程度できるような町として大きな中世集落があったのだなというのが見えます。そういうのを核としてですね、堀尾氏はそこにいた町人達を上手く自分の城下町の町人として取り込むことで城下町経営を成していこうと考えたのではないかなと思います。



松尾 信裕 氏

あと、湿地の整地についても、埋め立てて造成するというのは、この時期の大名はお城もがんがん造れる大名ですから、土木工事は得意だと思うのです。どれだけの規模の町を造るかにもよるでしょうけども、土木工事をしてこれだけの湿地を埋めるならこういうふうにしたらいいなというのは当時の大名はノウハウを持っております。やはり、ポイントは交通の大動脈ですね、それと領国の中心に近いようなところ、そういう視点で選ばれたのが松江なのかなと思っております。

中井

和田先生いかがでしょう。

和田

「地銭帳」という史料があります。近世の出雲地方の町場を見ますと、例えば安来とかあるいは平田、今市あるいは古志とか、それから宍道、さらに横田とかいった所がありますね。たぶんそういった所は近世になってから町場となったのではなくて、古い段階につまり近世以前に町場になっていたと考えられます。

この史料には白潟とか末次とかは載っていません。「地銭帳」が記されたのは松江が城下町になってからですから、末次や白潟が載っていないのは当然ですが、中世にはすでに町場があって、新たに城下町を造る時、宍道湖・中海周辺を見まわすと白潟と末次が少し発達した町場であって、ひとつの要地としてここが選ばれたと推測できると思います。城地をどこにするかということは色々検討されたと思いますが、やはり松江を、白潟と末次を選ぼうというところで決められたのではないかと思います。

中井

ありがとうございます。山上さんにはちょっと意地悪な質問をしたいのですが、城を選ぶのが先なのか、町を選ぶのが先なのか。つまり、ここは要害の地だから松江に城を造るというのが堀尾親子にとっては先決問題なのか、ここは、交通の要衝だから、交通の要衝と言うともちろん軍事的にも要害と言えるかもしれないけれども、町家があるから城を造るのか、ということについてです。城郭研究の立場からはどうなのですか。開府というか、要するに松江をつくろうとしたときにはどちらを選ぶのでしょうか。

山上

私は、今の質問については、まず町を選んだのではないかと考えています。今日、山根先生のパワーポイントで見せられて特にそれを思ったのですが、やはり出雲国内での宍道湖、中海それから美保関など、あの辺の交通・流通経済を考えると、松江というところはどうやら出雲国の交通・経済の結節点にあたっているというのが大きかったかなと思います。

確か毛利氏の萩城の城地選定のときには、鴻ノ峰、萩、三田尻とか、色々と離れている土地の中でどこを選ぶかということが議論になったと思うのです。これに対して篠山城などでは篠山という場所は決

まっぴーいて、その中の篠山・飛山、王地山という場所を候補にあげて幕府の裁可を得るというパターンがあります。松江城の場合は後者です。その場所の、実際にどこに築城するかということで議論があったのです。この場合は、荒隈山と亀田山のどっちにするかという、つまりもう松江は決まっぴーいて、山をどっちにするという話になっていますので、私はやはり松江という場所が先に選ばれていたのではないかと思ひます。

中井

はい、そういうことなのです。お城仲間なので城だと言われるかと思っぴら、やはり近世というのはそういう時代なのだというのが、今のお三人の話から伺えるわけです。

ただこの問題に関しては、今朝ふと気が付いたことなのですが、松江を選んだのはなぜかというような一番根本の話題に対しては、今日最初に報告された山根先生の基調報告の中に入っぴーているのですが、山根先生はパネラーに入っぴーていない。これはちょっと騙されたのではないかと思ひますね。そのコメントを会場にとるのではなくて、山根先生、突然振っぴて申し訳ないですが、これは本当に打ち合わせにはなかったことですが、今のなぜ松江なのかという点についてぜひ山根先生のほうからお話をいただければと思ひます。

山根正明氏

失礼します。シナリオになかったことですのでちょっとドキマギしております。城か町かと問われれば、やはり町だと思ひます。最初に見ていただきました足立不伝さんの「城地選定の図」などからも荒隈山か亀田山かという議論がされたと言われているのですが、私は堀尾父子にとっては荒隈山という選択肢ははじめから無しだろうなと考へています。あの山の様子を見ますと、中世のいわゆる挟撃による殲滅戦という構想には合致した山容であろうと思ひます。富田城もそうですね、尾根筋を四方八方に伸ばして、それぞれに大小の郭を造って谷間を攻め上る敵兵を攻撃することには適していると思ひます。しかし近世の、それぞれの郭がそれぞれの機能を持たされて、そのうえで一個の完結した城郭として機能するという、そういう城を造ろうとした場合、やはり選ばれるのは亀田山だと思っぴております。

中井

ありがとうございます。近世になると、単に軍事的要衝ということではなくて、いかに領内を支配していくかというところで、町を取り込んでいくことが重要だったというのがわかっぴていただけたと思ひます。

私は戦国期から近世の城を専門にしているのですが、いわゆる縄張りというか、城だけを見る傾向が非常に強いのですが、やはり城が何でそこに造られたのかということ考へないと木を見て森を見ずになっぴてしまうのだろうなということを最近特に思っぴているんですけども。そういう意味では、この松江に城が造られたということについては、みなさん中世以来の町場があっぴたところに着目された、その次に荒隈山か亀田山かというところで選んでいったということに落ち着いたのだろうと思ひます。

問題は、中世以来の末次あるいは白濁というような町場が、今度は城下町に当然取り込まれていくわけですけども、そういう中世以来の町場が近世の城下町の中に取り込まれていくというような事例は、例えば松江以外で、松尾さんあるでしょうか。

松尾

今日話しました大坂がそうなのです。実は大坂には元々石山本願寺があっぴて、これが「摂津第一の城」といわれたところに織田信長が目をつけているのですが。太田牛一が書いた『信長公記』に出っぴているんですけども、西の瀬戸内海のほうからたくさんの船が来るのだと。唐とか南蛮だとかからたくさんの船が入っぴてくる「富貴利潤の湊なり」と書いてある。この湊は実は中世にあっぴた渡辺津なのですね。それ

を信長は取り込もうとします。

先ほどのお城か町かっていう話、大坂はどっちなんだろうかと思ったのです。本願寺があったなと思いつきながら考えていました。よく考えれば、信長はその横にあった渡辺津にも魅力を感じていたんじゃないかと思えます。もう一つ、その南に四天王寺に向けて伸ばした道があると話しましたが、四天王寺という大きな商工業都市があったのです。さらに豊臣秀吉の場合は、それを自分の町にしようとしています。四天王寺だけではなくてそのもっと南、10km ぐらい南にある堺も自分の城下町にしようとしています。つまり流通経済、商工業、そういうものを自分のものにしようとするわけですね。

松江にも、白潟とか末次という商工業・流通業全部あるような、この地域では兼ね備わった中世都市があるわけです。そういうものを自分の町にしていこうというのが秀吉です。信長もそうだと思います。安土にはその西隣に常楽寺っていう中世からの琵琶湖水運の港湾都市があります。すぐその横に新しい町を造るのです。それを自分の城下町の一角に取り込んでいこうとします。やはり前代の色々な商工業がにぎやかなところへ持って行って城下町を造っていくのではないかと考えております。

中井

ありがとうございます。堀尾氏はというと、出雲国には関ヶ原の戦功によってやって来るわけですが、実はそれよりも末次あるいは白潟の町の人たちのほうが古くからずっと住んでいて、それが新たにやってきた堀尾氏の城下の経営のなかで、うまく城下町の中に町人地として取り込まれていくのではないかと。当然それを取り込むために堀尾氏はここに城を築いたのだということがわかっていただけたのではないかと思います。

今日は、今私たちが携わっております『松江市史』の『別編 松江城』のために、調査あるいは勉強させていただいているなかで、お三方のほうから報告をしていただいたわけですが、時間もまいりましたので、最後にお一人ずつ、最新の成果をもう一度みなさまにご紹介していただくような形で、パネルディスカッションを締めたいと思います。山上さんからすいませんが一言ずつお願いできたらと思います。

山上

今回松江城に来させていただいて、いろいろな経過とか資料を調べてまいりました。そこでの印象は、堀尾氏というのは、かなり綿密な築城プランを持っていて、並々ならぬというかかなりの勢いで松江城を造っているのだということがイメージとしてわかってきました。そして、私もメンバーなのですが、中国・四国地区城館調査検討会の中国・四国地方の視点から見ると、堀尾氏というのはこの地方に多い外様大名ですから幕府との関係というのは非常に現実的な問題でして、いろいろ制約があったと思います。堀尾としては城郭をこう造りたいのだけど、幕府との関係でここまででは出来なかったという、松江城の縄張りを見て、そういうせめぎあいを見たような気がしました。

そういうなかでも、やはり堀尾氏というのは城下町の造成を含めて非常に努力をした。藩主家そのものは決して幸運であったわけではなく、いろいろな問題を抱えているなかで頑張ったのだということが見えてまいりました。私も一人のサラリーマンですので、いろいろな社会の状況のなかで、自分の夢が潰されそうになりながら頑張った姿が見えて、ちょっと感動しております。以上です。

中井

ありがとうございます。次に和田先生、お願いします。

和田

西先生の受け売りというか、西和夫先生から調査委員会に報告された内容のお話をします。実は昭和の修理の時に、建築関係の井上梅蔵という人が色々の記録を残しております。そのなかに、天守が改築

を受けたものじゃないかということを言われています。それがいつ頃かという、改築時期の問題が今後大きな検討事項になっていくと思われます。

西先生も「富」という字に注目され、それを年輪年代で調べたら古い部材であったということが明らかになりつつあります。また、天守が当初どういう形であったかということに関しては、もう少し検討しなければならなくなってきました。

それから現在、基本的な史料として、『(竹内右兵衛書つけ)』を翻刻しています。『松江城研究』の第1号が来春に出ますので、その中に発表しようと思っています。それを詳しく見てもらいたいのですが、単に「書つけ」それだけを単独で読むのではなくて、やはり「城郭図」や「縄張図」と一体として見ていくとその時代の姿がどうかということがよくわかってきます。そうすると、松江城には本丸・二之丸・三之丸とありますが、それらがどういう発展段階をたどってきたかわかってくるのではないかと思います。

今興味を持っていますのは、奥御殿（「書つけ」にある「新御屋敷」）というのはどういった性格の施設なのか、あるいは三之丸がいつ頃本格的に整備されだしたのかというところですけど、それらを文書史料だけでなく絵図史料などを通して調べていきたいと思っています。

それから、松江の城下町についてですが、松江城下は道が江戸時代の姿のままで、つまり堀尾時代の絵図等の姿のままで江戸時代を通して継承されて現在に至っています。武家地は武家地で残っていて、町場は町場で残って残っています。雑賀町も古い姿そのままの町割りあるいは屋敷割りとして残っています。建物は無くなっていますが、道そのものは基本的に江戸時代の姿をきちんととめているところが、松江のひとつの宝になっているのではないかと思います。

中井

ありがとうございます。

松尾

今松江は、やっとその歴史が発掘というやり方で明らかになろうとしています。家老屋敷では大きな面積を発掘調査いたしております。そのお陰で、皆さんの前に、例えば歴史館の中の展示という形で、こういうものを使っていたのだということがわかってきています。

これ以外にも、城山北公園線と呼ばれる道路でしょうか、東西に広く道路拡幅しているところで、本当にこちらの行政の担当者の方は一生懸命やっておられます。そういうところからも、例えば城下町を造る直前の姿がだんだんと見えてきています。大きな、幅が3m位で、深さが2～3mもあるような、幹線水路というのでしょうか、排水路というべきでしょうか、それとも、土地を乾かすためなのでしょう、そういう溝が、今の道路と同じ方向で、道路とは別の所で見つかったりしています。ひょっとすれば、それは城下町を造るための最初の第一歩の仕事だったかもしれません。そういうものをひとつひとつ明らかにしていきますと、松江の造成工事というのはもっともっと見えてくるのではないかなと思います。それが見えることで、当時の城下町建設工事そのものの姿というのも見えてくるのではないかと思います。

もうひとつ、何でここの町を選んだかという課題に対しては、中世集落である白潟・末次の姿、これが見えてないのです。文献史料では見られます。何処かで発掘調査をして欲しいと思っていますが、個人所有地のところがほとんどですので、なかなか難しいとは思いますが、でも、文献からだけではなくて実際にものが見つかったら、今まで考古学者が何十年も近世城下町の発掘調査をやってきた成果で、城下町の形がわかりつつあるのです。松江でも発掘調査で確認されると、さらに城下町の出現期の形が明らかになるだろうと思います。法螺じゃなくなりますのでね。まだ今は推測ですが、実証されればと思っ

ております、ということで終わります。

中井

ありがとうございました。壇上四人のなかで、和田先生以外は考古学をやっている人間で、「掘れ掘れ、掘れ掘れ」と言うのですけれど、私も本丸を掘ったら面白いだろうなと思っているのですが。

コーディネーター役の私が、最後に少し締めたいと思います。私は松江城の天守がすごく好き、というか日本で一番好きな天守なのです。あの無骨さというのが素晴らしく好きで、私は彦根のほうに勤めているのですが、彦根城の天守、つまり国宝よりも好きなのです。無骨さというのが好きだと思っていたのが、今日、ちょっと違うと言われてショックなのですけれども。でも今の姿は今の姿で、改修を受けて今の姿になっている。そういう変遷がこれからわかってくるというのが大変楽しみになっています。

それから、我々三人は大阪、兵庫、滋賀から来ているのですけれども、昨日も仲間に「今からどこ行くんや」「松江、行くねん」「松江、ええな」と言われたのですが、松江に行っても普段は城をゆっくり見ることもなく、こういう演台に立って喋ったらすぐに帰るわけですが、今日はたまたまちょっと時間があって、三人でどこに行くのか決めようとしたら、三人が一致して「歴史館に行こう」となりました。そのとき、こんな勉強家はいないなと思ったのですけれども。(笑)

驚いたのは、一番最初の開館の時の図録「松江創世記－堀尾氏三代の国づくり」を買おうと思ったら、もう売り切れていたのです。松江で、堀尾氏の本が売り切れるなんてあり得るのかと思いつながら、これは素晴らしいことだなと思いました。やはり、その歴史を改めて掘り起こされた結果だと思っています。

今回、「松江城研究の最前線」ということで、縄張り、あるいは建築、さらに城下町の最前線の報告をさせていただきました。これについては、『松江城研究』という本の第1号が出ます。これを読んでいただけたら幸いです。

実は会場から質問を受け付けたかったのですが、1時間というパネルディスカッションのなかでは質問を受ける時間がとれませんでした。もしご質問があるようでしたら、教育委員会の史料編纂室のほうへ行かれて、「松尾が言うことはおかしいのではないか」とか「山上の発言はあり得ない」というようなことを言っていただけたら、それを松江城研究のほうに活かしていきたいと思っています。

また、我々はこれからの市史編纂の過程で、たびたび寄せていただこうと思っていますし、今後もこういう機会を設けていただけたらと思います。そのときには是非またお越しいただいて、さらに松江城の研究の最新情報を知っていただけたらありがたいと思います。

非常にコーディネーターが下手で申し訳なかったのですが、お三方のご協力で、大変面白い成果が出たのではないかとと思っています。時間もまいりましたので、ひとまずこれでパネルディスカッションは終わりたいと思います。どうも最後までご静聴ありがとうございました。(拍手)

(この記録には、発言の趣旨を生かしながら加除した部分があります。ご了解ください。)

堀尾氏の出雲支配における支城について（1）

－三刀屋尾崎城－

滋賀県立大学 中井 均

はじめに

拙稿の目的は、堀尾氏の出雲支配における支城配置を城郭構造から明らかにすることにある。慶長5年(1600)の関ヶ原合戦後、徳川家康による諸大名の増、減、除封がおこなわれ、数多くの大名が新たな封地に移動することとなった。移封された大名は新たに居城を築くとともに領国支配と国境警備のために支城を築いた。例えば筑前に移封された黒田長政は福岡城を居城とし、翌6年には筑前六端城の制を敷き、豊前との国境に若松城、黒崎城、鷹取城、大隈(益富)城、小石原松尾城、左右良(麻底良)城を築いた。これに対して豊前に移封された細川忠興は中津城を居城とし、慶長7年には小倉城に本拠を移動するとともに、領国内に門司城、香春城、岩石城、一戸城、龍王城、高田城、木付城を築いて黒田氏、毛利氏に対した。また、安芸に移封された福島正則は隣国長門の毛利輝元に対して亀居(小方)城、神辺城、三原城、鞆城、東城城、三次城を支城として国境警備にあたらせていた。

関ヶ原合戦は天下分け目の戦いとして有名であり、徳川幕府の礎ともなった合戦ではあったが、実は平和をもたらせた合戦ではなく、合戦後は戦国時代最大の軍事的緊張を生んだ。大坂城には豊臣秀頼がおり、移封された領国では隣国に関ヶ原で戦った敵がいるといった状況は、居城を新たに築くだけでなく、新領地支配と国境警備に支城は必要不可欠であった。しかも新たな領国が一国支配の国持ち大名の場合は必須条件であったともいえる。

ところが元和元年(1615)に発令された「一国一城令」により^(注1)、支城の大半が廃城となる。このため史料がほとんど残っておらず、こうした近世初頭の支城研究は立ち遅れていた。近年、城郭構造、いわゆる縄張り自体からの分析により研究は一気に進むこととなった^(注2)。しかし、支城研究は少ないなりに史料の残る筑前や豊前、安芸などに限定されていたことは否定できない。

拙稿ではこれまでほとんど顧みられることのなかった堀尾氏による出雲支配の支城体制を分析するものである。

1. 堀尾氏の出雲入国

堀尾氏の出雲支配の支城体制については、支城が元和元年に廃城となり、堀尾忠晴が寛永10年(1633)に嫡子なく断絶したため、その史料がほとんど残されておらず、その存在すら議論されたことがなかったといっても過言ではない^(注3)。しかし、堀尾氏は出雲、隠岐2ヶ国の国持ち大名であり、隣国には、伯耆に池田光政が、長門には毛利輝元が、備後には福島正則が封じられており、当然支城を築城したと考えられる。そこで領国内の城跡で織田・豊臣系の城郭構造を有する城跡を確認することができれば、それは慶長5年以降に築かれたものとして考えられ、すなわち堀尾氏の支城として築かれたものである可能性が非常に高い城として捉えられよう。

さて、堀尾吉晴は、豊臣秀吉の家臣となり豊臣秀次の宿老として、天正13年(1584)に近江佐和山城主となり、同18年には遠江浜松城主となる。関ヶ原合戦では東軍に属し、その戦功により、出雲・隠岐2ヶ国24万石の大大名となり、慶長6年には出雲へ入国し、月山富田城に入城する。しかし、月山富田城は領国の東端に位置しており、さらに戦国城下町としての限界から、入城直後より新城の築城が急務とな

り、中世以降の港町として栄えていた末次、白潟を取り込んで松江城が築かれた。しかし家督を継いだ忠氏は28歳で死去し、それを継いだ忠晴も35歳で寛永10（1633）年に病没し、堀尾家は断絶してしまう。

2. 出雲における織田・豊臣系城郭

島根県では平成5年度より5ヶ年をかけて島根県内の中世城館跡について詳細に分布調査を実施、県内に約1000ヶ所にのぼる城館跡を確認している。こうした成果は『島根県中近世城館跡分布調査報告書』2冊として刊行されている（注4）。

そのなかで石垣を伴い、虎口に枡形を採用している、明らかに戦国時代の土の城ではなく、近世初頭の石の城と認められるものは松江城以外に、月山富田城、三刀屋尾崎城、赤名瀬戸山城、三沢城である。

出雲では尼子氏滅亡後に毛利氏領となり、月山富田城には天野隆重、毛利元秋、吉川元康、吉川広家らが入れ置かれる。こうした状況より月山の現状遺構を毛利、吉川氏段階のものととらえられる説もあったが（注5）、山中御殿の石垣構造が打込接で、典型的な文禄～慶長年間の石積み技術を示していることより堀尾氏による改修であることはまちがいない。つまり出雲における石垣の導入は堀尾氏入封によるものであり、石垣を有する城は堀尾氏によって築かれた城としてまず、まちがいない。

3. 三刀屋尾崎城の歴史

三刀屋城には城山の山頂部と、通称じゃ山の山頂部の両方に中世城郭の遺構が認められることより、城山の城跡を三刀屋尾崎城と呼び、じゃ山の城跡をじゃ山城跡と呼んでいる。

三刀屋の地は出雲のほぼ中央に位置しており、城は標高135mの城山の山頂に築かれている。城山は禪定寺山より東に派生する山稜の先端に位置し、北側山麓を流れる古城川と、南側山麓を流れる三刀屋川に挟まれた東西に長い尾根筋である。

城の歴史としては、承久の変で戦功のあった諏訪部扶長が三刀屋郷の地頭に補せられ、ここに城を築いたと伝えられているが、もちろんその史料はなく、あくまでも伝承に過ぎない。諏訪部氏16代為扶のときに地名を名字として三刀屋氏を名乗り、久祐の頃には尼子方に属していたようであるが、永禄5年（1562）に毛利元就に攻められると、毛利方に降っている。しかし、天正16年（1588）に毛利輝元によって領地を没収されて廃城となっている。ところが現存する石垣や城郭構造は天正年間までに築いたものではない技術を示しており、三刀屋氏後も城郭として機能していたことはまちがいない。堀尾氏の出雲入国により三刀屋は家臣の堀尾修理の所領となるが、それは領地だけではなく、三刀屋尾崎城を支城として改修したことはまちがいない。その後、元和元年の一国一城令により廃城になったものと考えられる。

4. 三刀屋尾崎城の構造

主 郭

三刀屋尾崎城は東西約450m、南北約260mを測る巨大な山城である。山頂部に構えられた主郭は、東西約110m、南北15～20mを測る長大な曲輪で、こうした巨大な曲輪も近世的といえよう。主郭のほぼ中央に石塁による仕切りが構えられ、東側が本丸に、西側が二の丸に相当する曲輪と考えられる。本丸の東端には石垣によって築かれた方形の土壇が一段高く構えられている。これは天守台であり、ここにも現存する三刀屋尾崎城が近世的な城郭遺構であることを雄弁に物語っている。仕切りの石塁はL字状に屈曲しており、直進を妨げている。二の丸はほぼ長方形の平面となる。こうした中心部の切岸部には石垣が認められ、ほぼ中心部が石垣によって築かれていたことが明らかとなっている。さらに仕切り石塁の延長線上に北方の切岸へ登り石垣（豎石垣）が、また二の丸の南西隅部からも登り石垣が伸びてお

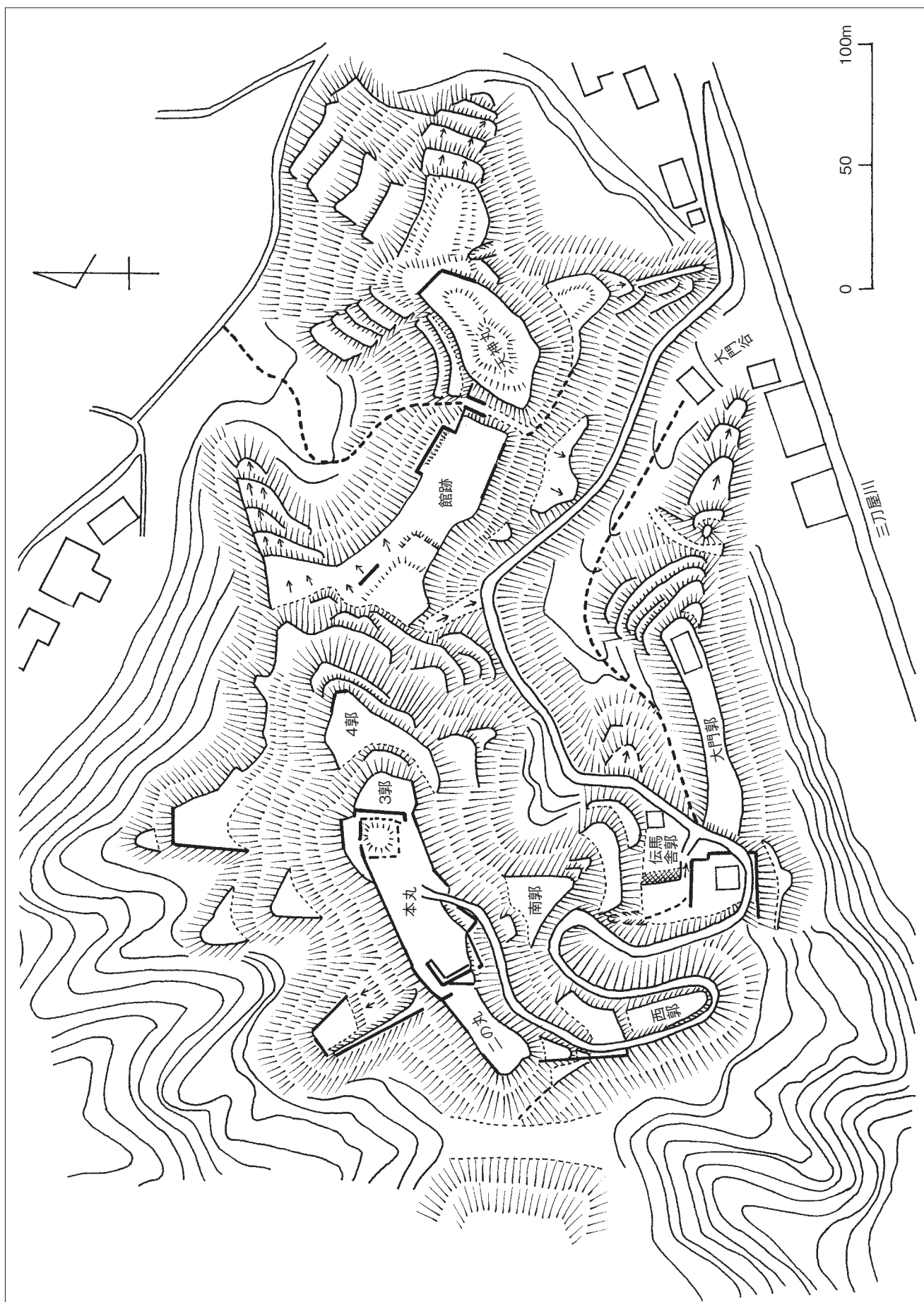


図1 三刀屋尾崎城跡概要図 [太線は石垣] (中井 均 作図)

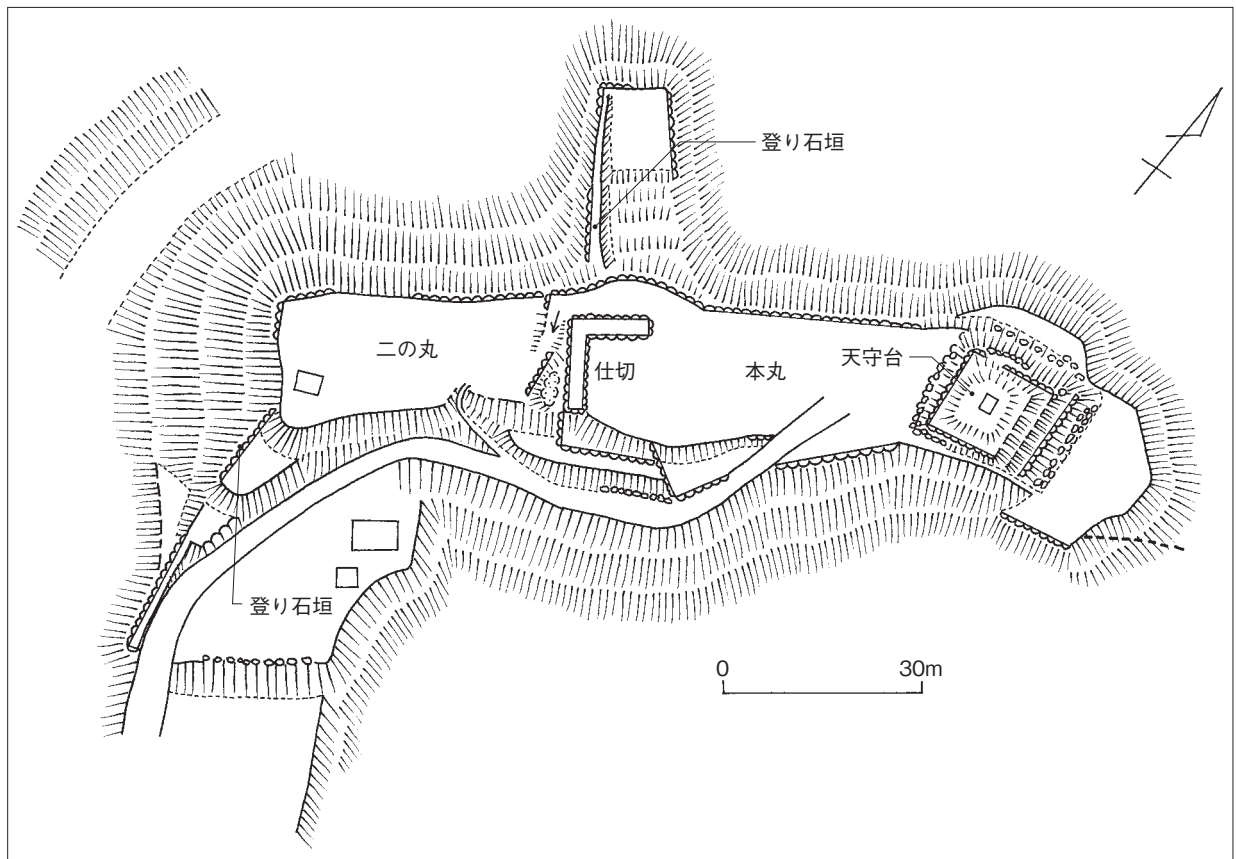


図2 三刀屋尾崎城跡中心部概要図（中井 均 作図）

り、両翼を広げるように斜面地の防御を強固なものとしている。

石 垣

三刀屋尾崎城の主郭を構成する石垣は、特に城の南面と東面に多く認められる。これは城下のあった三刀屋の町からの眺望を意識したものであることは明らかで、まさに見せる城として築かれたものである。報告書によると、石垣は大きく2種類に分類されるとし、1つは「巨石の割石を打込みはぎに積み、隅角部は算木積みとしたもの」で、2つは「雑石をやや横長手に持ち送り気味に積んでいるもの」としている。さらに報告書では、「雑石乱積み石垣は郭の整備に用いられた石垣であり、前者の打込みはぎ算木積み石垣は、その以後において改修に伴って用いられたものと判断される」としている（注6）。しかし、現存する石垣を用いた遺構は非常に統一的な構造であり、時間差を認めることはできない。2種の石垣は時間差を示すものではなく、同時期の機能差である。おそらく見せる部分には矢穴技法によって割った石材を用い、仕切りや低石垣には自然石を積んだものと考えられる。

なお、石材は花崗岩であり、三刀屋川を遡った栗谷に矢穴の残る石切場が近年まで残存していたとのことであり、三刀屋川を利用して運搬したようである。



三刀屋尾崎城跡天守台

東方郭群

主郭の東方には第3郭、第4郭が階段状に配置され、その直下に東西約100mを測る巨大な曲輪が配されており、館跡と伝えられる曲輪である。その東端には横矢の効く虎口が設けられており、搦手道として城の東北山麓の福谷に至る。この巨大な曲輪の東北側にも天神丸と呼ばれる同等の巨大な曲輪が配置されている。天神丸は北端を石垣としていることより曲輪であることはまちがいないが、削平はこれまで見てきた曲輪群に比べて非常に甘く、未削平に近い。さらに天神丸より東方に構えられた曲輪群もすべて削平が甘く、館跡より東側では普請に大きな相違が認められる。

大手虎口

主郭の南に派生する尾根筋は、伝馬舎郭と呼ばれる曲輪で直角に東へ向かい、その尾根筋に大門郭が構えられている。大門郭と主郭に挟まれた谷は大門谷と呼ばれ、これが大手道と考えられる。その突き当りに位置するのが、伝馬舎郭である。伝馬舎郭は横矢の効く石垣を備えた曲輪で、大門谷の最奥部に位置していることより、大手虎口の枳形と考えられるが、残念ながら虎口本体となる部分は破壊されており、明確な虎口遺構は残していない。



三刀屋尾崎城跡館跡石垣

しかし、これまでの発掘調査では瓦の出土は報告されておらず、石垣は導入したものの瓦葺建物は造営されなかったようである。一時堀尾氏の本城となった月山富田城と松江城では瓦が採用されていることより、本・支城体制のなかで瓦の採用に規制があったことを示唆しているものかも知れない。今後の問題点としておきたい。

また、石垣が基底部のみを残し、大規模に崩落しているが、これは自然崩壊ではなく、人工的に崩されたものである。元和の一国一城令により廃城と決まった段階で城割り（破城）がおこなわれたことを示す崩落と見てよいだろう。



三刀屋尾崎城跡主郭を仕切る石垣

このように現存する三刀屋尾崎城は近世初頭の城郭構造を示しており、その中心部は割石を用いた石垣によって築かれている。こうした普請が三刀屋氏、毛利氏の段階のものでないことは明らかであり、遺構から慶長5年以降の堀尾氏によって築かれた城であることを示す稀有な事例として評価できよう。



三刀屋尾崎城跡石垣石材の矢穴

おわりに

残存する城郭構造から堀尾氏時代の支城について検討をおこなった。その結果、堀尾氏は松江城を本城として、月山富田城、三刀屋尾崎城、赤名瀬戸山城、三沢城などを支城として出雲支配をおこなっていたことを明らかにできた。今回はそのうち三刀屋尾崎城についてその構造を紹介した。他の支城の構造についても今後の『松江城研究』で紹介をしたい。

(注1) 元和一国一城令は江戸年寄衆(土井利勝・安藤重信・酒井忠世)の連署奉書という形で、西国の国持大名に発給された。例えば肥前の鍋島勝茂に宛てた連署奉書には、「一国一城之外破却候様ニと被仰出候、可被得其意也」と記されている。

(注2) 近年の本・支城研究の到達点を示す論考としては、高田徹「慶長期における本城・支城構造 一福島・毛利領を中心として」(『中世城郭研究』第9号 1995 中世城郭研究会)がある。

(注3) ただし、松江市歴史館の開館に伴う特別展『松江創世記堀尾氏三代』では、「出雲国の楯となる」という項目を立て、三刀屋尾崎城、赤名瀬戸山城、富田城の3城を重臣が守った城として扱っている(新庄正典『松江歴史館平成23年度特別展春の巻 松江創世記堀尾氏三代の国づくり』2011 松江歴史館)

(注4) 島根県教育委員会『島根県中世城館跡総合調査報告書<第1集>石見の城館跡』1997、『島根県中近世城館跡分布調査報告書<第2集>出雲・隠岐の城館跡』1998

なお、出雲・隠岐両国の城館跡600ヶ所の内訳は、遺構現存遺跡471ヶ所、未踏査及び不明箇所92ヶ所、消滅箇所37ヶ所となっている。

(注5) 北垣聡一郎「月山富田城の立地とその遺構」『史跡富田城跡山中御殿平 昭和50年～54年度環境整備報告』1980 広瀬町教育委員会

(注6) 杉原清一他『三刀屋城跡調査報告書』1983 三刀屋町教育委員会

松江平野の古環境（1）

— 県道城山北公園線発掘調査に関連して（1） —

文化財調査コンサルタント(株)・島根大学汽水域研究センター 渡辺 正巳
島根大学汽水域研究センター 瀬戸 浩二

1. はじめに

「松江平野」は、「松江市・八束郡東出雲町に広がる平野。宍道湖と中海にはさまれた東西・南北とも約10キロメートルの低地帯」（デジタル大辞泉，HP）と定義されている。しかし一般には、大橋川流域の低地（東は朝酌川流域、西は比津川流域、南は国道9号線南方の丘陵まで、北は北山山地の縁辺まで）の数km四方を指し、中海や宍道湖に直接流れ込む意宇川、乃白川、佐陀川流域を除くことが多い。

中海、宍道湖湖底堆積物を対象とした地質学的な研究は、水野ほか（1972）以降、偏りなく多く行われている。一方、「松江平野」を対象とした地質学的な研究は、松江平野北東部の朝酌川中～下流域に偏っている（中村ほか，1996 など）。今回報告する松江平野中心部、近世「松江城下町」域を対象とした研究はごく僅かであり、しかも網羅的なものが多い（林，1991 など）。林（1991）は、ボーリングデータを集成し、松江平野全域の微地形分類図と近世「松江城下町」域を縦断する地質断面図を描いている。これに対し各論的な研究は、渡辺・瀬戸（2011）によって、今回の調査地北方の「家老屋敷跡」においてCNS元素分析、花粉分析及びAMS年代測定が実施、報告されるまで、皆無と言って良い状態であった。

本報告では、県道城山北公園（通称大手前）線建設工事に伴う発掘調査地において、簡易型ジオスライサーによって採取した試料を対象としてCNS元素分析、花粉分析及びAMS年代測定を実施した。この結果、近世「松江城下町」形成前の古地理、古地形に関する新たな知見を得たので報告する。

2. 試料について

図1に示した各地点で、簡易型ジオスライサーによる試料採取を行った。採取後の試料を試験室内に

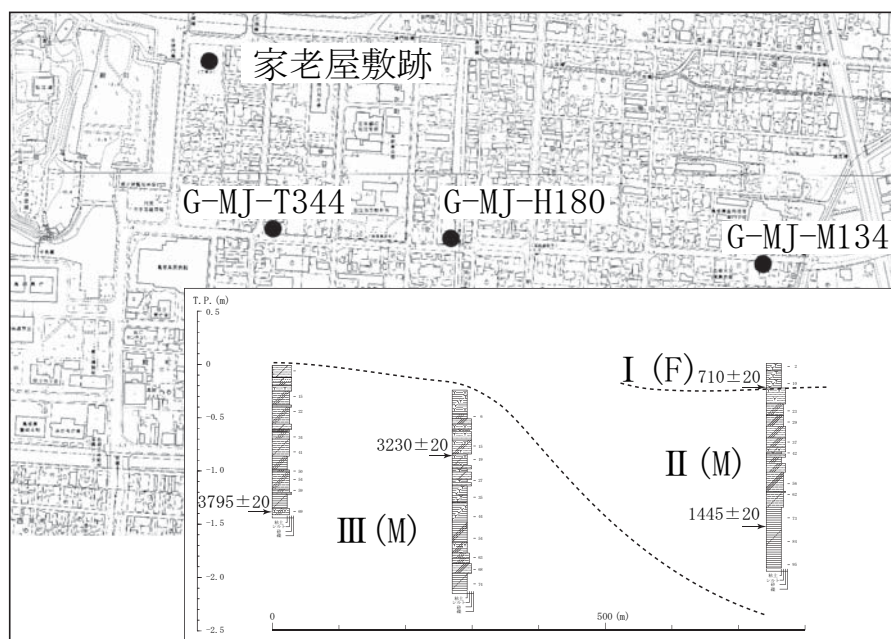


図1 試料採取地点と花粉層序断面

I, II, III: 花粉帯
(F): 淡水成層, (M): 海成(汽水成)層

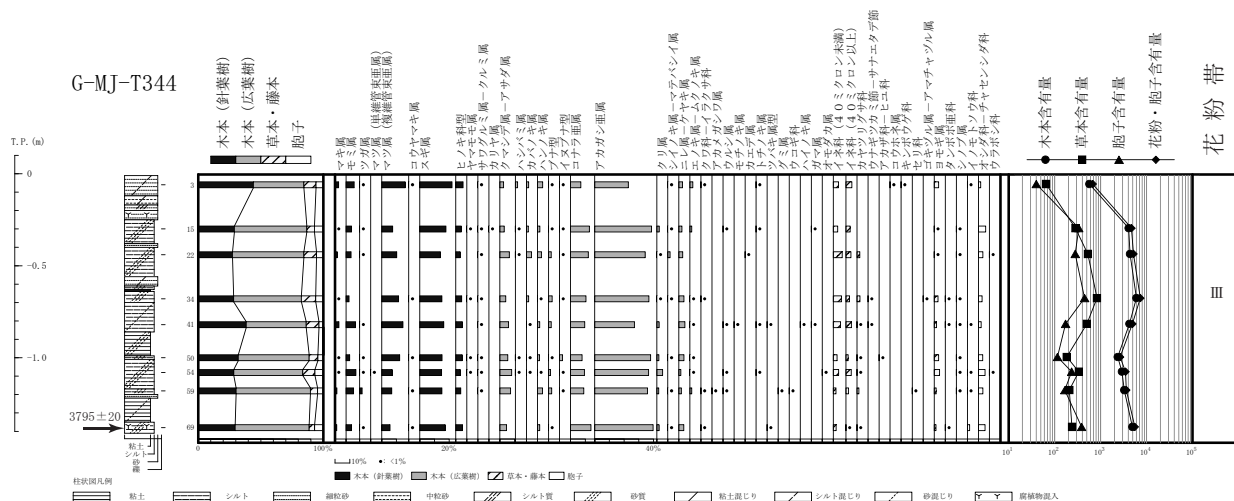


図2 G-MJ-T344 の花粉ダイアグラム

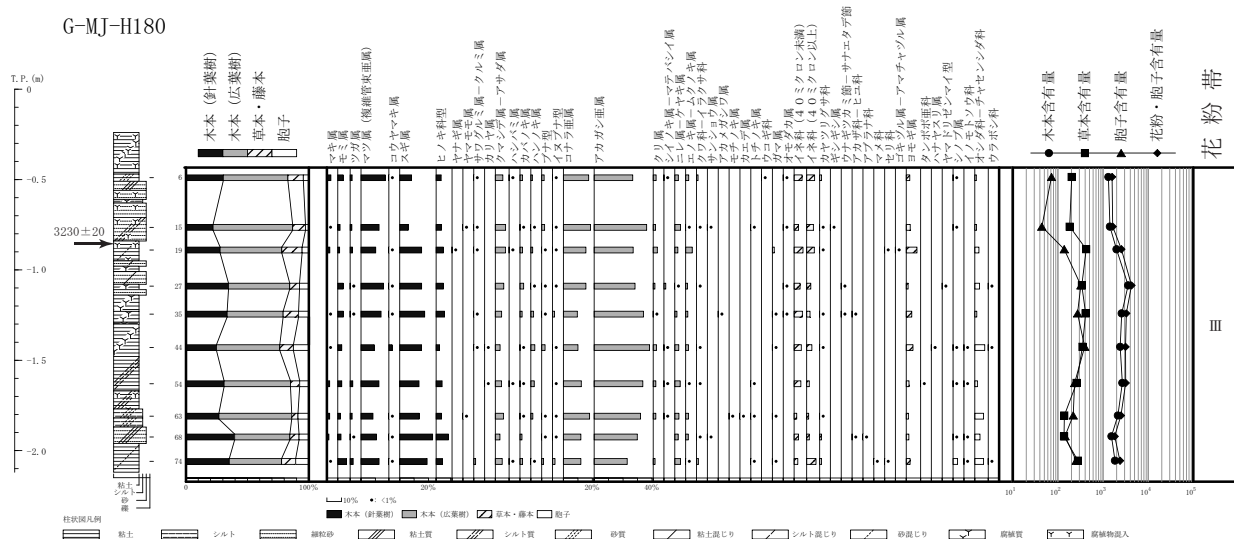


図3 G-MJ-H180 の花粉ダイアグラム

持ち込み、観察、分割を行った。各地点の層相は各種ダイアグラム左端に示したとおりである。また、分析試料について、その深度に「-」と試料番号を示している。

3. 分析方法・分析結果

(1) 花粉分析

渡辺 (2010) に従い分析処理を行った。検鏡に当たり、プレパラートを光学顕微鏡下の 400 ～ 1000 倍で観察し、原則的に木本花粉（化石）で 200 粒以上の検定、計数を行い、同時に出現する草本花粉（化石）と孢子（化石）の検定、計数も行った。また中村 (1974) に従い、イネを含む可能性が高いイネ科（40 ミクロン以上）とイネを含む可能性が低いイネ科（40 ミクロン未満）に細分している。

花粉分析結果を図2～4と表1に示す。図2～4の「花粉ダイアグラム」では、各々の木本花粉、草本花粉、一部の孢子について、計数した木本花粉を基数にした百分率を算出してスペクトルで表したほか、「総合ダイアグラム」として、分類群ごとの割合をこれらの総数を基数とした、累積百分率のスペクトルとして表した。さらに、分類群ごとの単位重量当たりの含有量を、折れ線グラフで示した。

表1 花粉組成表

地点名		G-MJ-T344												G-MJ-H180										
試料番号		3	15	22	34	41	50	54	59	69	6	15												
3 Podocarpus	マキ属	5	2%	1	0%	4	2%	2	1%	7	3%	1	0%	2	1%	3	1%	3	1%	8	3%	2	1%	
5 Abies	モミ属	11	5%	9	4%	9	3%	4	2%	17	6%	5	2%	15	7%	12	5%	10	4%	11	4%	4	2%	
10 Tsuga	ツガ属	2	1%	1	0%	1	0%		0%	1	0%	1	0%	2	1%	4	2%	2	1%	4	1%	3	1%	
13 Picea	トウヒ属																							
19 Pinus (Haploxyton)	マツ属：単維管束亜属													1	0%									
21 Pinus (Diploxyton)	マツ属：複維管束亜属	32	16%	18	7%	27	10%	23	11%	39	14%	25	12%	16	7%	16	7%	15	6%	49	17%	32	13%	
30 Sciadopitys	コウヤマキ属	1	0%		0%		0%	2	1%		0%	2	1%		0%	1	0%	1	0%	1	0%			
32 Cryptomeria	スギ属	44	22%	43	18%	37	14%	30	15%	44	16%	31	15%	33	15%	35	15%	46	17%	24	8%	15	6%	
41 Cupressaceae type	ヒノキ科型	10	5%	9	4%	8	3%	8	4%	12	4%	9	4%	7	3%	8	3%	12	4%	10	3%	9	4%	
45 Ephedra	マオウ属																							
51 Salix	ヤナギ属																							
52 Myrica	ヤマモモ属			2	1%			1	0%			1	0%	2	1%							1	0%	
60 Platycarya	ノグルミ属																							
62 Pterocarya-Juglans	サワグルミ属ークルミ属	2	1%	1	0%	2	1%	1	0%	2	1%	1	0%	1	0%	1	0%		0%	1	0%	1	0%	
65 Carya	カリヤ属			1	0%																			
71 Carpinus-Ostrya	クマシデ属－アサダ属	5	2%	7	3%	17	6%	8	4%	16	6%	11	5%	18	8%	17	7%	12	4%	15	5%	18	7%	
73 Corylus	ハシバミ属	3	1%	1	0%	1	0%					1	0%	2	1%					2	1%			
74 Betula	カバノキ属	3	1%	3	1%	9	3%	3	1%	1	0%	2	1%	1	0%					5	2%	1	0%	
75 Alnus	ハンノキ属	7	3%	4	2%	7	3%	2	1%	4	1%	3	1%	1	0%	8	3%	4	1%	3	1%	2	1%	
81 Fagus crenata type	ブナ型	1	0%	2	1%	5	2%	5	2%	5	2%	2	1%	3	1%	5	2%	2	1%	5	2%	5	2%	
82 Fagus japonica type	イヌブナ型	2	1%	1	0%	1	0%	2	1%	0	0%	4	2%	2	1%	2	1%		0%	1	0%	2	1%	
83 Quercus	コナラ亜属	14	7%	31	13%	32	12%	21	10%	26	10%	16	8%	21	9%	21	9%	37	14%	51	17%	48	19%	
84 Cyclobalanopsis	アカガシ亜属	46	23%	94	39%	91	34%	74	37%	73	27%	78	38%	82	37%	84	36%	106	40%	78	27%	93	36%	
85 Castanea	クリ属			4	2%	2	1%	2	1%	4	1%	3	1%	9	4%	3	1%	4	1%	6	2%	4	2%	
88 Castanopsis-Pasania	シノキ属－マデバシイ属	2	1%	1	0%	4	2%	2	1%			1	0%			2	1%	2	1%	1	0%			
92 Ulmus-Zelkova	ニレ属－ケヤキ属	5	2%	5	2%	7	3%	7	3%	11	4%	7	3%	3	1%	4	2%	9	3%	7	2%	10	4%	
94 Aphananthe-Celtis	ムクノキ属－エノキ属	4	2%	3	1%			2	1%	2	1%	1	0%	1	0%	3	1%			6	2%	2	1%	
97 Moraceae-Urticaceae	クワ科－イラクサ科	1	0%					2	1%		0%		0%			1	0%	1	0%	3	1%	1	0%	
132 Zanthoxylum	サンショウ属																					1	0%	
141 Mallotus	アカメガシワ属															1	0%							
150 Rhus	ウルシ属			1	0%					1	0%		0%	1	0%	1	0%							
160 Ilex	モチノキ属									2	1%		0%											
170 Acer	カエデ属				1	0%																		
172 Aesculus	トチノキ属	1	0%	1	0%					1	0%		0%	1	0%								2	1%
183 Camelia type	ツバキ属型									1	0%		0%					1	0%					
195 Elaeagnus	グミ属															1	0%							
202 Araliaceae	ウコギ科															1	0%			1	0%			
206 Cornus	ミズキ属																							
220 Ericaceae	ツツジ科																0%							
230 Symplocos	ハイノキ属									1	0%						0%							
301 Typha	ガマ属			1	0%					1	0%						0%							
305 Alisma	サジオモダカ属																0%							
306 Sagittaria	オモダカ属														1	0%	0%			1	0%	1	0%	
311 Gramineae (<40)	イネ科 (40 ミクロン未満)	7	3%	7	3%	16	6%	11	5%	13	5%	5	2%	8	4%	4	2%	5	2%	16	5%	8	3%	
312 Gramineae (>40)	イネ科 (40 ミクロン以上)	8	4%	7	3%	9	3%	5	2%	10	4%	3	1%	8	4%	4	2%	2	1%	16	5%	12	5%	
320 Cyperaceae	カヤツリグサ科				5	2%	4	2%	1	0%	1	0%	1	0%	3	1%	2	1%	4	1%	2	1%		
336 Aneilema	イボクサ属																							
345 Liliaceae	ユリ科																							
411 Rumex	ギシギシ属																					1	0%	
416 Echinocaulon-Persicaria	ウナギツカミ節－サナエタデ節						1	0%	2	1%														
420 Fagopyrum	ソバ属																							
422 Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科											1	0%											
430 Caryophyllaceae	ナデシコ科																							
441 Nuphar	コウホネ属	1	0%																					
450 Ranunculaceae	キンボウゲ科	1	0%																					
455 Thalictrum	カラマツソウ属																							
461 Cruciferae	アブラナ科																							
501 Leguminosae	マメ科																							
557 Rotala	キカシグサ属																							
571 Haloragaceae	アリノトウグサ科																							
580 Umbelliferae	セリ科															1	0%							
651 Patrinia	オミナエシ属																							
672 Actinostemma-Gynostemma	ゴキツル属－アマチャヅル属						1	0%																
710 Carduoidae	キク亜科																							
711 Ambrosia-Xanthium	ブタグサ属－オナモミ属																							
712 Artemisia	ヨモギ属	6	3%	2	1%	2	1%	5	2%	4	1%	6	3%	8	4%	3	1%	3	1%	7	2%	7	3%	
720 Cichorioideae	タンポポ亜科						1	0%	1	0%								1	0%					
803 Urostachys serratum type	トウゲシバ型																							
842 Subgenus Sceptridium	フユノハナワラビ亜属																							
850 Ophioglossum	ハナヤスリ属																							
863 Osmunda cinnamomea. type	ヤマドリゼンマイ型																							
875 Davallia	シノブ属			1	0%	1	0%	2	1%	1	0%	2	1%	2	1%	1	0%			1	0%	1	0%	
881 Pteridaceae	イノモトソウ科	2	1%							2	1%			1	0%	1	0%	4	1%					
886 Aspid.-Asple.	オシダ科－チャセンシダ科	3	1%	12	5%	8	3%	5	2%	5	2%	6	3%	10	4%	7	3%	12	4%	3	1%	3	1%	
891 Polypodiaceae	ウラボシ科				1	0%								1	0%									
898 MONOLATE-TYPE-SPORE	単条溝孢子			1	0%	2	1%	3	1%	1	0%			1	0%					1	0%	2	1%	
899 TRILATE-TYPE-SPORE	三条溝孢子	9	4%	6	2%	5	2%	5	2%	2	1%	2	1%	3	1%	3	1%	5	2%	11	4%	2	1%	
木本花粉総数		201	84%	243	87%	265	84%	201	82%	270	86%	205	89%	224	84%	234	90%	267	89%	292	83%	256	87%	
草本花粉総数</																								

G-MJ-T344

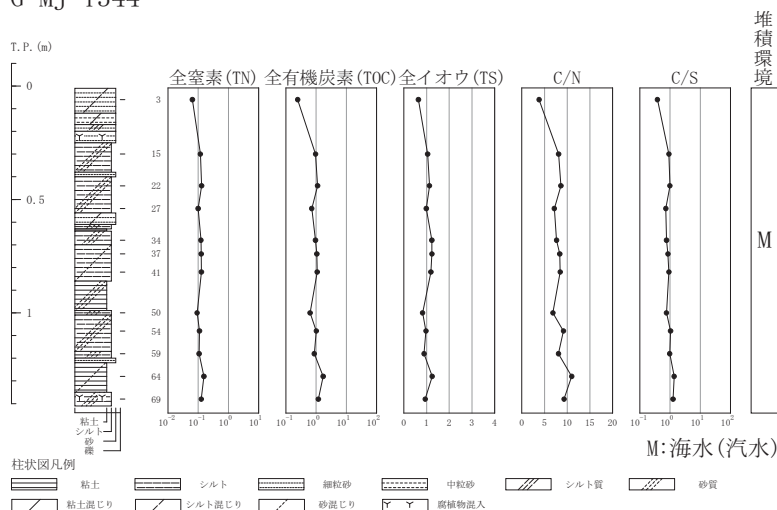


図5 G-MJ-T344 の CNS ダイアグラム

G-MJ-H180

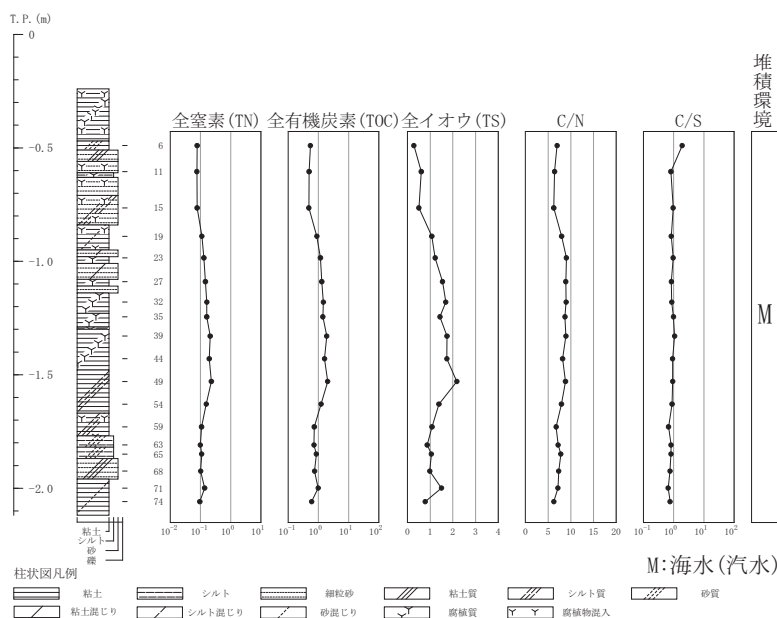


図6 G-MJ-H180 の CNS ダイアグラム

4. 堆積環境について

CNS 元素分析結果を基に、各地点の堆積環境を推定する。

① G-MJ-T344

C/S が 2 未満で、TOC がおよそ 0.2% 以上を示すことから、全ての試料が海水環境下で堆積したものと推定できる。更に TOC は 2% 程度より低く、底質、低層水ともにやや還元性であったことが分かる。また、C/N は変異が大きいものの 11 未満であり、含まれる有機物は陸上植物とプランクトン双方の影響を受けていたと推定できる。ただし試料 3 では C/N が 3.81 と低く、試料 37 では TOC が 1 を越えることから、含まれる有機物にはプランクトンの影響がやや強いと考えられる。

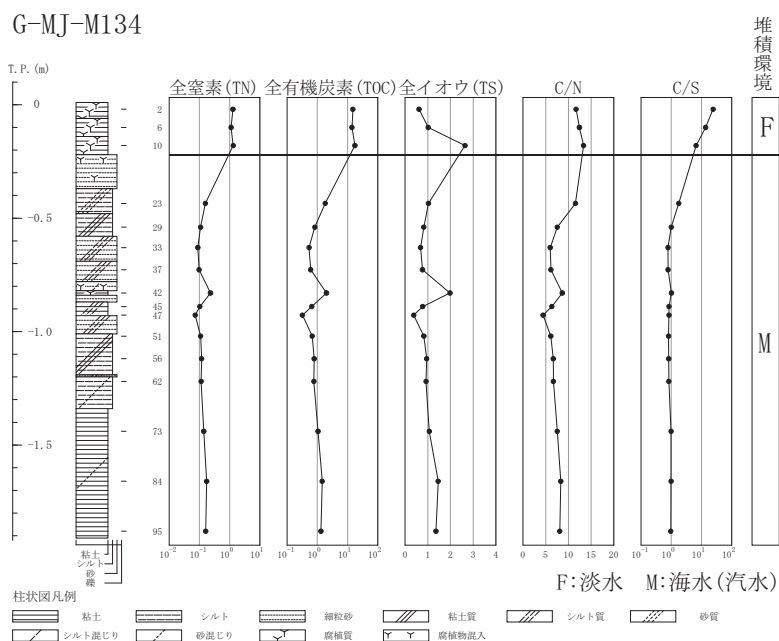


図7 G-MJ-M134 の CNS ダイアグラム

② G-MJ-H180

C/S が 2 未満で、TOC がおよそ 0.5% 以上を示すことから、全ての試料が海水環境下で堆積したものと推定できる。更に TOC は 2% 程度より低く、底質、低層水ともにやや還元的であったことが分かる。また、C/N は 6 ～ 9 程度で、含まれる有機物は陸上植物とプランクトン双方の影響を受けていたと推定できる。ただし中位の試料では TOC が 1% を超え、含まれる有機物にはプランクトンの影響がやや強いと考えられる。

③ G-MJ-M134

上位の 3 試料は C/S が 5 以上を示すほか、TOC も 1% 以上を示すことから、淡水環境下で堆積したものと推定できる。さらに、C/N が 12 ～ 13 と中庸を示すことから、含まれる有機物は陸上植物とプランクトン双方の影響を受けていたと推定できる。

中～下位の試料は C/S が 2 未満で、TOC が 0.2% 以上であることから、海水環境下で堆積したものと推定できる。更に TOC が 2% 程度より低いことから、底質、低層水ともにやや還元的であったことが分かる。また、C/N は 4 ～ 8 程度で、前述のように TOC も低いことから、含まれる有機物にはプランクトンの影響がやや強いと考えられる。ただし、試料 23 では TOC が 1.823%、C/N が 11.55 と高く、また試料 10、42、54、95 でも TOC が 1% を超えることから、含まれる有機物は陸上植物とプランクトン双方の影響を受けていたと推定できる。

5. 花粉分帯と同地域の地域花粉帯との対比

花粉分析結果を基に、花粉分帯を行った。本地域では大西ほか（1990）、大西（1993）によって地域花粉帯（花粉層序）が設定され、更に渡辺（2002）により一部が改訂されている。ここでは、渡辺（2002）によって改訂された花粉層序と今回の花粉帯を対比し、AMS 年代測定値との整合性を検討した。

① III 帯（G-MJ-H180:74-6、G-MJ-T344:63-3）

アカガシ亜属が他の種類に比べ高率で 20-40% の出現率を示し、マツ属（複維管束亜属）、スギ属、コナラ亜属がこれに次ぐ。マツ属（複維管束亜属）は 6-17% の範囲で検出され、10-15% の間を示

す試料が多い。スギ属は6-22%の範囲で検出され、G-MJ-T344地点の試料がG-MJ-H180地点の試料より高率を示す。コナラ亜属は7-19%の範囲で検出され、G-MJ-H180地点の試料がG-MJ-T344地点の試料より高率を示す。また、マキ属が低率であるが、ほぼ連続して検出される。Ⅲ帯は、更に細分できる可能性があるが、両地点間の対比が困難であることから、今回は細分を見合わせる。

アカガシ亜属の卓越傾向とマキ属の連続的な検出は、アカガシ亜属・シイノキ属帯マキ属亜帯の特徴と一致する。また、同花粉亜帯は縄文時代後期の植生を示唆するとされており、Ⅲ帯から得られた $3795 \pm 20\text{yr. BP}$ と 3230 ± 20 の ^{14}C 年代と矛盾しない。

② II帯 (G-MJ-M134:95-23)

マキ属がほとんど検出されなくなる。マツ属(複維管束亜属)が増加傾向を、アカガシ亜属、コナラ亜属が減少傾向を示す。一方スギ属は安定した出現率を示す。更に詳細に検討すると、c-a亜帯に細分できる。

c亜帯：95、84ではマツ属(複維管束亜属)は15%とII帯の中では低く、アカガシ亜属が30%程度とII帯の中では高い。

b亜帯：73-42ではマツ属(複維管束亜属)が増加し、20-32%を示す。一方アカガシ亜属はやや減少し、17-25%を示す。

a亜帯：37-23では草本花粉が増加する。木本花粉では、マツ属(複維管束亜属)が17-25%、コナラ亜属が10-12%とやや減少する。

マツ属(複維管束亜属)、スギ属、コナラ亜属、アカガシ亜属が同程度で出現し、更にマツ属(複維管束亜属)が増加、アカガシ亜属が減少する特徴は、イネ科帯アカガシ亜属・コナラ亜属亜帯の特徴と一致する。また、同花粉亜帯は $1980 \pm 20\text{yr. BP}$ 頃から中世にかけての植生を示唆するとされており、II帯から得られた $1445 \pm 20\text{yr. BP}$ の ^{14}C 年代と矛盾しない。

③ I帯 (G-MJ-M134:10、2)

草本花粉の割合が極めて高くなる。木本花粉では、マツ属(複維管束亜属)が29-37%程度、コナラ亜属が22-26%、アカガシ亜属が8-13%の出現率を示す。

スギ属、アカガシ亜属が減少傾向を、マツ属(複維管束亜属)、コナラ亜属が増加傾向を示す。同様な花粉化石群集の変化は、西川津遺跡V-1～2区(渡辺, 2001)における、9世紀後半から13-14世紀頃にかけての花粉化石群集の変化と類似する。ただし西川津遺跡V-1～2区では、マツ属(複維管束亜属)の出現率が更に高く、コナラ亜属の出現率が低い。I帯から得られた $710 \pm 20\text{yr. BP}$ の ^{14}C 年代は暦年較正值で13世紀後半を示し、大きな矛盾はない。

表2 CNS元素分析結果

Sample	全窒素 (TN) (%)	全有機炭素 (TOC) (%)	全イオウ (TS) (%)	C/N	C/S
G-MJ-T344-3	0.065	0.246	0.642	3.81	0.38
G-MJ-T344-15	0.118	0.959	1.045	8.10	0.92
G-MJ-T344-22	0.130	1.121	1.129	8.62	0.99
G-MJ-T344-27	0.100	0.717	0.988	7.16	0.73
G-MJ-T344-34	0.124	0.949	1.232	7.66	0.77
G-MJ-T344-37	0.126	1.052	1.236	8.35	0.85
G-MJ-T344-41	0.129	1.088	1.190	8.46	0.91
G-MJ-T344-50	0.092	0.632	0.826	6.86	0.77
G-MJ-T344-54	0.111	1.016	0.973	9.18	1.04
G-MJ-T344-59	0.108	0.869	0.889	8.08	0.98
G-MJ-T344-64	0.155	1.708	1.247	11.00	1.37
G-MJ-T344-69	0.127	1.182	0.941	9.31	1.26
G-MJ-H180-6	0.078	0.542	0.283	6.98	1.92
G-MJ-H180-11	0.077	0.493	0.606	6.44	0.81
G-MJ-H180-15	0.078	0.485	0.504	6.24	0.96
G-MJ-H180-19	0.112	0.891	1.073	7.98	0.83
G-MJ-H180-23	0.130	1.170	1.219	9.02	0.96
G-MJ-H180-27	0.146	1.298	1.544	8.91	0.84
G-MJ-H180-32	0.163	1.463	1.690	8.97	0.87
G-MJ-H180-35	0.162	1.408	1.431	8.71	0.98
G-MJ-H180-39	0.210	1.877	1.740	8.92	1.08
G-MJ-H180-44	0.195	1.600	1.734	8.20	0.92
G-MJ-H180-49	0.230	2.029	2.176	8.84	0.93
G-MJ-H180-54	0.155	1.232	1.384	7.93	0.89
G-MJ-H180-59	0.109	0.734	1.081	6.76	0.68
G-MJ-H180-63	0.099	0.715	0.869	7.20	0.82
G-MJ-H180-65	0.110	0.858	1.054	7.79	0.81
G-MJ-H180-68	0.102	0.745	0.983	7.34	0.76
G-MJ-H180-71	0.138	0.988	1.497	7.16	0.66
G-MJ-H180-74	0.096	0.599	0.782	6.25	0.77
G-MJ-M134-2	1.288	15.061	0.618	11.70	24.37
G-MJ-M134-6	1.122	13.943	1.019	12.43	13.69
G-MJ-M134-10	1.313	17.532	2.641	13.35	6.64
G-MJ-M134-23	0.158	1.823	1.030	11.55	1.77
G-MJ-M134-29	0.110	0.828	0.825	7.55	1.00
G-MJ-M134-33	0.089	0.532	0.681	5.99	0.78
G-MJ-M134-37	0.098	0.602	0.767	6.15	0.78
G-MJ-M134-42	0.233	2.018	1.982	8.66	1.02
G-MJ-M134-45	0.103	0.655	0.776	6.34	0.84
G-MJ-M134-47	0.073	0.321	0.381	4.42	0.84
G-MJ-M134-51	0.110	0.674	0.827	6.11	0.82
G-MJ-M134-56	0.118	0.787	0.952	6.65	0.83
G-MJ-M134-62	0.114	0.767	0.924	6.70	0.83
G-MJ-M134-73	0.140	1.054	1.069	7.55	0.99
G-MJ-M134-84	0.174	1.444	1.460	8.32	0.99
G-MJ-M134-95	0.162	1.312	1.360	8.09	0.96

表3 AMS年代測定結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正無年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-19343 (G-MJ-M134-11)	-27.89 $\pm$ 0.20	760 $\pm$ 19	711 $\pm$ 19	710 $\pm$ 20	1274AD (68.2%) 1288AD	1265AD (95.4%) 1296AD
PLD-19344 (G-MJ-M134-79)	-16.78 $\pm$ 0.21	1312 $\pm$ 19	1446 $\pm$ 19	1445 $\pm$ 20	603AD (68.2%) 640AD	578AD (95.4%) 648AD
PLD-19345 (G-MJ-H180-18)	-20.34 $\pm$ 0.19	3153 $\pm$ 22	3229 $\pm$ 21	3230 $\pm$ 20	1519BC (38.4%) 1491BC 1480BC (29.8%) 1456BC	1531BC (95.4%) 1436BC
PLD-19346 (G-MJ-T344-69)	-23.28 $\pm$ 0.16	3766 $\pm$ 22	3794 $\pm$ 21	3795 $\pm$ 20	2284BC (33.6%) 2248BC 2234BC (28.5%) 2199BC 2161BC (6.1%) 2153BC	2291BC (78.4%) 2193BC 2178BC (17.0%) 2143BC

6. 各分析結果と層序断面

図1に、花粉層序を基に作成した断面図を示す。

G-MJ-H180より西側では、縄文時代後期に宍道湖底で堆積した層（Ⅲ帯）が標高0m近くまで堆積している。一方G-MJ-H180より東側では、-2m程度でも飛鳥時代に宍道湖底で堆積した層（Ⅱ層）が認められ、Ⅱ帯堆積時に西部が微高地となっていた事が分かる。

松江平野北東部の原の前遺跡では、古墳時代前期の石組護岸遺構が検出されており、朝酌川の水面が-0.2～-1.0mにあったと推定されている（徳岡ほか，1995）ほか、西川津遺跡では堆積相観察とCNS分析結果から、弥生時代前期から中期頃の朝酌川の水面が-1.15mより下がった可能性が指摘されていた（渡辺，2011）。この事から東部の低地（Ⅱ帯基底部）は、弥生時代前期から中期、あるいはその前後の低水位期（いわゆる「弥生小海退」期）の浸食面である可能性が指摘できる。

7. 古植生について

花粉帯毎に、調査地域周辺の古植生を推定する。

① Ⅲ帯期（縄文時代後期）

木本花粉の割合が高く、草本・藤本花粉、胞子の割合が低い。このような花粉化石群集は、湖沼などの水域か森林内で堆積した場合に得られることが多い。CNS元素分析から、G-MJ-T344地点とG-MJ-H180地点は共に海水環境下にあったことが分かっており、縄文時代後期には宍道湖の一部であったものと考えられる。したがって、得られた花粉化石群集の多くは、近隣の陸域からもたらされたと考えられる。

縄文時代後期の花粉化石群集は松江平野内では得られておらず。最も近いデータとして宍道湖底で得られたSB1（大西ほか，1990）がある。SB1の花粉化石群集と比べた場合、今回はスギ属、アカガシ亜属の出現率が高く、マツ属（複維管束亜属）、クマシデ属-アサダ属、コナラ亜属の出現率が低いことが特徴である。スギ、アカガシ亜属はいずれも極相林を成すが、マツ属（複維管束亜属）、クマシデ属-アサダ属、コナラ亜属は、いずれも「二次林」要素である。調査地西方の亀田山から北東に続く丘陵や、背後の北山山地をカシ林が覆い、これらの谷筋や扇状地端部にはスギ林が発達していたものと考えられる。また宍道湖周辺は、地すべりや土石流が頻繁に起こる環境にあり、コナラ林やアカマツ林などの二次林が発達していたものと考えられる。しかし、松江城下町周辺（松江平野）地域に限っては、極相林が比較的発達していたものと考えられる。

② Ⅱ帯（弥生時代中期から中世初頭ころ）

Ⅱ帯もCNS元素分析から、海水環境下にあったことが分かっており、Ⅱ帯の終わり（中世初頭ころ）

まで宍道湖の一部であったものと考えられる。

b 亜帯までは木本花粉の割合が高く、a 亜帯では草本・藤本花粉、胞子の割合が徐々に高くなっていく。c 亜帯、b 亜帯の時期には安定した水域であったが、a 亜帯の時期には平野が発達（拡大）し、湖岸線が G-MJ-M134 地点近辺に迫ったものと考えられる。

Ⅲ 帯の時期と比べると調査地西方の亀田山から北東に続く丘陵や、背後の北山山地を覆っていたカシ林やスギ林は縮小し、コナラ林やアカマツ林などが拡大したものと考えられる。同様の花粉化石群集は松江平野北東部の西川津遺跡 07 区でも得られており（渡辺, 2011）、やや広範囲に及ぶ現象であった可能性がある。一方、a 亜帯では花粉含有量、特に木本花粉含有量が急激に減少する。堆積環境の変化にも起因する可能性はあるが、森林面積そのものが縮小した可能性もある。古代に入り松江平野内及び周辺の人口が増え、資源としての森林が伐採された可能性も指摘できる。これに対し草本・藤本花粉、胞子の相対量は急激に増えるが、検出量に大きな変化はない。また、草本・藤本花粉と胞子の含有量が上位のⅠ帯で急増し、植物の根による擾乱作用で上位から混入した可能性も指摘できる。淡水水生草本のガマ属は、Ⅰ帯で多産することから、明らかに混入である。

③ Ⅰ帯（中世）

腐植質の粘土であり、沼沢湿地で堆積したものと考えられる。また CNS 元素分析から、淡水環境下で堆積したことが明らかである。一方、イネを含む可能性が高いイネ科（40 ミクロン以上）花粉が高率で検出され、水田環境下にあった可能性が指摘できる。しかし、これを上回ってイネ科（40 ミクロン未満）、カヤツリグサ科が検出されるほか、ガマ属やセリ科などの湿性植物も多量に検出されることから水田であったとは考えにくい。湿地内ではガマ類やアシ類、カヤツリグサ類、セリ類などが生い茂っており、湿地周辺では水田耕作が行われていたと考えられる。

木本花粉ではスギ属、アカガシ亜属が減少し、マツ属（複維管束亜属）、コナラ亜属が増加することから、Ⅱ帯で縮小した森林が、アカマツ林、コナラ林として拡大を始めた可能性が指摘できる。前述のように今回の花粉化石群集は、西川津遺跡での花粉化石群集に比べマツ属（複維管束亜属）の割合が低く、コナラ亜属の割合が高い。このことから松江平野中央部では北東部に比べ、コナラ林がやや優勢であったと考えられる。

8. まとめ

松江平野中央部での簡易ジオスライサーによる試料採取、花粉分析、CNS 元素分析及び AMS 年代測定の結果、縄文時代後期から中世における古地形及び堆積環境の一端が明らかになった。更に宍道湖湖底や松江平野北東部での既知の花化石群種（花粉分析結果）との比較から、松江平野中央部の古植生の特徴（他地域との違い）が明らかになった。縄文時代後期の松江平野中央部では、宍道湖周辺地域全体に比べカシ林やスギ林などの極相林の分布域が広く、アカマツ林やコナラ林などの二次林の分布域が狭かった。中世では、松江平野北東部に比べアカマツ林の分布域が狭く、コナラ林の分布域が広がった。またⅡ帯 a 亜帯の時期（古代）には、それまでの時期に比べ森林面積が減少した可能性が指摘できる。

9. 謝 辞

本研究を進めるに際し、下記の方々に御協力・援助をいただいた。松江市教育委員会史料編纂室山根正明氏、同編纂室諸氏には、本研究を始めるきっかけをいただいたほか、公表の場を提供いただいた。財団法人松江市教育文化振興事業柚原恒平氏、小山泰生氏、園山 薫氏には、簡易ジオスライサーによる試料採取のために、多くの便宜を図っていただいた。また、松江市教育委員会文化財課調査係諸

氏には無形の援助をいただいている。更に文化財調査コンサルタント株式会社金津まり子氏には、試料観察から分析処理、データ整理に至るまでの補助をしていただいた。本研究をまとめるに当たり、これらの方々に深く感謝の意を示し、御礼申し上げます。

10. 引用文献

- 大西郁夫・干場英樹・中谷紀子（1990）宍道湖湖底下完新統の花粉群．島根大学地質学研究報告，9，117-127，
- 大西郁夫（1993）中海・宍道湖周辺地域における過去2000年間の花粉分帯と植物変化．地質学論集，39，33-39．
- 高安克己（2004）地質コア分析結果と周辺の環境変遷に関する考察．出雲大社境内遺跡，359-378．大社町教育委員会，島根県．
- デジタル大辞泉（HP）<http://kotobank.jp/word/%E6%9D%BE%E6%B1%9F%E5%B9%B3%E9%87%8E>．
- 徳岡隆夫・大西郁夫・中村唯史・高安克己（1995）原の前遺跡と周辺の古環境．朝酌川中小河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 原の前遺跡，181-195．
- 中村 純（1974）イネ科花粉について，とくにイネを中心として．第四紀研究，13，187-197．
- 林 正久（1991）松江周辺の沖積平野の地形発達．地理科学，46(2)，55-74．
- 水野篤行・大嶋和雄・中尾征三・野口寧世・正岡栄治（1972）中海・宍道湖の形成過程とその問題点．地質学論集，7，113-124．
- 渡辺正巳（2001）西川津遺跡における花粉組成変遷と周辺地域の環境変遷．朝酌川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第13冊 西川津遺跡Ⅷ，25-46，島根県土木部河川課・島根県教育委員会．
- 渡辺正巳（2002），山陰地域中央部における縄文時代の花粉組成変遷-Cyclobalanopsis-Castanopsis帯の再設定と気候変化，野尻湖花粉層序との比較-．野尻湖ナウマンゾウ博物館研究報告，10，17-28，長野．
- 渡辺正巳（2010）花粉分析法．考古調査ハンドブック 2 必携考古資料の自然科学調査法，174-177．ニュー・サイエンス社．
- 渡辺正巳（2011）松江市西川津遺跡平成19、20年度調査における自然科学分析．主要地方道松江島根線改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1 菟捨古墳・西川津遺跡，226-248，島根県教育委員会．
- 渡辺正巳・瀬戸浩二（2011）中世松江平野の古環境．松江市文化財調査報告書 第139集 松江城下町遺跡（殿町287番地）・（殿町279番地外）発掘調査報告書-松江歴史館整備事業に伴う発掘調査報告書-自然科学分析・写真図版編，松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団，30-36，島根

『(竹内右兵衛書つけ)』

和田 嘉 宥

『(竹内右兵衛書つけ)』は、縦七・三cm、横一五・六cmで、紙数は一一四枚、表紙と裏表紙は紺色のやや厚紙で、右綴にした和本である。本書は、これまでに『竹内右兵衛書つけ』又『竹内右兵衛書付』と称されていたが、表紙に書名は記されておらず（また、表紙の一部が欠損しているため）、書名ははっきりしない。奥書に、「**者ゝかりなから／書徒希於き候／此書物**（以下略）」とあるところから、本稿では書名を『(竹内右兵衛書つけ)』とした。

『(竹内右兵衛書つけ)』は、松江藩御大工の家柄であった竹内家に伝わる武家住宅を主とする木割に関する秘伝書で、奥書により、竹内右兵衛が子孫のために書きとめた家伝書であることが推察でき、昭和の松江城修理工事竣工を期に、竹内家より松江市に寄贈され、昭和二八年に松江市の指定文化財になったものである。

本書については、既に一部が「松江城の城郭について」（島田成矩著『島根県文化財調査報告書 第十集』昭和五十年三月、島根県教育委員会編）の中で『竹内右兵衛書付』と題して翻刻されているが、翻刻は松江城に関する記述部分に限られ、翻刻内容にも一部不備が認められ、『松江市史』『別編 松江城』を担当する松江城部会では、この史料を改めて翻刻し、その内容を明らかにすることになった。

なお、翻刻にあたっては次の凡例にしたがった。

一、底本の体裁にできる限り忠実であることにとめたが、印刷の都合上、改行したり、図の位置と大きさ、文字の位置と大小など多少違

えている場合がある。

二、漢字は新字体を用いた。

三、原文の明らかな間違いは、そのままとして、線を付し、三段目に正しい文を記載した。

四、欠落した文字は筆者の判断で文中の（ ）内に記した。

五、原文の朱書きは、本翻刻でも朱書きとした。原文の朱書きは主文に対する添え書きであり、主文が書かれた後に添え書きされたものであるが、その時代は、主文が書かれた時期とさほど隔たりはないと思われる。このことについては、後述の《解題》でも記しておく。

また、この史料の理解のために、注記を付し、また、「松江城郭図」を作成し付した。

一、本文の語句で注解が必要と見なす語句等については※印を付し、三段目に注記として記載した。

二、「御本丸中」以下「松江城城郭之部」の各項目の末尾に（本一）をはじめ付番を付したが、これは、『松江城縄張図』をベースに作成した付図「松江城城郭図」（P^[58]）に付した番号と合致する。

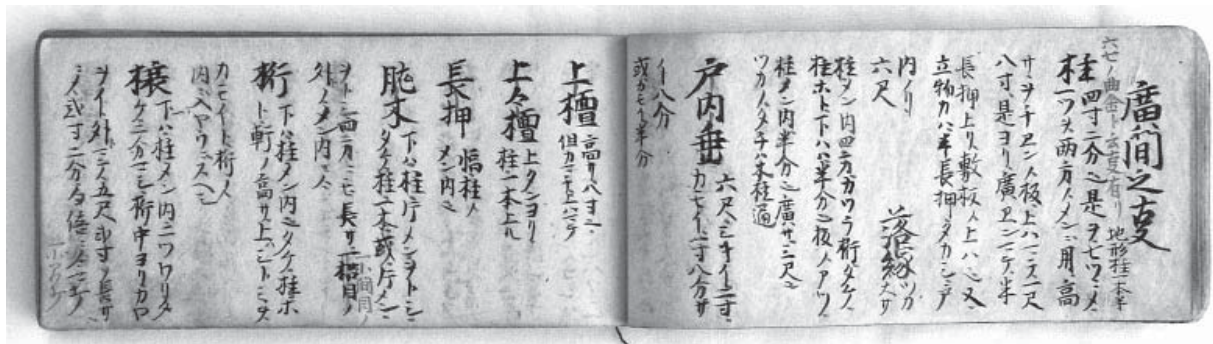
なお、本翻刻であるが、原書の解説及び翻刻の編集作業にあたっては松江城部会長山根正明氏はじめ、松江市教育委員会文化財課史料編纂室および松江歴史館の諸氏に多大なご指導、ご鞭撻をいただいた。ここに記して謝辞としたい。



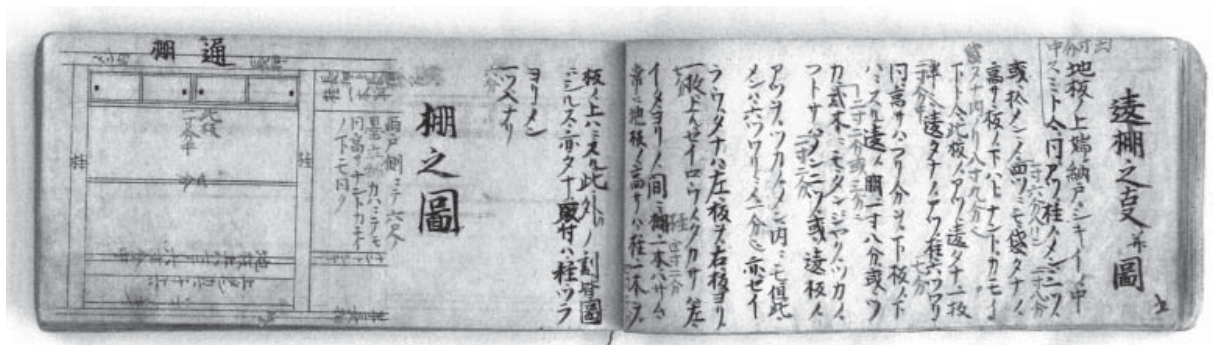
表 紙



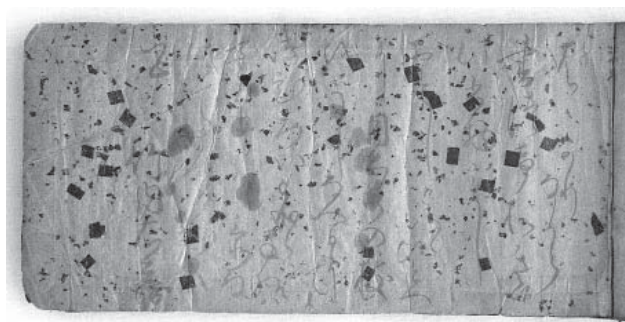
箱



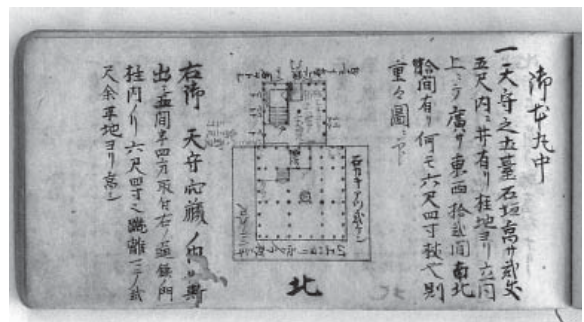
広間之事



遠棚之事



奥 書



御本丸中

『竹内右兵衛書つけ』原本

『(竹内右兵衛書つけ)』※

《本文》

永正拾七年

大永七年

享禄四年

天文貳拾三年

弘治三年

永禄十一年

元龜三年

天正拾九年

文禄四年

慶長拾九年

元和九年

寛永元甲子

同 貳乙丑

同 三丙寅

同 四丁卯

同 五戊辰

同 六巳己

同 七庚午

同 八辛米

同 九癸壬申

同 十年癸酉

同 十一年甲戌

同 一二乙亥

同 十三丙子

※ 従是信州松本御在城

《箱書》
(蓋表)

文化財保護審議会

委員長 高橋 誠一郎 書

(蓋裏)

昭和廿五年度から施行された天
守の修理に際し十代竹内平太郎未亡
人はこれを松江市に寄贈された二よつて
その御厚意に対してこれを永久に保
存するため天守の古材をもつて箱を
作り納免て不朽の至宝とする

昭和三十年四月一日

松江市長 熊野 英書

(史料名)

本史料は『竹内右兵衛書つけ』として、
昭和二十八年八月三十一日に松江市の
文化財に指定されているが、表紙はな
く、史料名は付されていない。奥付に
「(前略)此書徒希は(中略)竹内右兵衛」
とあり、これが史料名になり、「竹内右
兵衛書付」とも称されている。本稿で
は史料名が明確でないことから、『(竹
内右兵衛書つけ)』とする。

《箱書》

《本文》

永禄十一年↓永禄十二年

同(寛永)六巳己↓己巳

同(寛永)八辛米↓辛未(米↓未/以
下同じ)

「従是信州松本御在城」は「寛永十年」
の誤りか。

同十四丁丑
同十五戊寅 御入国
寛永十六巳卯 閏十一月
同 十七庚辰
同 十八辛巳
同 十九癸午
同 二十壬米 閏九月
正保 元甲申
同 二乙酉 閏五月
同 三丙戌
同 四丁亥
慶安 元戊子 閏正月
同 二己丑
同 三庚寅 閏十月
同 四辛卯
承応 元壬辰
同 二癸巳 閏六月
同 三甲午
明暦 元乙米
同 二丙申 閏四月
同 三丁酉
万治 元戊戌 閏十二月
同 二己亥
同 三庚子
寛文 元辛丑 閏八月

同 二壬寅
同 三癸卯
同 四甲辰 閏五月
同 五乙巳
同 六丙午
同 七丁米 閏二月
同 八戊申
同 九巳酉 閏十月
同 十庚戌
同 十一辛亥
同 十二壬子 閏六月
延宝 元癸丑
同 二甲寅
同 三乙卯 閏四月
延宝 四丙辰
同 五丁巳 閏十二月
同 六戊卯午 六月十五ホロ町出火田マチ奥谷マテ
同 七巳米 萩田配所十一月出来唐門
同 八庚申 閏八月 平田御茶や七月ヨリ十一月迄
天和 元辛酉
同 二壬戌 樂山六月より十月迄
同 三癸亥 閏五月 月照寺御堂上ル
貞享 元甲子 十月ヨリ大橋ニ取付
同 二乙丑 大橋掛ル
同 三丙寅 閏三月 天神橋三月より五月マテ四月廿

同(寛永) 十六巳卯↓己卯
同(寛永) 十八辛巳↓辛巳
同(寛永) 十九癸午↓壬午
同(寛永) 二十壬米↓癸未
同(慶安) 二己丑↓己丑
同(承応) 二癸巳↓癸巳
明暦元乙米↓乙未
同(寛文) 七丁米↓丁未
同(寛文) 九巳酉↓己酉
同(延宝) 七巳米↓己未
萩田配所十一月出来 〓 御作事所御役人帳 〓(以下『役人帳』「萩田屋鋪出来」平田御茶や 〓『役人帳』「平田御茶屋出来」
樂山 〓『役人帳』「御立山御茶屋出来」
月照寺御堂上ル 〓『役人帳』「月照寺大繕」
大橋掛ル 〓『役人帳』「大橋掛直シ」

同	四丁卯	佐田本社八月十八日棟槌十九丑刻遷宮	同	七丑
同	元禄元戊辰	佐田ワキミヤ無残出来八月七日セシクウ	同	八寅
同	二巳己	閏正月 土橋十月ヨリ極月マテ	正徳	元卯
同	三庚午	新御寝間二月より五月マテ	同	二辰
同	四辛米	閏八月 六月七日洪水	同	三己
同	五壬申	ヲク御普請三百坪余八月より十一月マテ	地形之事	
同	六癸酉	東底西高	青龍ノ地	木姓ノヤシキ
同	七甲戌	木姓ノ人貧	火姓ノ人富	
同	八亥	土姓ノ人病	金姓ノ人災	
同	九子	水姓ノ人大吉		
同	十丑	南低北高	赤龍ノ地	火姓ノヤシキ
同	十一寅	木姓ノ人昌	火姓ノ人貧	
同	十二卯	土姓ノ人富	金姓ノ人亡	
同	十三辰	水姓ノ人患		
同	十四巳	西低東高	白龍ノ地	金姓ノヤシキ
同	十五午	木姓ノ人滅	火姓ノ人患	
(同十六癸未)		土姓ノ人栄	金姓ノ人貧	
宝永	元申米	水姓ノ人富		
同	二申	北低南高	黒龍ノ地	水姓ノヤシキ
同	三酉	木姓ノ人楽	火姓ノ人没	
同	四戌	土姓ノ人患	金姓ノ人昌	
同	五亥	水姓ノ人貧		
同	六子	中低方高	黄龍ノ地ト云	土姓ノヤシキ

七日米刻↓未刻
佐田本社Ⅱ『役人帳』「佐田社御建立八月十八日上棟 十九日遷宮」
佐田ワキミヤ無残出来Ⅱ『役人帳』「佐田社不残出来」
(元禄)二巳己↓辛未
新御寝間二月より五月マデⅡ『役人帳』
「三丸新寝間出来」
同四辛米↓辛未
ヲク御普請Ⅱ『役人帳』「奥御姫様御殿 共三百坪余出来」
宝永元申米↓甲申
同(宝永)二申↓酉
同三酉↓戌
同四戌↓亥
同五亥↓子
同六子↓丑
同七丑↓寅
同八寅(卯)Ⅱ正徳元卯
同(正徳)三己↓巳

木〃ノ人半 火〃ノ人樂

土〃ノ人貧 金〃ノ人吉

水〃ノ人病

方低中高 四龍ノ地ト云 無主ノヤシキ

五姓共深可凶也

左青龍 東有流水ヲ云 無ハ柳九本ヲ植

右白虎 西有大道云無ハ 梅八本ヲウユル

前朱雀 南有澤島云無 桐七本ヲウユル

後玄武 北有高山云無 槐六本ヲウユルエンシユ

右四神相応ノ地ト云

北方不足貧窮ノ相

前広後狭困窮ノ相

ヨシ前狭後広富貴ノ相

東方半月不吉ノ相

南方半月半凶ノ相

ヨシ西方半月吉祥ノ相

ヨシ北方半月富貴ノ相

左長右短貧窮ノ相

ヨシ右長左短歡喜ノ相

ヨシ五形判形大吉ノ相

無作無形滅亡ノ相

二十二相之事

ヨシ四角団形如意之相

ヨシ八角団形富貴之相

東西増長貧窮之相

ヨシ南北増長豊饒ノ相

ヨシ東南不足吉祥ノ相

西南不足憂患ノ相

ヨシ東北不足消災ノ相

西北不足貧窮ノ相

ヨシ東方不足如意ノ相

ヨシ南方不足息災ノ相

西方不足口舌ノ相

五姓之人家造ノ事

木姓之人

子年没身 丑ノ登位

寅ノ半吉 卯ノ富貴

辰ノ不吉 巳ノ逢危

午ノ大吉 未ノ豊饒

申ノ得禍 酉ノ出世

戌ノ富貴 亥ノ繁昌

火姓之人

子ノ出世 丑ノ福来

寅ノ繁昌 卯ノ没身

辰ノ登位 巳ノ半吉

米ノ豊饒↓未ノ豊饒

午と富貴 米と不吉

申と逢厄 酉と大吉

戌と豊饒 亥と得災凶

土姓之人

子と富貴 丑と不吉

寅年逢厄 卯と大吉

辰と豊饒 巳と得災

午と出世 米と福来

申と繁昌 酉と没身

戌と登位 亥と半吉

金姓之人

子と大吉 丑と豊饒

寅と得災 卯と出世

辰と福来 巳と繁昌

午と没身 米と登位

申と半吉 酉と福来

戌と不吉 亥と逢厄

門尺之事

一吉 二離 三宝 四病

五保 六害 七絶 八義

一財 二病 三離 四義

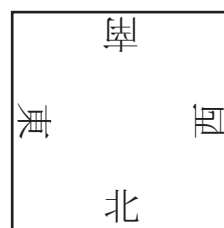
五官 六害 七宝 八吉

右門明ニ祭事有リ

※

母 丑 辰

日 午 未



辰 卯 寅

丑 子 亥

龍臥之事

春 頭西三 腹南一 足東四 背北二

夏 頭東三 腹北一 足西四 背南二

秋 頭南三 腹東一 足北四 背西二

冬 頭北三 腹西一 足南四 背東二



米と不吉↓未と不吉
米と福来↓未と福来
米と登位↓未と登位
方位（東西南北）、図は省略
原本は左の通り

武家之部

一 棟門之事 柱中ノ墨一丈ニシテ

柱ハ丸 間ニテ、一寸一分、算、高サハ、唐居敷ノ上ハヨリ、冠木ノ、下ハマテ、房立内ノリヲ、立ル、或ハ、寸カンエニシテ、七寸内ノリニモ

冠木 厚五分、算、下ハ、柱ニ、式分、増シ或ハ、アツ

五分半ニ、下ハ柱ヲ、裏ノ目返シ、長ハ、ハフ外トヨリ、トハ柱外トハフ内ト也

ハツ中、一ツ入テ、切ナリ、常ハ、ハフ、内ツラナリ

大梁 下ハ四分算、タケ、五分、或下ハ、柱三分一、

タケ五分半

小梁 下ハ四分、タケ五分、同長サハ、カフキ、ツラヨリ、木負、外ト面ラマテ、三ツニワリ、一分也、或下ハ、柱三分一、タケ五分半ニモ

桁 下端四分、タケ六分、大梁ト、カミ合也、居所ハ、扉

ヲ披テ、木負ノ内面ラニ、柱ノ、曲金、八厘、明テ、木負

ヲ、置、此ノ、外トツラヨリ、カフキ、面ラマテ、三ツニ、割、

二ツ目、桁中ニ、用、或下ハ三分半、算カニシテ、木負、

内ノツラヨリ、柱中マテ、三ツ半ニ、割、木負ノ、内ヨリ、

一ツ入テ、桁中也

タ椽 下ハ、式分、タケ、式分マシ、間内、式拾四(枝)宛

軒キニ、六枝宛、勾倍、六寸五分、或、六寸三分ニモ、小

檐、勾倍、破風ニ随フ、或六ツレト、云事有リ、六ツ連トハ、

キヲイ、カヤヲイ、桁、下、皆、同、高サ也、全シ、少、ハ

ヤキカ、ヨシト云

木負 下ハ三分、タケ四分、或、タルキ、下ハト、タケトヲ、

合ル也、居所、前ニ、ク委、有リ

萱負 下ハ三分、タケ四分、或、タル木、タケ式本ニモ、

居所ハ、木ヲイ、内ツラ、三間割、一分ヲ、木ヲイ、内ツ

ラヨリ、カヤヲイ内ツラマテ也、或、桁中ヨリ、柱中マテヲ、

桁中ヨリ、ウラカハ、外ト、マテニモ

破風 コシ六分半ニ、シテ上ニ、式分半マシ有、勾倍ハ、

タルキニ随、

裏行 式分、出ハ、四分、ハフノホリニ、増有、

雲板 厚三分、長小梁、ト同長ケヨシ

大計 八分、四方ニシテ、タケ、ツ子ノワリ、

唐石敷 厚、四分、長、柱、三本、幅、内ハ、方立ヨリ

メン一ツ余ル、ル、或、タルキ下ハ、二ツトモ、外ト、ハ、

柱ヨリ、メン一ツ、アマルナリ

方立 アツ、式分、幅、五分、柱中、納ルナリ

蹴離 タケ、六分、ハ、四分

間房 三分、四方、或、式分半、四方、

闔 房立、式分宛カケテ、間内ヲ、式拾四、刻、一分、カマチ

ノフトサ也、アツハ、幅ニテ、八分也、或、目返ニモ、横、同大

サニシテ、六本、内、クハン貫サンハ、サン、一本半也、板カス、

五枚宛也、クハンヌキ、カマチ、厚、四方

鉄物 宗、三拾六、内、八サウ、有所、一所一枚ツ、引、

但、ハサウ、長、戸ハ、三ケ一、ハ、カマチ、ホト也、

先ハ、目返ニ、広シ、

裏板有リ 高位ナレハ、立板也、無位ハ、横板ニ、スヘイ

棟門 匠明 宮門跡、御所 方、武

家方、寺方ニ用。」

間ニテ一寸一分カ 柱の太さが柱間の

11/100。

唐居敷 門の下に敷き、門扉の軸と

する石または厚板。

房立 方立(ほうだて)のこと。

冠木 門柱の上部を貫く横木。

裏ノ目返シ 矩尺の「裏矩」。

ハフ 破風

大梁 男梁(おぼり)のこと。

小梁 女梁(めばり)のこと。

椽 垂木のこと。

間内 柱と柱の間。

勾倍 勾配(以下同じ)

小檐 飛檐垂木(のある軒)のこと。

六ツレ 六連れ。茅負・木負・丸桁の

各下端が同一平面上にあること。

萱負 茅負(かやおい)

裏行 裏甲(うらこう)

雲板 板臺股(いたかえるまた)

大計 大斗(だいと)。斗の一。

唐石敷 「唐居敷」のこと。

方立(ほうだて) 門扉の両側に付く

厚い堅板。ほこたち。ほどだて。

築地形有 カフキ下ヨリ、八分、エフリ板入、四分ノ、カ
此高サカフキ下ヲ三分ニトモ
イ桁、又、入ル、残分、ツイチノ、高也、ツイチ、広サハ、
※カライシキ、長ト、同、上ニテ、七分、スハル、或、八分ニ
モ、スル、カイ桁、長、ツイチ、カマチヨリ、柱一本、出ル、
カマチ、厚、二分、幅、五分、或、四分ニモ

※唐棟門之事

柱 寸、算、丸也、立ノホセ、上ニ、備、有、高サ、房立、
内ノリヲ、カフキ、下ハニ、当ル柱、根、クヒリ、一分也
冠 木 下ハ、四分、タケ、六分、鼻、一本ニシテ、キサム
大 梁 下ハ、三分、タケ、五分、長サ、棟門ニ、同ク
小 梁 下ハ、タケ、前ニ、同ク、長サ、棟門トニ、同ク
桁 下ハ四分、タケ五分、有所、棟門ニ、同ク
※踏 居 高サ五分ニシテ、上ノクリ、二分、下三分、広サ、
柱ヨリ、メン一ツツ、出、上ノクリ、柱ノクヒリニ、合、
下ノクリ二分半

蹴 離、間、房、右、棟、門ニ、同ク

大 計 ハ、八分、タケ、此、六分、又、唐ヤウニ、シテハ、
五分ハリシカ

※肱 木 下ハ、大計、三ケ一、タケ、三分マシ、長、マ
キトニテ、ハカル

三 計 長、柱中スミ、拾八ニ、ワリ用ユ、高サ、此、六分
半也

木 負、萱 負、椽、闔、等、右、棟、門ニ、同、事ナリ

築地形、有リ、同断

※四足門之事

柱 寸、カソエ、丸、或一寸一分ニモ、高サ、房立内ノリ
ヲ、唐石、布敷、下ヨリ、冠 木下ニ、当ル、或、七寸五分、
内ノリニモ、但、ケハナシ、ヨリ、カフキ下、マテ也

※釣 柱 八分トリ、ト闔、披テ外トノ、メン内ニ、相、拾メン、
或、七ツ割ニシテ、両方ニ用

柱 税 ヌキ 下ハ、四分、或、柱三分一ニモ、タケ、六分、或、
七分ニモ カフキトカミ合半分ウク

小 梁 下ハ、右三同、タケ、五分、或、五分半、長、柱ツラ、
フリ分ニシテ、下ニ、ナテ、上ケ、有 カフキトカミ合半分シツム

※税 下ハ、三分、タケ、五分、但、長、押、下エ、三分四方、
見ル、此、小根ニ、マクラ、サハキ、モタスル

冠 木 アツ、五分、或六分、下ハ、柱、ヨリ、メン、一ツ宛、
出ル、或、柱、目返ニモ、長、ハフ、内ツラ、或、五枝目ノ、
内ツラヲキル

内ツラヲキル

大 計 九分、タケ、下ハ、一、タケナカラ、ヨシ

※肱 木 大計、三分一、タケ、二分増

三 計 長、カタルキ歩、タケ、ヒシキホト

※実 肱 木 大計、三分一、四方也

※欄 下ハ五分、上ニテ、六分、タケ、八分ニシテ、反リ、有、
或、七分ニ、九分ニモ

桁 下ハ五分、タケ七分、

蹴離ニけはなし。蹴放し。門のしきみの一。溝の敷居で地覆の一種。

間房ニ楣（まぐさ）

闔ニ扉（とびら）

櫓ニ棧（さん）

クハン貫ニ門（かんぬき）のこと。

宗ニ惣、総数のこと

八サウニ八双金具

カマチニ框

（以上前頁）

エフリ板ニ柄振板

カライシキニ唐居敷

唐棟門ニ『匠明』「門跡方、禅方ニ可レ

用。」

キサムニ絵様を付ける。

踏居ニくつゝ、杳石のこと。

大計ニ大斗（だいと）

肱木ニ肘木（ひじき）

三計ニ三斗（みつと）

四足門ニ『匠明』「高官ノ門也。又ハ武

家ニモ用。是ヲ俗ハ棟門ト云ハ非説

也。」

釣柱ニツリバシラ、「袖柱」のこと柱。

柱税ニハシラヌキ、腰貫のこと。

税ニ貫（ぬき）

負[※]形 ツ子ノ通、上^ニ備^エ有

棟[†]桁[†] 下ハニ五分、タケ、八分、

タ[※]椽 ツ子ノトホリ、間内ニ、廿四、軒ニ、破風共ニ、七枝ツ、

長、ソハ、ノキヲ、マハス、或、是ヲ、柱、八ツ中、ホトシメル、

勾倍、大檐、六寸、或、六寸五分、小ノキ、四寸三分、カヤ

ワイノ、出、桁、ツラヨリ、カヤワイ、マテ、五間、ワリ、

木ワイ、三間、カヤワイ、二間

木[†]負 萱[†]負 裏[†]行 常[†]之[†]通

破[†]風 コシ、六分、或、長サニテ、七分半、上^ニ、三分マシ

葺[†]地 厚、八分、ハフ、ノホリハ、式フ、マシ、有リ

鬼[†]板 掛[†]魚共ニ常[†]之[†]通

房[†]立 アツ、式分、ハ、五分

蹴[†]離 タケ六分、上ハ四分、

間[†]房 式分半、四方ナリ

沓[†]居 前ノトホリ

唐[†]石 敷 前ノトホリ

長[†]押 タケ六分、ム子、式分、有所、カライシキ、ヨリ、カフキ、

下マテ、フリ分、長押、上ハニ用ユ、但、扉、クハンヌキ、ナ

ケシ下へ、入、ヤウニモ、スヘシ、門、大小ニ、ヨツテ、心エ有リ、

或、フリ分ヨリ、下ニ、クハンヌキヲ、打、此、上ニ、長押、ヲ

打トモ云リ、水タレ、一分ニ、シテ有リ

闔[†] 棟カトニ同事

同鉄物同事

楣[†]ヲ方立ニ式分掛テ其間拾四刻ニシテ 楣ノハ、ニシテ

此外棟門ニ同事 但板六枚

築[†]地[†]形有 ム子門ニ同事

唐四足之事

柱 寸[†]カソエニシテ、丸也、棟マテ立ノホセニシテ、上ノ、

ソナエノ、ヒシキ、海老ニシテ、ノキノ、桁ト、カミ合

唐[†]石 敷有 ム子カトニ、同事

沓[†]居 有 ム子カトニ、同事

釣[†]柱有 四[†]足[†]ニ 同

柱[†]税 下ハ、四分、或、三分半、ニシテ、柱ニ、ツラヌキ、

トヲス、是、則、大梁也

小[†]梁 下ハ、柱ヌキニ、同タケ五分、長、柱内ノリヲ、

フリワクル

冠[†]木 下ハ、五分、或、四分、タケ、六分、ニシテ、柱ヲ、

ツラヌク

大[†]計 長九分、高サ、カラヤウ

梓[†]肱[†]木 実[†]肱[†]木 常[†]之[†]通

三[†]ツ[†]計 長、タルキ、アヨヒ タカサ、ヒシキ、ホト

桁 四ツアシニ同事也

棟[†]ノ備[†] 棟[†]ノ中備有リ 大[†]檐[†] 椽[†]キ、木[†]負 小[†]檐[†] 萱[†]

負 破[†]風 裏[†]行 葺[†]地 鬼[†]板 掛[†]魚 等 四[†]ツ

足[†]ニ同事 蹴[†]離 房[†]立 間[†]房 長[†]押 楣[†]

同鉄[†]具等同前

肱木[†] 肘木

三ツ計[†] 三斗

実[†]肱木[†] 実[†]肘木 (さねひじき)

櫺[†] 二うつはり、小屋組を受ける横木 (梁)

或は、梁破風。

(以上前頁)

負形[†] 笱形 (おいがた) のこと。

棟[†]桁[†] 棟木のこと。

椽[†] 垂木 (たるき)

大檐 (おおのき) 地垂木のこと。

小ノキ[†] 飛檐垂木のこと。

木ワイ[†] 木負 (きおい)

カヤワイ[†] 茅負 (かやおい)

式フ[†] 二分 (にぶ)

掛[†]魚[†] 懸魚

カライシキ[†] 唐居敷

カフキ[†] 冠木 (かぶき)

クハンヌキ[†] 門 (かんぬき)

水タレ[†] 水垂れ勾配

棟カト[†] 棟門 (むなもん) のこと。

唐四足[†] 『匠明』「門跡方。又ハ禪家ノ

方丈ノ前ニ有門也。」

ヒシキ[†] 肘木 (ひじき)

海老[†] 海老虹梁

ノキ[†] 軒

※唐門之事

柱 寸^レカソエ、丸也、高サ、方立、内ノリヲ、カライシキ、ヨリ、カフキ上ハ、マテニ当ル

唐石敷 有リ

小梁 下ハ、三分、或、三分半、ニモ、タケ、五分、長サ、カフキ、ツラヨリ、大梁、鼻、マテフリ分

冠木 アツ、五分、或、五分半、ニモ^{下ハ}床柱、ヨリ、メンホト、宛、出ル、或、柱、目返ニモ、同長サ、間内、四間切、一分宛、イスル

大梁 下ハ、三分半、タケ、五分半、長サ、闔ヲ、披テ、

桁ノ内、ツラ、メンホト、明^クヤウニスヘシ

桁 下ハ、三分半、タケ、五分半、タケ、或、ハフニ、随トモ云リ、是、則、カヤライニ用ル

負形有リ 長サ、桁之、^ノ外、三間、ワリニシテ、アツ三分トリ

舁[※]形 長サ、六分半、トリ、タケ、此、五分、

肱木 タケ、下ハ、共^ニ計、三分一

棟桁 同前

檼 下ハ、式分、タケ、式分マシ、間内、八間ワリ、長サ、桁ヨリ、桁マテ、切込

唐破風 コシ、五分、或、片枝ニテ、八分トリ、輪ノ高サ、三枚半、或、間内四分一、[※]イハラ、ヒレハ、桁、六間ニ、ワリ、

アト、先、二ケン、ステ、中、四ケンヲ、亦、五ケンニシテ、中、三ツ、ワキ、二ケン也

裏行 アツ、タルキ、タケ、目返シ、半分、出ハ、目返ホト也

葺地 四分半、或五分

鬼板[※] 鴉毛鳥 常之通

蹴離房立間房 同前

唐[※]ト楣^ラ カマチ、フトサ、方立ニ、式分宛、カケテ、廿四ワリ、或、三分、カソエ、アツ、ハ、ニテ、八分、サン、

大サ同ク、カス、[※]七本、但、楣、長、五ツワリニシテ、



花ノマ、二ケン、下、三ケン、也、サンノ間、一本ツ、[※]キテウメン、六ツワリニシテ両方ニ用

栢[※]イ有モ、アリ ハ、タルキ、メン内、タケ、タルキノ、タケ、半分、歩ミ九本カ、拾一本、

築地形 有リ同然

向唐門之事

柱 寸^レカソエ、或、一寸^レ一分ニモ、丸也、高サ、柱ヌキ、下ハヨリ、ケハナシ、上ハマテ、七寸也

※戸^ラ破^テ柱^ノ内^ニ入^ル 釣柱 八分或七分ノ也

※沓居 大小共ニ常ノ通

柱[※]税 上^ミハ、下ハ、三分半ニ、七分、下^モハ、下ハ、三分、タケ、六分、ナリ

ム子カト^ニ棟門

大計^ニ、大斗^ノ（だいと）

肱木^ニ肘木^ノ（ひじき）

三ツ計^ニ三斗^ノ（みつと）

大檐檼（おおのきたるき）^ニ地垂木^ノのこと。

（以上前頁）

唐門^ニ『匠明』「高官之門也。又禪家ニ可レ用。」

メンホト^ニ面程（めんほど）

舁形^ニ斗形（ますがた）

唐破風^ニ破風板^ノの中央部が起り、左右

両端が反っている破風。

イハラヒレ^ニ茨鱗^ノ唐破風の反曲点に

付ける小突起。

鴉毛鳥^ニ兔毛通（うのけどおし）。唐破

風の頭部に取付けられる懸魚。

唐楣^ニ唐扉

カス^ニ数

花ノマ^ニ扉上部の透しの花模様を付けた部分。

キテウメン^ニ几帳面（きちょうめん）

栢^ニ木舞（屋根木舞か？）

向唐門^ニ『匠明』門跡。又ハ禪家ノ方丈ノ前ニ有門也。但武家ニモ可レ用。

台輪 アツ、三分 ハ、八分也

大計 長、八分、タカサ、此、六分、或、長、八分、ヲ、

五ツ半ニ、ワリテ、此、三ツ半ヲ、高ニ、用、戸尻モ、三ツ半也、是ヲ、五ツニ、ワル

梓肘木 下ハ、大計、三分一、タケ、三分マシ

三ツ計 長サ、大計、戸尻、ホト、高サ、戸返、並ハ、

大計、外ト、マキト、内ト全、

実肱木 大計三分一四方ナリ

櫪 下ハ五分、タケ八分、

桁 下ハ四分、タケ五分、

大平桷 八分トリ

棟桁 同前

椽 下ハ、式分、タケ、二分マシ、或、下ハ、柱、六ツワ

リニシテ、タケ、二分マシ、カス、四ケンキリニシテ、ハ

フ共、九枝、ノキノ、長サ、同ク、但、桁中ヨリ、カヤヲイ

外ツラマテ

栢 ハ、タル木、メン内ニシテ、タケ、タルキノ、半分、

間ハ、タルキノ、間、二間ニシテ

唐破風 コシ、五分半、輪、三枚半、或、コシ、片枝ニテ、

八分トリ、輪立ハ、四間キリニシテ、一分ヲ、カラハフ、

上ハニシテ、筋違ニ、引ハ、五寸、勾倍、成、イハラヒレハ、

桁ノ間、五間ニ、ワリ、中三ケン也、右スシカイ、ノスミニ、

トリツク、ヤウニスヘシ

萱負 タケ、タルキノ、タケ、目返、下ハ、タルキ、下ハ、

一本半、

裏行 アツ、カヤヲイ、半分、出ハ、カヤヲイ、ホト

葺地 アツ、五分、出ハ、四分

鬼板 鵜毛 鳥常之通

蹴離 房立 間房 闔 唐門ニ同事

薬医門之事

柱 面ラ、一寸、六分、トリニシテ、アツ、同、カ子ニテ、

七分、此、外、カノ、キクタキハ、一寸、二分トリノ、柱ニ

シテ、用之、或、一寸五分、トリニシテ、アツ、同、カ子

ニテ、六分ニモ、高サ、八寸、内ノリ、或、柱、内ノリニテ、

九寸、内ノリニモ

釣柱 八分、カソエ、立所、闔、被テ、柱、内ノ方ニ、ヲ

サム、或、本柱ニテ、半分、四方、ニモスル

冠木 アツ、六分、カソエ、ハ、柱、アツニメン、ホトツ、

余ル、或、柱、ハ、ニテ、六分、タケニシテ、下ハ、タケ

ヲ、目返ニモ

税 ツリ柱、メン内ヲ、タケニシテ、下ハ、タケ半分、有所、

下ニ、本柱、ハ、ヲ入、上ニツリ、ツリ柱、一本入ル

女櫪 下ハ、四分、タケ、五分、或、下ハ大柱、ハ、

三分一、タケ、同、カ子ニテ、六分ニモ、長、カフキ、ツ

ラヨリ、大ウツハリノ、ハナマテ

男櫪 下ハ、同前、タケ、六分

桁 下ハ、四分、タケ、五分、或、タケ、木柱、半分、下ハ、

ウツハリホトニシテ、居所、ツリ柱、中スミ也、或、楣ヲ、

釣柱ニ袖柱

沓居ニ柱石

柱税ニ貫

(以上前頁)

大計ニ大斗

三ツ計ニ三斗

太平桷ニ太平束(たいえへいづか)

栢ニ木舞、屋根木舞か?

輪ニ輪垂木か?

勾倍ニ勾配

薬医門ニ『匠明』『裏門也。』

カ子ニ矩

キクタキニ木砕き、木割のこと。

釣柱ニ袖柱

税ニ貫(ぬき)

女櫪(めうつはり)ニ小梁

カフキニ冠木(かぶき)

男櫪(おおうつはり)ニ大梁

ツリ柱ニ袖柱

ヒラキテ、桁ノ、外ト全、前ノ、出ハ、桁中ト、柱中ト、フリ分ニシテ、出ル、或、カフキ、内ツラト、棟、桁、中スミト、合ヤウニモスル

負形有 長サ、桁ノマ、フリ分

大計[※] ツリ柱、ホトニシテ、高サ、ツ子ノワリ、ヒシキ、ツ子ノトホリ、

椽 下ハ、二分、タケ、二分マシ、六寸勾倍、カス、マウチ、八間ワリ、ソハノキ、二ケンツ、ノキノ、長、桁ノマ、三ケンワリニシテ、一分、カヤヲイ、外トマテ、或、柱ノ面、七ツワリトモ、ハナニ、マシ有リ

萱負 下ハ、タルギ、タケ、目カヘシ、タケ、下ハ、一本半裏行 アツ、カヤヲイ、半分出ハ、カヤヲイホト

破風 ハ、下トメ、八分、反、此、一分、上ニ、マシ、三分、下ニ、一分

算地 アツ、四分、出、三分半

鬼板 掛魚[※] ケハナシ[※] 間房[※] 築地[※] 形等常之通

闔 カマチ、廿四ワリ、アツ、同ハ、ニテ、八分、サン、同ク、カス六本、板、五枚宛鉄具常之通

上土門之事[※]

柱 寸[✓]カソエ、丸也、高サ、七寸内ノリ、或、一寸[✓]一分ニシテ、方立内ノリヲ、カフキ、上ハニ、当ルトモ

唐石敷 常ノ通

女櫓 下ハ、四分、タケ、五分、長^カ、大ウツハリト、カフキ、ツラマテ、フリ分、下ハニメン有

男櫓[※] 下ハ同、タケハ、五分、或、五分半、長サ、トヒラヲ、ヒラキ、桁、内ツラニテ、ハリンノ、ツリアキ

冠木 タケ、五分、下ハ、柱ヨリ、メンホトツ、余ル、或、下ハ、柱目返ニシテ、タケ、五分半、ニモ、長、桁ト同

桁 下ハ、四分、タケ、五分半、長サ、間内、四ケンワリ、或、桁ヨリ、桁マテ、四ケンワリニシテ、一分ツ、

妻櫓[※] 下ハ、四分、タケ、五分半、眉[※]、有リタケ、フリ分、下ハ、三分一也

破風形^四 アツ五分、コシ、五分、タカサ、三枚也、三ケンニ、ワリ合ル、成、ヲサタムル、ヤ子勾倍、ソリニ、随、或ハ、四寸二分ニモ

棟下木 アツ、四分、下ハ、八分、鼻、ハフ下エ、見ル裏行 アツ、式分、但、桁ノ上ニ、出ハ、四分、一寸八分勾倍ニシテ、ウツ

屋根板 一寸[✓]宛ニシテ、二重、四寸式分ノ、勾倍ニシテ、打、或、ハシフキ板ト、云説モ有リト云也

蹴離[※] 四分、六分、

間房 二分半四方也

方立 アツ式分、ハ、五分

闔 方立ニ、カマチノ、アツホトツ、カケテ、廿四割也、ム子カトノ戸ニ、板、六枚、有物也

築地[※] 形有リ同前

大計[※] 大斗（だいと）

ヒシキ[※] 肘木（ひじき）

ケハナシ[※] 蹴放

間房[※] 櫓（まぐさ）

上土門（あげつちもん）[※] 『匠明』『宮

門跡、公家衆ノ、武家ニモ用。』

妻櫓[※] 妻梁カ？

眉[※] 櫓（まぐさ）

ヤ子[※] 屋根

ハシフキ板[※] 柄振板（えぶりいた）か？

冠木門[※]

柱 寸^シ、カソエ、アツ、六分、高サ、間内ヲ、カフキ、上ハニ、当ル

冠木 アツ、六分、下ハ、アツ、目返、長、間内、四ヶ
ンキリニシテ、一分ツ、ソハノキエ、出ス

闔 カマチ、ハ、四分、アツハ、幅ニテ七分也、横板也、
立櫃ニシテ、七本有リ、アツ、カマチニ、応

櫨桁 八ケン刻ニシテ、ノキニ二本ツ、ハフ共ニ打
切破風 萱負 間房 蹴離等 棟門ニ同事

築地 形有リ若^シ無^ハツリ柱可立

平地門之事[※]

柱 寸^シ、カソエ、アツ、八分、或、一寸^シ一分、カソエ
ニモ、拾メン也、高サ高サ、塀、上棟ト、闔、鼠走ト、見
通シ、是ヨリ、柱一本半、或二本ニモスヘシ、塀ノ、棟ハ、
ヒロマ、ワキシヤウシ、カフト、桁下エ入

闔 カマチ、廿四割、或ハ、四分、アツハ、幅ニテ、八分、
櫨モ同、クハンヌキ、サンハ、式本、此、高サ、屏、コシ
長押ノ、上ニ、ノルヤウニ、スヘシ、下ハ、長押、ヲ見通ス、
地スリ板、サン、半分ニシテ、其下、カマチ、半分、出ル、鼠
ハシリ、見セ、面、カマチニテ、七分、上ノ、サンノ、間柱
ノメン内也、タスキハ、カマチ、ハ、四ツワリ也、同アツハ、
カマチニ、少、チリ有、クハンヌキハ、カマチ、アツ四方也
長サ、トヒラ、片ハ、ホト

鉄物 幅、サン、ホト也、下^モハ、中^カニ打、上ハ、サン、
一本、下^ケテウツ

右 広間 落縁一尺八寸之時ハ門一丈式尺也 広間
ニ不^レ取付 門ハ七寸、内乗、之但、地^ノ形ヨリ、鼠走マテ、
ヒロマ、ヲチエンノ、地形ヨリ、六寸三分、下ル
柱一本半カ

同取付塀之事

柱 大サ四寸式分四方門ニ、取付、二寸一分、明ク、高サ、
ヒロマ、ワキセウシ、カフト、桁、下エ、屏、上ム子ヲ、
入ヘシ

長押 タケ、屏柱ノメン内也但三寸一分カ
井ノ木分有所ハ、

上^ミハ、ウテ木ノ、下ニ打、コシ、長押ハ、ヒロマ、ヲチ
エンノ、上ニノル、或、ナケシ、上ハト、ヲチエンノ、上
ハト、同、高サニモ、地ナケシ、有リ、惣而、長押、スサ、
屏柱メン内ニシテヨシ、三寸六分トハ、屏柱、四寸式分ノ、
ユエ也、或、広間、柱メン内ニ、屏柱モ、スル、ヨシ、此、時、
ハ長押、又、屏柱、メン内、ナルヘシ

背木 長式尺七寸或長三尺也 但是ハ板幅四寸ニ
タケ、三寸二分、アツ、壹寸八分、
柱三ツワリニ分
柱半分

桁 タケ式寸五分 下ハ柱三ツ割
居所板ハナヨリ四寸入ケタノソトツラ
屋根板 アツ、一寸四分ニ、七寸宛、上^ミハ、六寸、

中^カハ、三寸、下^モ一寸五分、或、ハ、八寸ニ、上、六寸、
中、四寸、下、式寸、同アツ、柱三枚ワリ
一寸四分ニ全

猿頭 フトサ、柱、メン内、半分、タケ、成ニ随

上棟 タケ、サルカシラ、一本半

冠木門 〓『匠明』「是ハ外端ノ門ナリ。」
立櫃 〓立棧（たてさん）

平地門（ひらちもん） 〓平門又は塀重
門か。

鼠走 〓とかみ。門の扉の上にある枢（く
るる）の凸部を差し込むための穴の
ある木の意。

ヒロマ 〓広間

ワキシヤウシ 〓脇障子

カフト 〓冠木か？

地スリ板 〓？

内乗 〓内法（うちのり） 一

取付塀

ウテ木 〓腕木（うでぎ）

背木 〓腕木のことか？

猿頭（さるがしら） 〓塀などの葺板の
押さえ木、五角形の断面を持つ。

向墀重門之事

柱 寸^シカソエ、丸也、寸^シクヒリ、高サ、柱内ノリヲ
柱又キ、上ハニ、当

釣柱 八分、四方ニシテ、拾メン、ナリ、ヒロサ、楣ヲ
 披テ、柱内ノリニ、入ル、或、柱中スミニモ

柱、椀、タケ、六分、下八、四分、

粹^ハ肘^ニ木^ハ下^ハ、柱^ハ三ツワリ、柱^ハ、指^ハ、タケ、三分マシ、成、
 ハリユキハカリニ入^ル桁^ヘ行^ハ不^用
 カラヤウニ、似^テ、上^ハ、ヨクリ下^ハヲ、マロクスル也

大計 八分、四方、タケ、幅ニテ、五分半、是ヲ、五ツ
ワリニ、スヘシ、エンザギ、アツ、大計タケ、四分、是ヲ、
又、五ツニ、ワケ、上_ニ、二ツ、下_モ、三ツ、エンサ、長サ、
大トニ、テ八分[※]

[※]檣キ計 長サ、六分、高サ、此、長ニテ、六分、是ヲ、五
ツニ、ワルヘシ、エンサ、アツ、マキドノ、タケ、六分也、
是ヲ、三ツニ、ワケ、上、一ツ、下、二ツ、上ヨリ、ナテ
下ル、下モヨリ、クリ上ル、同、長サハ、マキト、同ク、大
戸ノエンサハ下モヨリナケ上ケ、上ヨリクリ下ル

実、肱木、下ハ、大計、三ツワリタケ、二分マシ
 柝、下ハ、四分半、或ハ、四分ニモ、タケ、六分、長サ、間内、
 四ケンニシテ、ソハノキニ、忒ケンツ、イタスヘシ

櫛 下八、五分、タケ、八分、或、九分

雲板 トシリ、七ケン

檯 下ハ、貳分、タケ、貳分、マシ、ソハノキニ、一本ツ、
唐破風 コシ、六分、ワ、三枚立、或、片枝ニテ、八分
トリ、此外カノ仕ヤウ、カラモンニ同斷

萱負　タケ、タルキノ、タケ、目カエシ、下ハ、タルキ
下ニテ、一本半

裏行 タケ、カヤヲイ、半分、出ハ、カヤヲイ、ホト

裏板 片屋根、ノキ共ニ、拾一枚ニ、ワリ全、カンキニ、打

鑑　タカサ、万仕ヤウ、平地門、二同事屏二同前

※ 広間之事 地形柱一本半

柱 四寸二分也、是ヲ、七ツニシテ、一ツヲ、両方ノ、メンニ
用、高サ、ヲチエンノ、板、上ハマテ、一尺八寸、是ヨリ、
広エンマテ、半長押上リ、敷板ノ、上ハ也、又、立物カハ、
半長押、タカシ、戸内ノリ、六尺

落縁 ツカ大サ 柱、メン内四方、カツラ桁、タケ、柱

ホト、下ハハ、半分也、板ノ、アツ、柱メン内、半分也、広サ三尺也、ツカノ、タチハ、木柱通

※戸内乗 六尺、シキイ、二寸、カモイ、一寸八分、サ
イ八分 或、カモイ、半分

上壇 高サ、八寸也、但カマチ、上ハマテ

上々壇 上タンヨリ、柱、一本上ル

長押幅柱ノメン内也、

肱木 下ハ、柱、片メン、ヲトシ、タケ、柱、一本、或
 片メン、ヲトシ、四方ニモ、長サ、※一小間目ノ柑目外トノ、メン内ニ、

柎 下ハ、柱、メン内也、ケタ、柱、ホト、軒ノ高サ、上
シトミヲ、カモイト、柎ノ、内ニ、入ヤウニ、スヘシ

向塀重門 〓 『匠明』 是ハ主殿ノ前ニア

ル門ナリ。

杵肘木に十字に組んだ一組の肘木

大卜 大斗

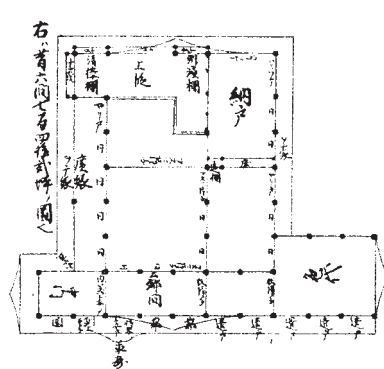
楨計 二 卷斗

カンキョーガング、裏板用材の種、ある

いは堅木材の意か

ワII輪（輪垂木か）

広間 Ⅱ 『匠明』 「主殿 当代ハ広間ト云
リ。」 「昔六間七間ノ主殿之図」



六七〓六間七間

七ツニシテ〓七ツ割ニシテ

カツラ栴||縁葛

戸内乗_二戸の内法サイ||成
(セイ)

上壇 || 上段

上々壇 || 上々段

檼 下ハ、柱、メン内、二ツワリ、タケ、二分マシ、桁中ヨリ、カヤヲイ、外^トマテ、五尺貳寸ノ、長サニシテ、貳寸二分、勾倍ニシテ、可打一小間^打

萱負 柱、メン内、或、片メン、ヲトシニシテ、下ハ、メン内ニモ、スヘシ、反^リ、一本ニシテ、二分マシ

栢[※] ハ、タルキノ、メン内、アツハ、タルキノ、タケ、二ツワリニシテ、歩^ミハ、シトミ、ツリカ子ヲ、コマイ、中スミニ、打ヘシ

裏行[※] アツ、タルキ、下ハ、ホト、或、カヤヲイ、タケ、半分ニシテ、出ハ、カヤヲイ、ホト

破[※]風[※] 立ハ、中門ノ、上ム子ヲ、ヒロマ、前包ト、見通、或、柱、中スミヨリ、間中入テ、立ルモ、有、中門、ナクハ、片ヤ子、三ツ半ニシテ、下^タ、一分^シ上ル、コシハ、下トメ、拾分一也、前包、ハフ、三分一也、三分、タルミ、三分マシ、下ニモ、マシ少

狐[※]格[※]子[※] 大サ、ケンキヨニ、七本、カ、ルヤウニシテ、明ハ、子[※]、貳分マシニシテ、アユムヘシ、小ツナハ、子ニテ、八分トリ

葺[※]地 アツ、カヤヲイ、タケ、二本、勾倍、五寸二分

鬼[※]板 ハフ、二マイ、六ツワリニシテ、一分、輪ノ、フトサ也、高サ、輪ノ内ニテ、八分也、

天[※]井 高サ、柱、廿五本、折上ケ、高、柱、貳本、曲リ、一本、フチ、柱メン内、二ツ、ワリ、四方ニシテ、サルホフ也、廻フチハ、柱二ツ、ワリ、ム子メン^{ホト}

同[※]長[※]押 大サ、同前、フチヨリ、柱、目返、下ル

床 カマチ、タケ、柱、メン内、アツ、ハ、タケ、三分^シニシテ、二分^{ナリ}、ヲトシカケハ、柱メン内四方、高サ、上々タン、ナケシノ間ニ、柱貳本、ハサム、カマチノ、下ニ、柱一本、入ル、或、カマチ、上ハマテ、八寸ニモ

書[※]院 高サ、上々タン、カマチ、ヨリ、地板、上ハ、マテ、八寸也、地板、アツ、一寸八分、幅、一尺六寸也、カモイノ、高サ、四尺貳寸、同アツ、一寸六分、台輪ノ、タカサ、ナケシ^トノ明、柱、一本ハサム、柱ノ、大サ、柱メン内、

四方也、或、中カモイノ、高サハ、^{柱メン内}、下ヨリ、地板ノ、上ハマテ、三ツ、ワリ二分^シニモ、ヲトシ、カケハ、

内ノリ長押ノ、上ニ入、地板、広サハ、取付ノ、柱、メン内ヨリ、メン一ツ入テ、ミソツラマテ、一尺三寸也、当世ハ、是ヨリモ、広シ

納[※]戸 シキイ、高サ、上タンヨリ、八寸^シ、同タケ、柱片メン、ヲトシ、上ハ、メン内也、カモイ、タカサ、内ノリ、カモイノ、下ト同ク、亦、大サハ、片メン、ヲトシ、四方、或、メン内、四方ニモ、長押ノ、高サ、内ノリ、ナケシニ、柱、一本半、ハサム、^外サマカマチ、柱メン内、半分也、キ

チャウメン、有リ、四六ニ、ワクル、方立、柱ノ、メン、三ツ、ヲトシ、付柱カタ、メンヲトシ、クチノ広サ、柱内ノリ、四ケンワリニシテ、方立、ホトツ、[※]小カヘ、セハシ、或、五尺二寸ニモ、戸カマチ、幅、柱、三ツワリ、貳^タ分、アツ、幅、三ツワリ、貳分、キチャウメンハ、六ツ割ニスル、外ト、張付、内ハ、カ、ミ板、定木、方立ニ、片メンヲトシ

上タンニ上段（じようだん）

一小間ニ一木間、垂木配列一つ分の距離（以上前頁）

栢ニ木舞（こまい）、屋根木舞か

裏行ニ裏甲

立ニ立所、『匠明』破風立所は中門ノ棟を踏ト云リ。

中門ニ広間の前方に突出した広縁風の廊、寢殿造の中門廊の名残と考えられる。

狐格子ニ木連格子ともいう。

ケンキヨニ懸魚（げぎよ）

子ニ狐格子の組子のこと

鬼板ニ鬼瓦にこと

サルホフニ猿類（さるぼう）

上々タンニ上々段

ナケシニ長押（なげし）

タイハニ台輪（だいわ）

納戸ニ納戸構（なんどがまえ）

サマカマチニ障手、長押の下に付く細い押縁。壁の押さえ。

小カヘニ小壁（こかべ）

違棚 先ニテ図在リ委シルス故略之

竹之節[※] 大サ、柱メン内、四方、是ヲ、三ツ、ワリニシテ、

七ツ半、タ、ム、内、式ツ、上下ノ、フシ、三ツ、ハダウ、

式ツ半、フサ也、上下ノ、トマリハ、フシ、一ツ宛、タス

キハ、フシ、半分ツ、

ハキ上ケ[※] カマチノ、フトサ、柱、メン内也、同、内ノリハ、柱、

三本、タ、ム、取付ハ、柱、一本アク、ツマ戸ノ、方ハ、小カス、

拾三本、大サ、七分ニ、シテ、ヨコニ打、中門之方ハ、小カス、

六分ツ、ニシテ、拾五、立ニ打、何モ、外ハ、角レンシ、内ハ

セウシ也、此窓ノ、取付之間ニハ、カモイ、入ス

遣戸[※] カマチ、幅、柱、三ツワリ、アツ、幅、三ツワリ、

二分、マイラ、幅、カマチ、半分、同、アツハ、幅ニテ、

半分

部[※] カマチ、幅、柱、三ツワリ、アツ、幅、三ツワリ、二分、但、

カモイ、内ノリヲ、拾分シテ、上、シトミ、六ツ、下、シトミ、

四ツ、マイラ、カス、三拾六也、同、大サ、柱六ツワリ、或、

小間ヲ、目返ニモ、此時ハ、三拾ニモ、不限

杉戸[※] カマチ、柱、メン内、半分、アツハ、幅、三ツワリ、

式分也

腰障子[※] カマチ、柱、三ツ割、一分、アツハ、幅、三ツ

ワリ、二分、マイラ、幅、カマチ、半部

中門之事[※]

欄[※] タケ、五寸式分、或、六寸五分ニモ

舛形[※] 柱、式本、高サ、一本

椽[※] 大サ同前、勾倍五寸五分ニシテ、長式尺五寸

指首[※] 長押、式本

萱負[※] 同前

指首[※] 長押、一本

肱木[※] 長、一尺七寸九分也、大サ、前之通、但、ソハノキノ、

シカイ、一本、ウツユエ、ツ子ヨリモ、ナカシ

破風[※] 幅、長ニテ八分、或、柱、一本半ニモ、上ニ、三分

マシ

箱棟[※] 広マ、前包下ハト、ノシヲ、見通ス

輿寄之事

勝負桁[※] 水タレ四分

蟻股[※] 戸シリ、七ケン、舛カタノ、大サ、六寸五分

唐破風[※] コシ、カヤヲイト、ウラ、カハ、トニテ、究ル、

輪ノ、高サ、コシ、三枚、アツ、カヤヲイニ、メン一ツ、

外トヘマス、或、輪ノ、タカサ、セウフケタノ、間、四ケ

ンキリ、一分ニモ、イハラヒレハ、五ケン、ワリ、但、セ

ウフケタ、間、五ケンニシテ、中、三ツ、両ワキ、一ツ宛、

長サハ、式小間目ノ、タルキノ、ソトニ合、トビノ尾ハ、

ソレヨリ、ハフノ、タケ、半分出スヘシ、ハフ、ヒツミハ、

立水ト、カヤヲイ、コロヒトノ、間也、

違棚

竹之節（たけのふし） 欄間の一。

ハキ上ケ 剥揚連子（はぎあげれんじ）、

車寄せ 脇中門寄りの柱間の内法に設

けられた横連子の窓。

ツマ戸 妻戸、剥上連子の戸、車寄せ

の扉の事。

小カス 連子子（れんじこ）の数

角レンシ 角連子、連子子の断面が正

方形または菱形のもの。

セウシ 障子

マイラ 舞良、舞良子のこと

杉戸 杉障子

中門 前方に突出した廊。

欄 うつはり、小屋組を受ける横木（梁

或は、梁破風

舛形 斗形（ますがた）

指首 桷 桷首束

指首 桷 桷首（さす）

肱木 肘木

輿寄 輿を寄せて人が昇降する場所

勝負桁 菖蒲桁

蟻股 板幕股

セウフケタ 菖蒲桁

イハラヒレ 茨鰭

櫺[※] 柱、一本ト、メン、二ツ也、アツハ、桁ト、同ク、大サ也、
 クリハ、メン一ツ也[※]
 雲[※]板 長サ、間、半分、ソノ内、エヤウ有、[※]
 舛[※]形 大サ、柱、式本、高サ、同、一本[※]
 装束妻戸[※] 屏軸ノ、大サ、柱、メン内也、小柱モ、同ク、
 小柱ノ明、同、半分也、小柱ニ、半分、カケテ、トリツクル、
 上ノ、屏軸ハ、通テ、柱、メン中、マテナリ[※]
 方立 屏軸ヨリ、広サ、同ク、アツ、メン内、四ツワリ、
 一分也、
 間房 柱、四ツ割、一分也[※]
 蹴離 間房ニ、同ク[※]
 闔、アツ、ホト、方立ニ、カケテ、定木ハ、柱、式ツワリ、
 一分、闔、アツ、柱、三ツワリ、一分ナリ[※]

違棚之事并図[※]

地板ノ上端、納戸、シキイノ、中スミト全、同、アツ、柱ノ、
 メン、三ツ、或、拾メンニシテ、四ツニモ、袋タナノ、高サ、
 一^一寸^八分^中、或、拾メンニシテ、四ツニモ、袋タナノ、高サ、
 一^一寸^六分^八リ^ン、袋タナ内ノリ八^九分^也
 板ノ、下ハト、ナント、カモイ、下ト全、此、板ノ、アツ、
 違タナ、一枚半也、違タナノ、アツ、柱、六ツワリ、同、
 高サハ、フリ分ヲ、下板ノ、下ハニスル、違ノ、明、一寸
 八分、或、ツカ、式本ニモ、タンジヤク、ツカノ、フトサハ、
 一^一寸^二分^中、或、違板ノ、アツヲ、ツカノ、メン、内ニモ、但、此、
 メンハ、六ツワリニシテ、一分也、亦、セイラウ、タナハ、左、
 板ヲ、右、板、ヨリ、一枚、上ル、セイロウノ、タカサハ、
 左、イタ、ヨリノ、間ニ、棚、柱、一本、ハサム、常ニ、地板ノ、
 高サハ、柱、一本ヲ、板ノ、上ハニ、スル、此、外、カノ割、皆、
 図ニ、シルス、亦、タナ、取付ハ、柱ツラヨリ、メン一ツ、
 入、ナリ^六分^中

トビノ尾ニ鴟の尾。破風板の尻近くの裏甲の端を欠き取った部分のこと。

立水ニたつみず、垂直線

コロヒニ転び

(以上前頁)

櫺(ウツハリ)ニ梁破風のこと。

クリニ線

雲板ニ板幕股

エヤウニ絵様

舛形ニマスガタ、板幕股上の大斗

装束妻戸ニ『匠明』車寄扉之事也

屏軸ニ幣軸、妻戸の両側と上方の三方

にある繰形付きの額縁。

違棚ニ近世に典型化した座敷飾りのための設備。江戸時代の大工書には

四十八の棚が挙げられる。本書では

五十二の棚が図示されている。

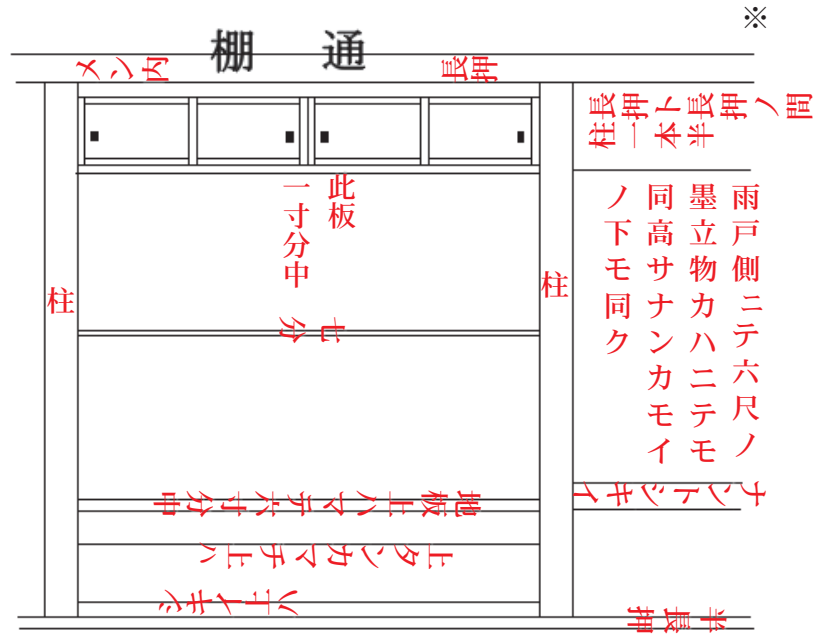
袋タナニ袋棚、袋戸棚、天袋

下ハニ下端

ナントニ納戸構え

セイラウタナニ清棲棚

棚之図



※

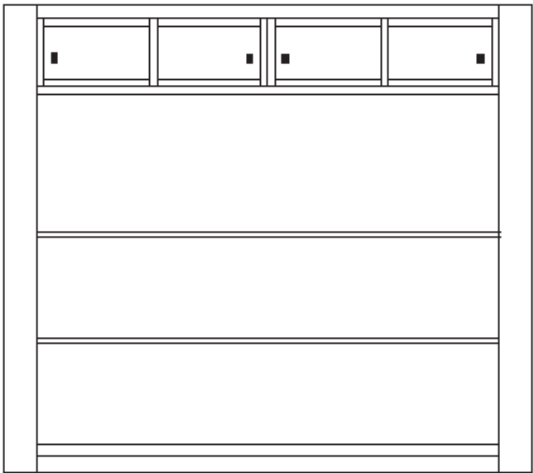
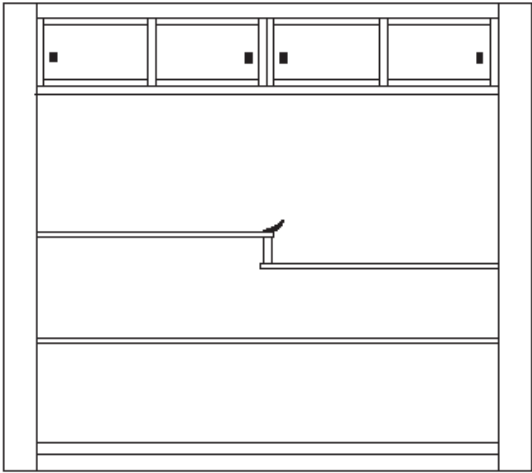
大輪棚

一間半
フリ分
ニモ

※

違棚

同

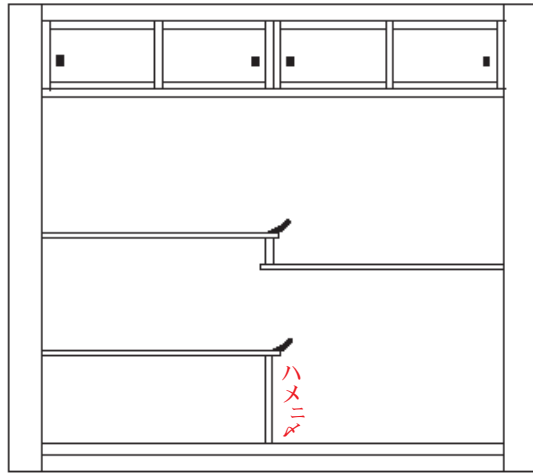


通棚Ⅱ『四十八棚十分一ぢわり』通棚
と一致

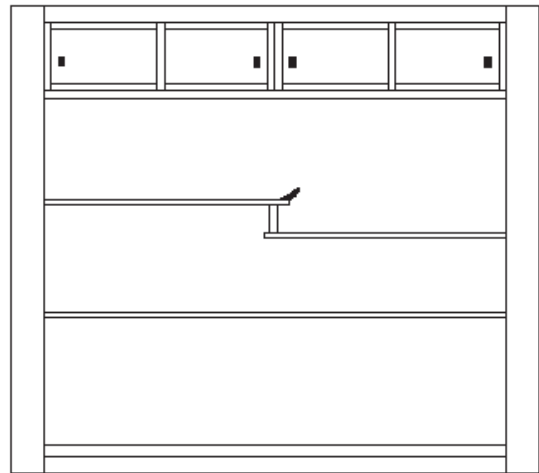
(付記『四十八棚十分一ぢわり』は万治
元年(一六五八)中秋(八月)上旬
刊の棚雛形本である。原本は国会図
書館・東京国立博物館所蔵)

大輪棚Ⅱ『同』大輪棚と一致
違棚Ⅱ『同』違棚と一致

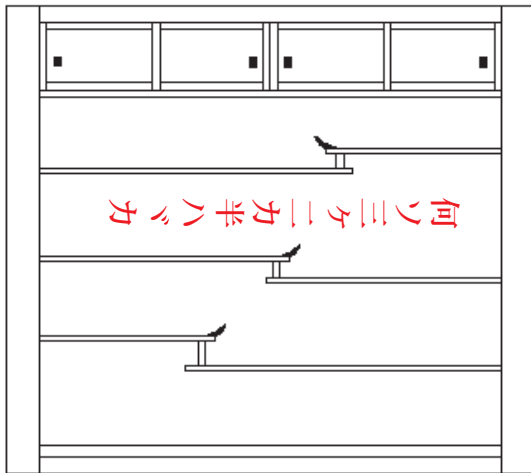
同 ※
棚 違 落



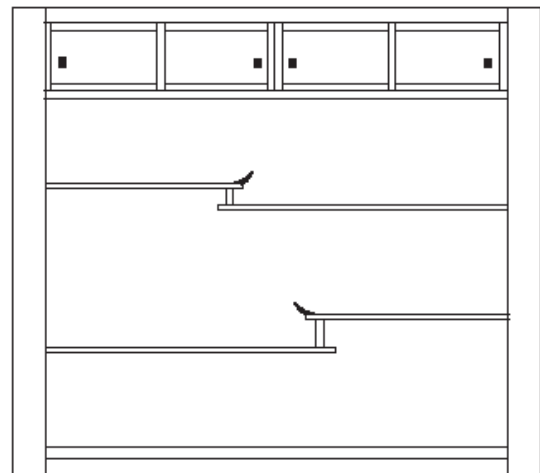
同 ※
棚 違 通



※
違 重 三



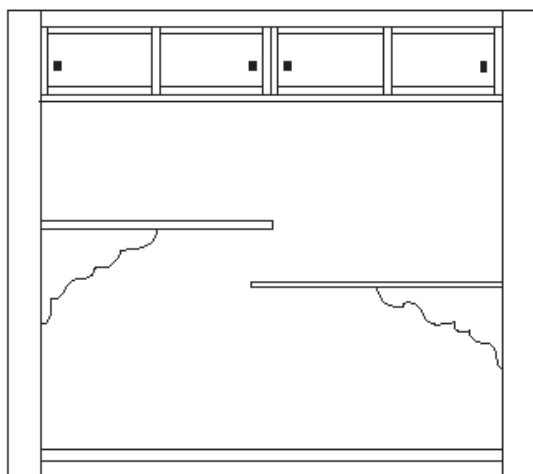
※
違 重 二



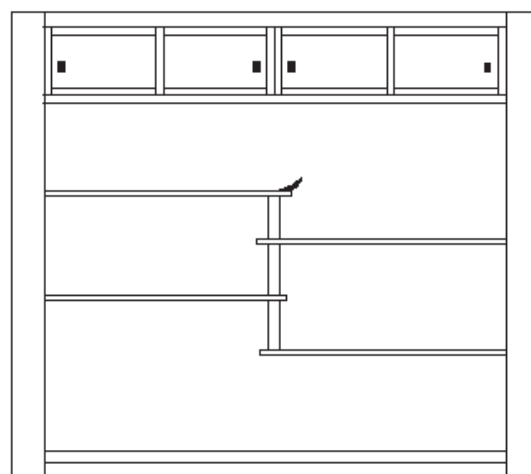
通違棚 〓 〓 通違棚と一致
落違棚 〓 〓 落違棚と一致
二重違 〓 〓 二重違棚と一致
三重違 〓 〓 三重違棚に近似

分半壺
ニモ振間

※
棚 下 上



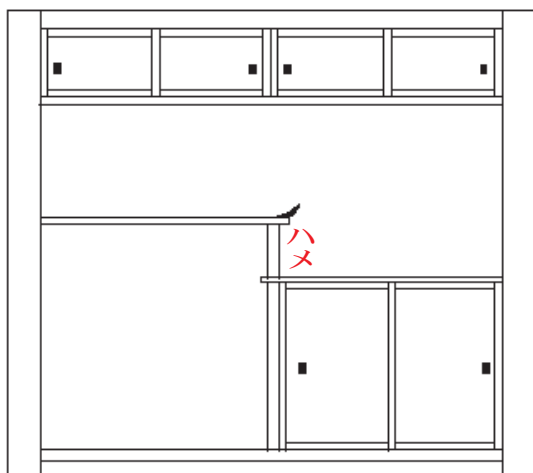
※
違 切 仕



同

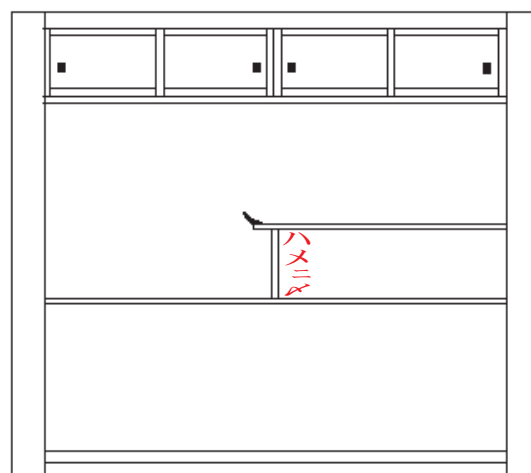
世ニ
袋ト云

※
棚 局



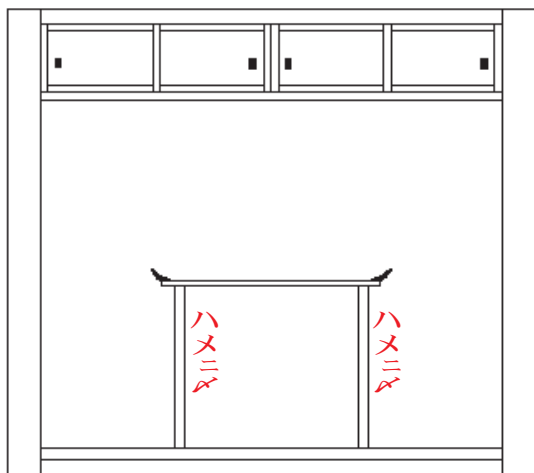
一
間半
フリ分
ニモ

※
棚 階 二

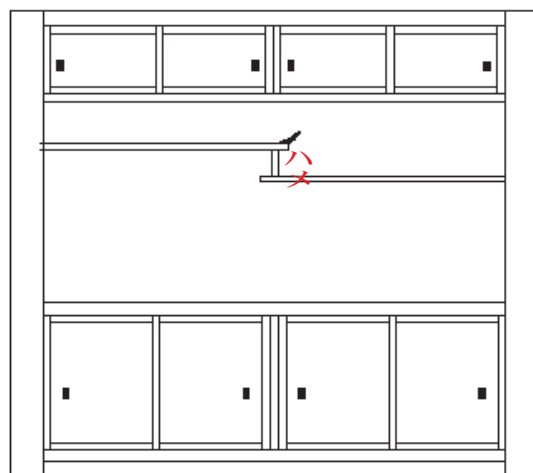


仕切違 〓 〓 仕切違棚と一致
上下棚 〓 〓 上下たなと一致
二階棚 〓 〓 二階棚と一致
局棚 〓 〓 袋棚と一致

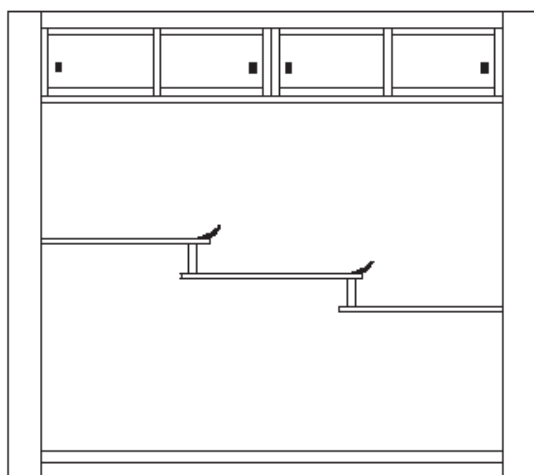
※
棚 卓



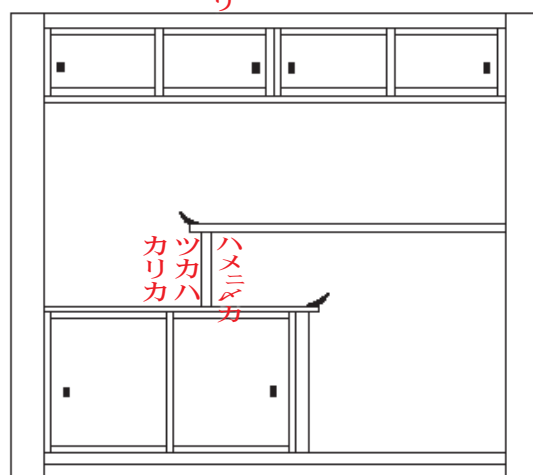
※
棚 冠



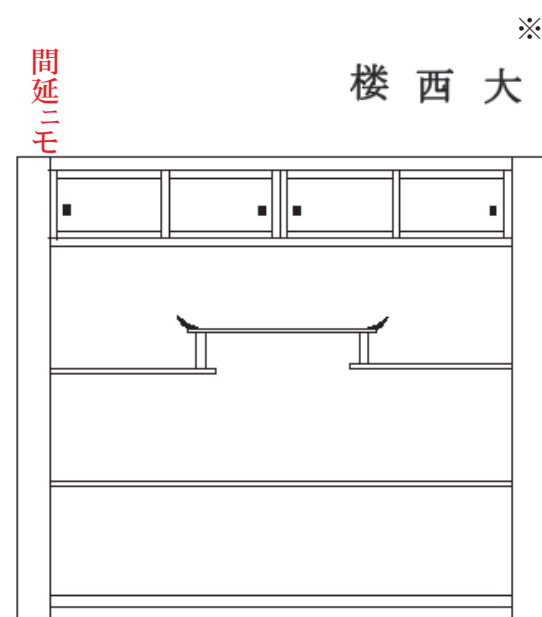
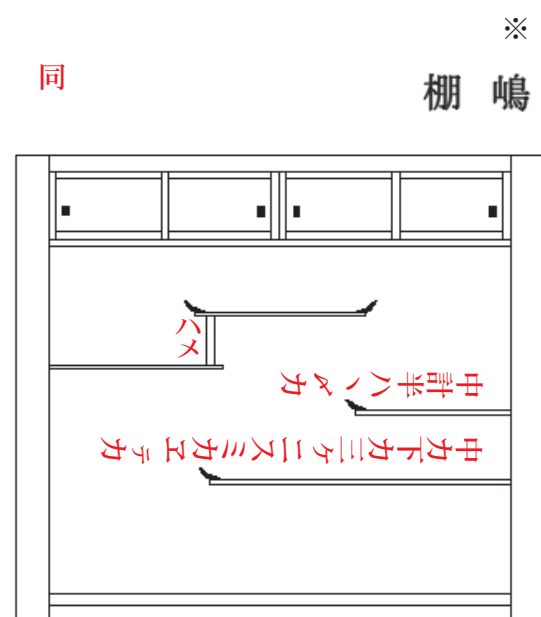
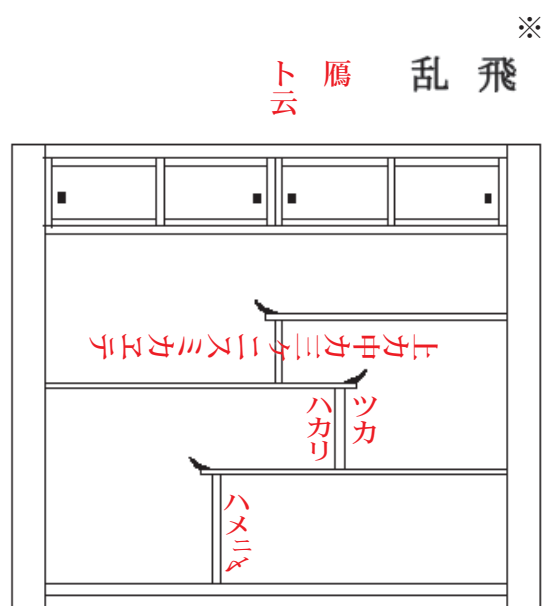
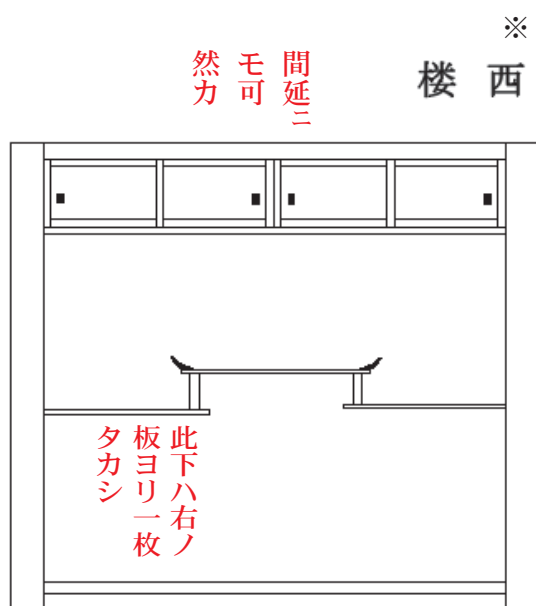
※
有用 間延ニ フリ分 式間半 ト合木 云 棚 行 雁



※
一通有リ 下ニ赤 ミナク カラカ 棚 松



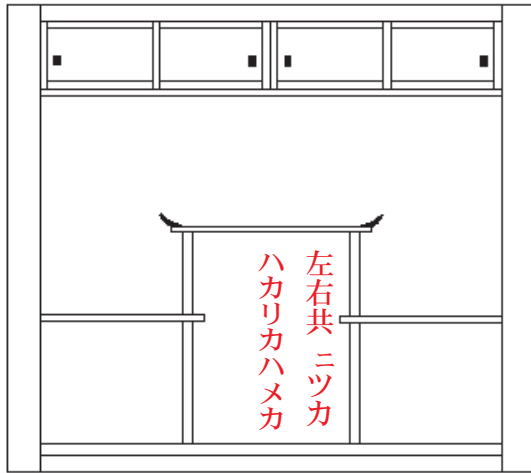
冠棚 〓 『同』 冠棚と一致
卓棚 〓 『同』 卓棚と一致
松棚 〓 『同』 松棚に近似
雁行棚 〓 『同』 合木棚と一致



飛乱 Ⅱ 『同』 雁棚と一致
西楼 Ⅱ 『同』 西楼棚と一致
大西楼 Ⅱ 『同』 大西楼棚の異形
嶋棚 Ⅱ 『同』 嶋棚の異形

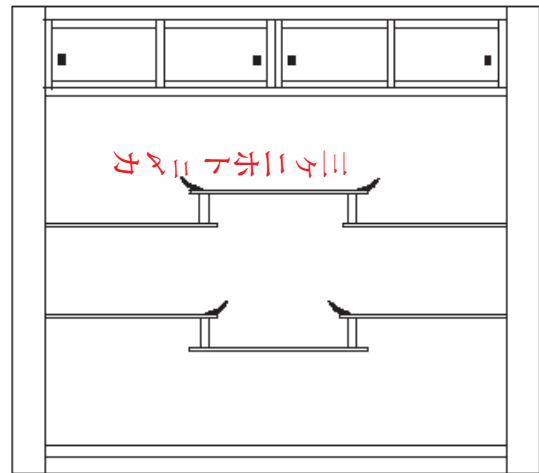
同

※
鳥居



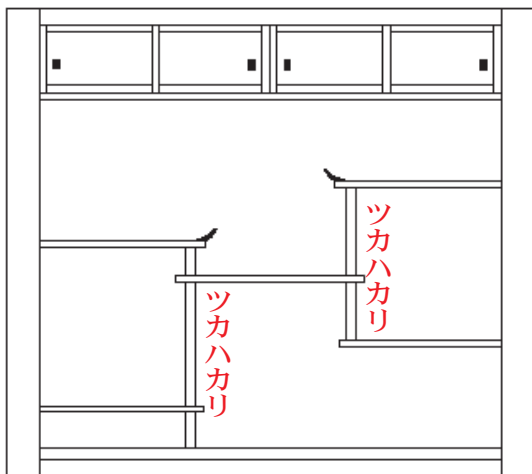
同

※
菱棚



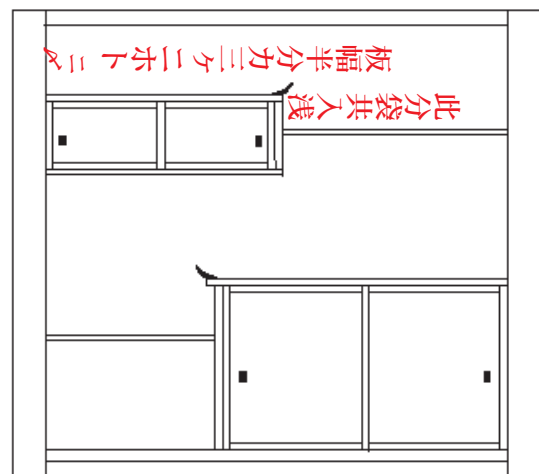
同

※
梅棚

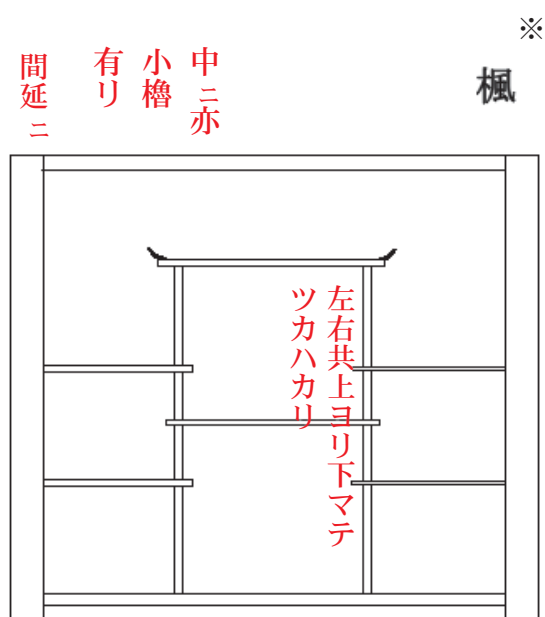
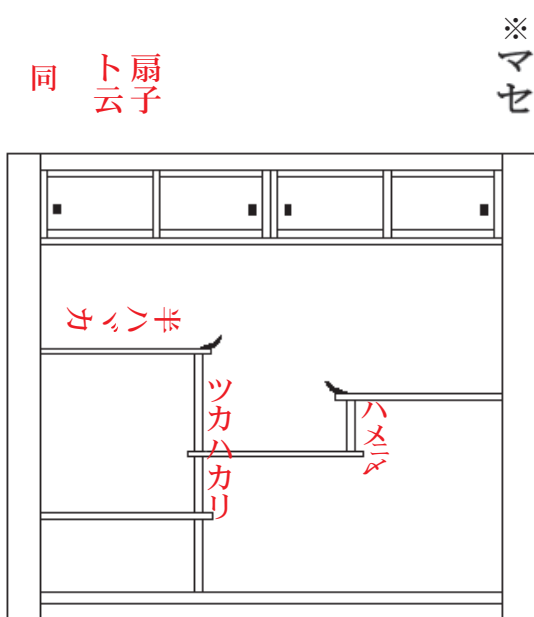
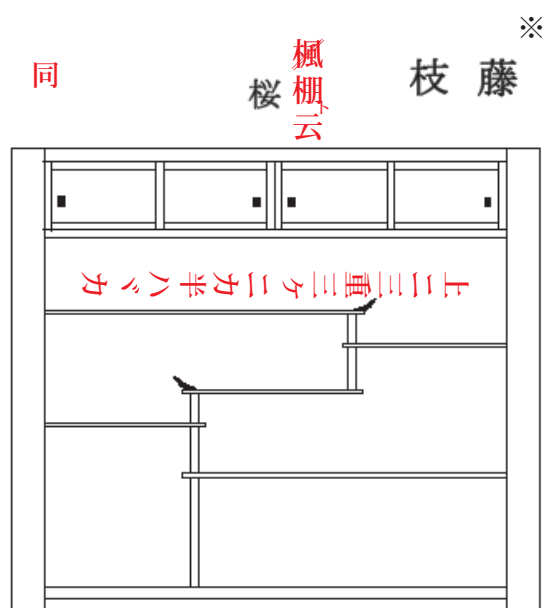


間延ニ

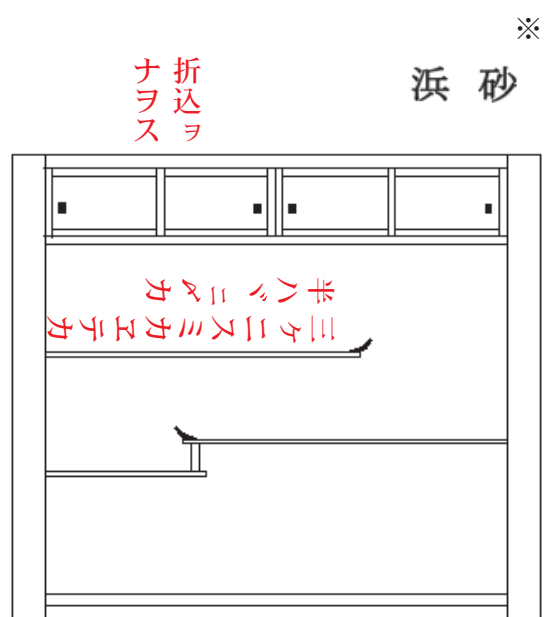
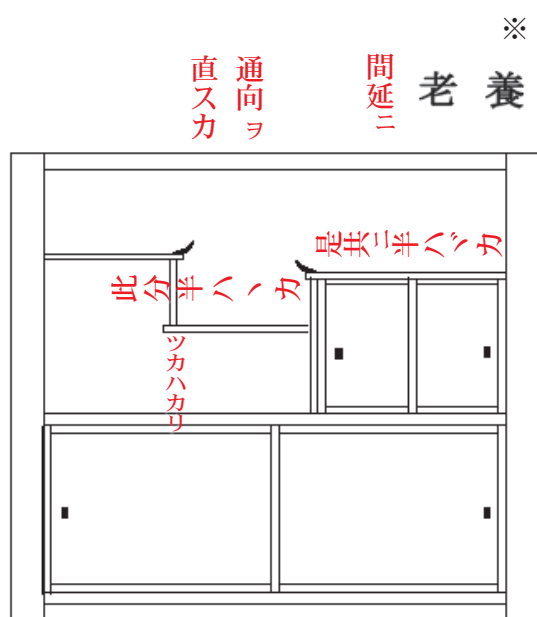
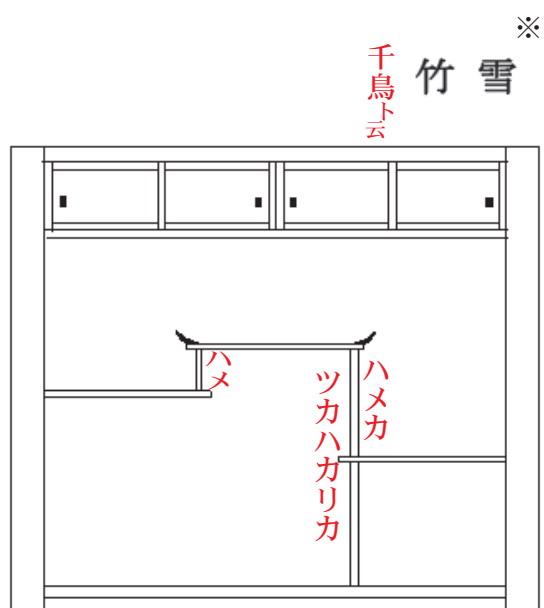
※
団扇



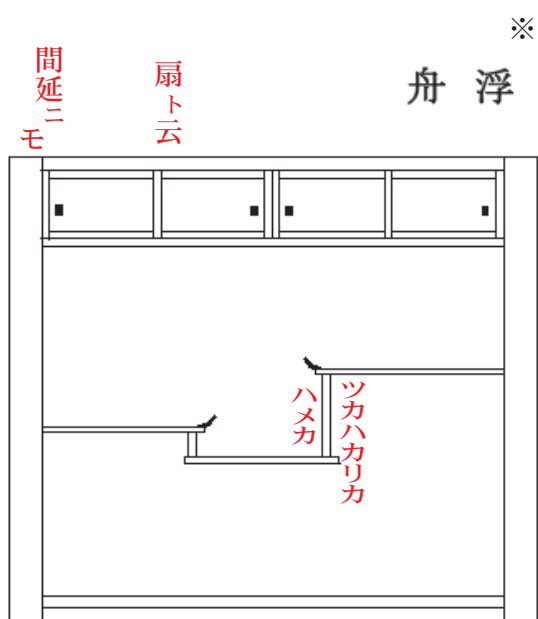
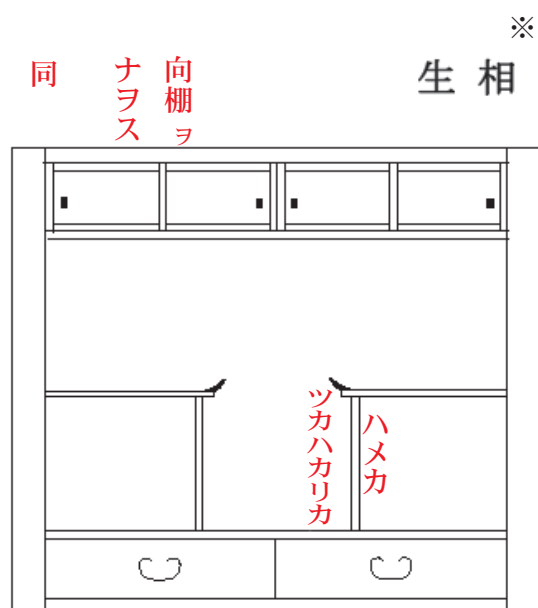
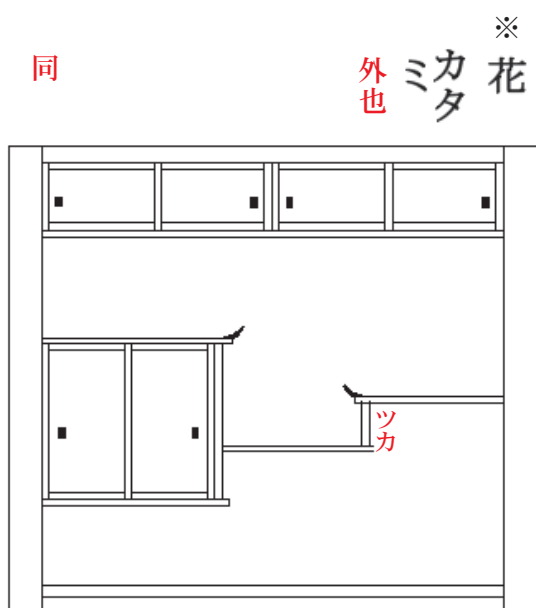
菱棚 同 菱棚と一致
鳥居 同 鳥居棚と一致
団扇 同 該当図なし
梅棚 同 梅棚と一致



藤枝 同 桜棚と一致
色紙 同 藤棚に近似
楓 同 籠守棚に近似
マセ 同 扇子棚と一致



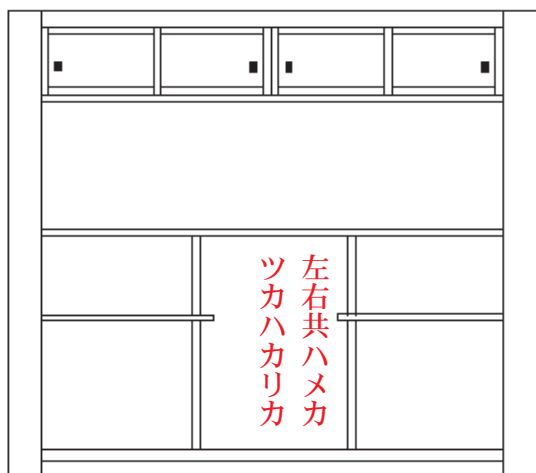
雪竹Ⅱ『同』千鳥棚と一致
籠守Ⅱ『同』籠守棚と一致
砂浜Ⅱ『同』該当図なし
養老Ⅱ『同』通方向棚とは異なる



相生Ⅱ『同』向棚に近似
花カミⅡ『同』該当図なし
浮舟Ⅱ『同』扇棚と一致
源氏Ⅱ『同』該当図なし

同

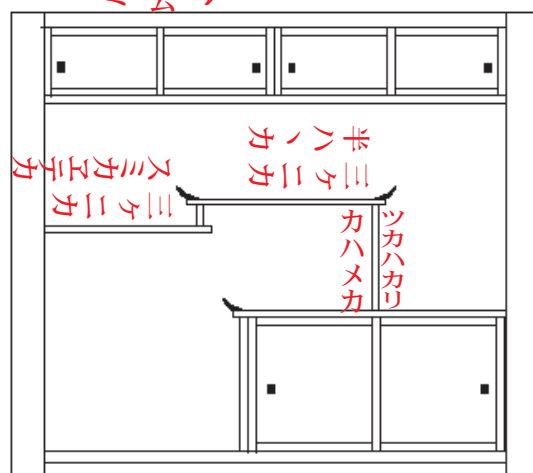
※
具 足



同

※
左構ニベ
ヤクラト云
カラカミ
ナシ

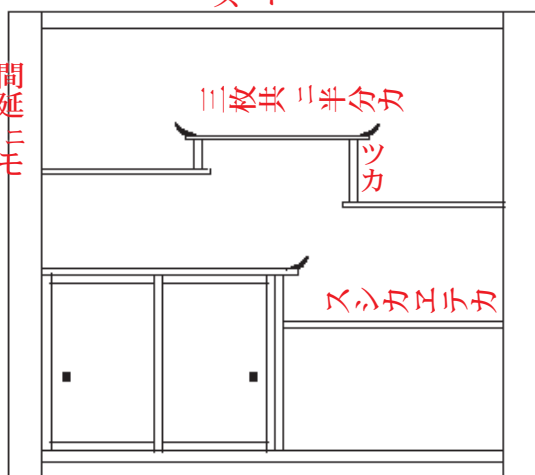
※
香 図



※
川 桜

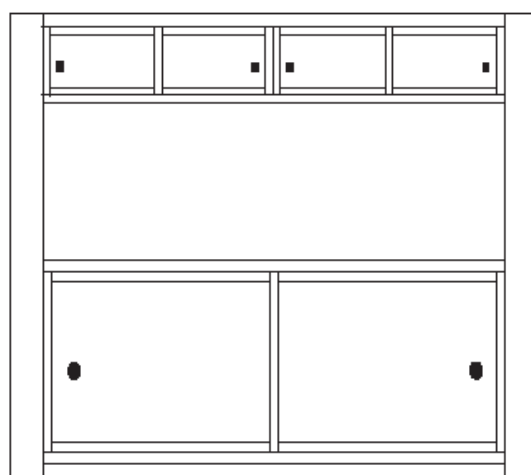
折上ゲト
云ヲナラス

間延ニモ



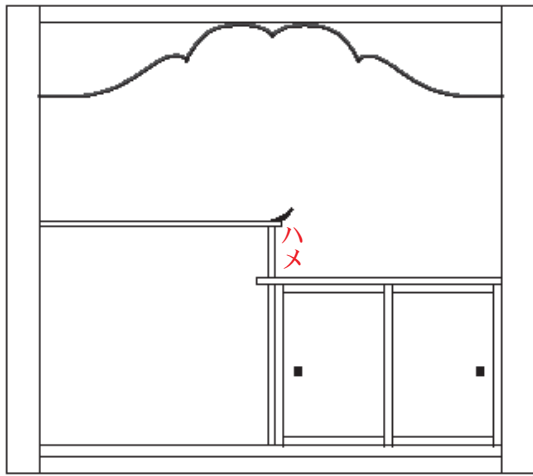
※
御物と
云也袋
四枚也

※
家 隠

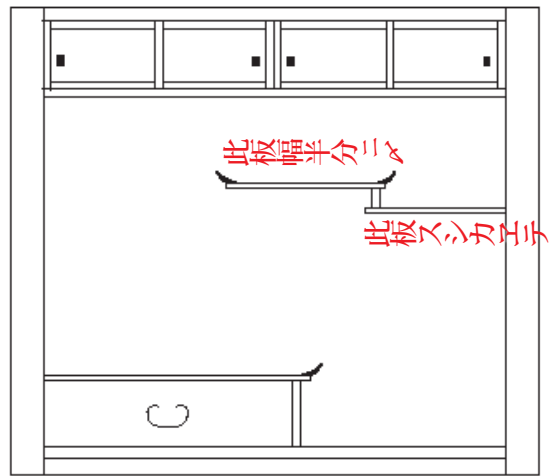


香図 〓 〓 櫓棚の異形
具足 〓 〓 具足棚と一致
隠家 〓 〓 御物棚に近似
桜川 〓 〓 折上棚の異形

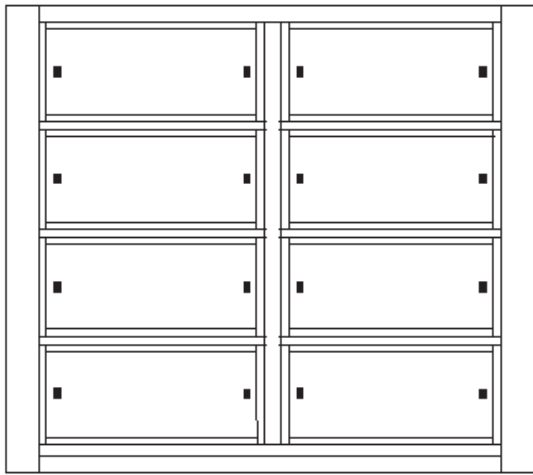
※
化 莊



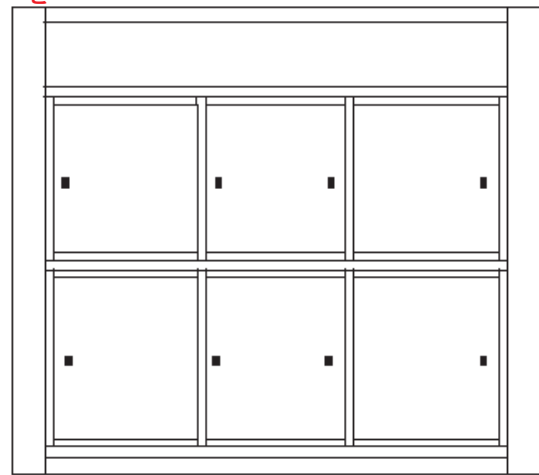
※
御 腰 物
外 也



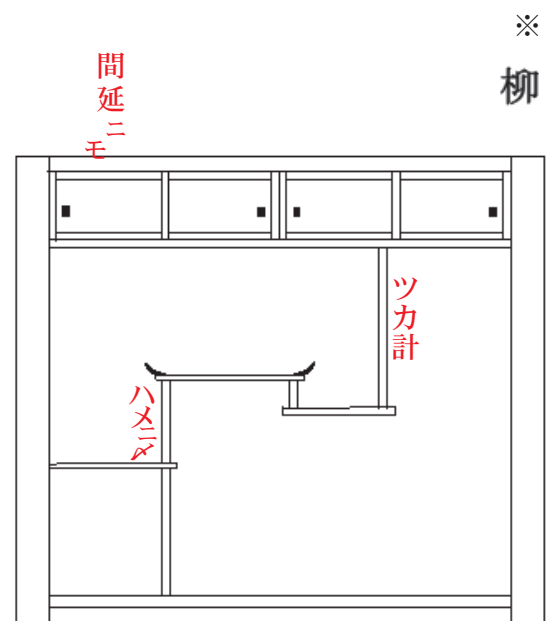
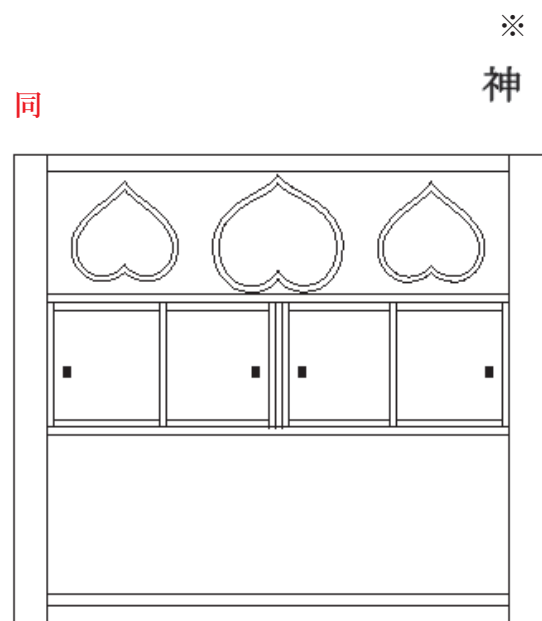
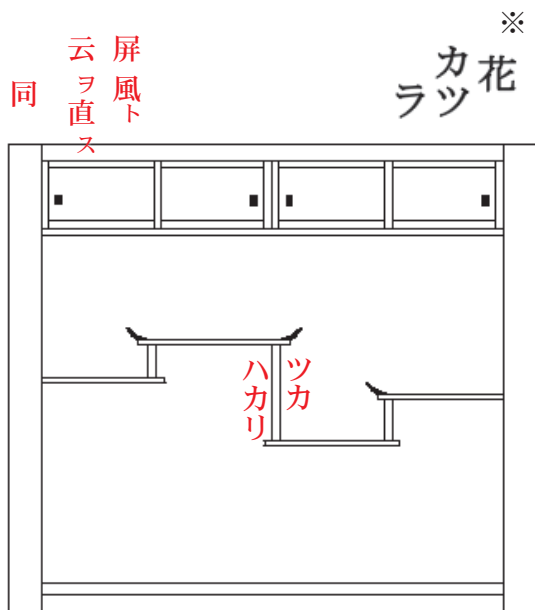
※
同 呉 服 棚 下 云 双 袋



※
衆 三
重 違 間 延 二 毛



御腰物 〓 『同』 該当図なし
化 莊 〓 『同』 該当図なし
衆 三 〓 『同』 該当図なし
双 袋 〓 『同』 呉服棚に近似

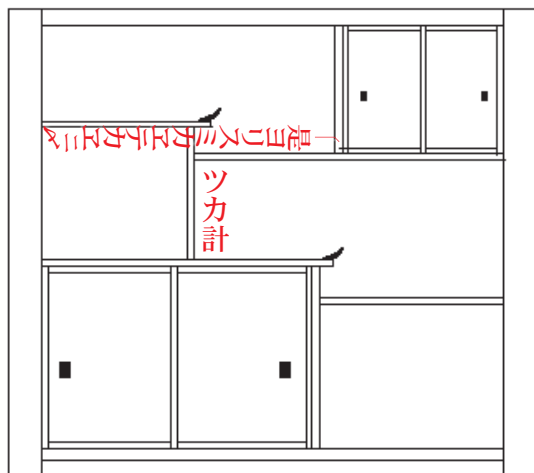


重々棚 〓 〓 双袋棚に近似
花カツラ 〓 〓 屏風棚と一致
柳 〓 〓 柳棚と一致
神 〓 〓 神棚と一致

同

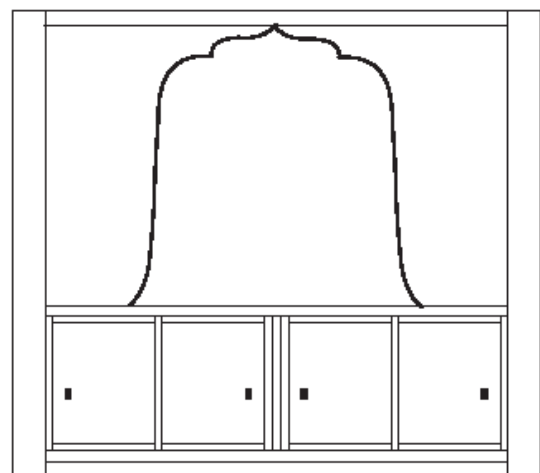
外也

※



同

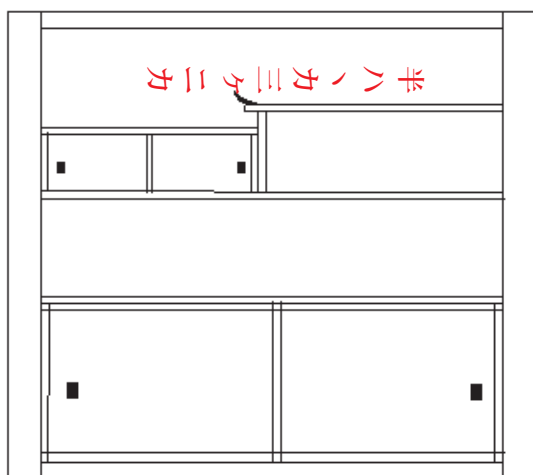
※
仏



同

外也

※



間延二モ

外也

※

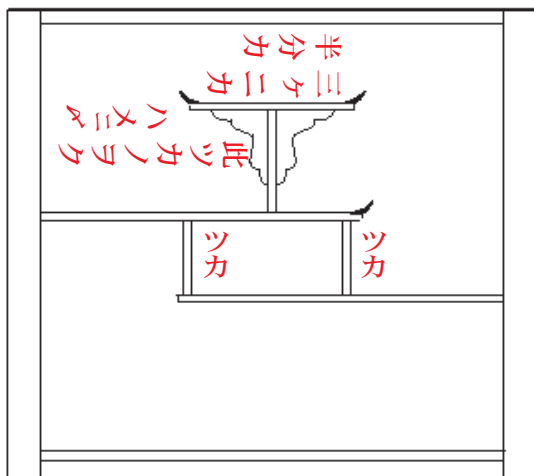


仏 〓 『同』 仏棚と一致
外也 〓 『同』 該当図なし
外也 〓 『同』 該当図なし
外也 〓 『同』 該当図なし

※

同

外也



※三間四方也 底壹間半ニ三間也
舞臺

柱 大サ、八寸四分、板シキノ、高サハ、広間、落縁ト同、

高サ也、水引、税ノ高サ、一丈一尺二寸、但板ノ上ハヨリ、

税上ハマテ、税ノセイ、柱ニ同、同厚八分算

大計 大サ、柱メン内、三ツ半ニ、割、一分ツ、両方へ、

出ス、高サハ、大サニテ、六分、是ヲ、五ツニ、割也、計尻ハ、

大計、タケホト也、

肘木 下ハ、大計、ハ、三分一、タケ、二分マシ、

マキト 長サ、大計ノ、戸尻、ホト、幅、シキメン、一

ツ、セマシ、此外ノ、割、大計ニ同ク

桁 セイ、柱ホト、下ハ、マキトノ、幅ホト也、

ウ櫓 セイ、外トハ柱ホト、内ハ、間ニテ、九分、下ハ、

桁ト同、

化粧棟 一尺七寸、計ニシテ、桶ノ、アトヲ、サ

ス、カエル、マタ、梁ノ、内ノ、方ニ有リ、同上ニ、大戸有、

柱ホト、也、割、常ノ、トヲリ、

檼 フトサ、柱メン内、三ツ割、一分、タケ式分マシ、鼻

ニ式分マシ

枅 幅、タルキ、メン内、タケハ、タルキノ、セイ、半分、

木負 下ハ、タルキ、下ハ、一ツ半、タケハ、タルキノ、

セイト、下ハト、合ル

萱負 セイ、タルキノ、セイヲ、目返シ、下ハ、木負ト、

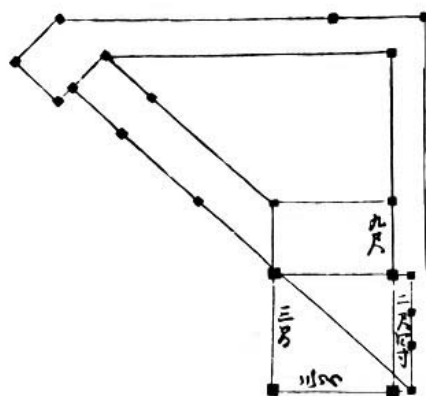
同事、反リハ、カヤヲイ、半分、式歩ノマシ、出テ、外トト

ツラマテ、五尺八寸

裏行 アツ、カヤヲイ、半分、出テカヤヲイノ、タケ、ホト、

外也 同 該当図なし

舞臺 匠明 昔ハ泉殿ト云リ。



税貫

大計 大斗 (だいと)

計斗 (ます)

マキト 卷斗

櫓 はり、うつぱり、またむね

カエルマタ 墓股

檼 垂木

大戸 大斗 (だいと)

破風 立チハ、片タ、ヤ子、三ツ半ニ、割、軒口ヨリ、一分入テ、ハフ、内ツラニ定、幅、下止、十分一、上三分マシ、脇座^{カウラン}、高サ、一尺六寸也、是ヲ、七ツ半ニ、割也、ホコ木ノ、反リ木、半分、地フク、ノ鼻ハ、幅ヲ、マハシ、外トカトヨリ、三寸勾配サヨコテヲ、引上ケ、ホコト、平桁ノ、長サニ定、ツカ木ノ、大サ、地フクヨリ、出、常之通、数ハ、三間之所、三間ニ割、升、常之通、縁ノ広、式尺四寸也

橋掛

一間半ノ間ヘ角ヨリ角ヘ取付、幅ハ、底ノ間ノ、柱ニ取付、筋違ハ、脇座かうらんノ、角ヘ、引通シ、幅ニ用、長、四間半也、此内ニ、三寸六分ノ、フチ、コロハシ、有リ、柱、大サ、四寸式分、肘木、大サ、柱、片メン、ヲトシ四方、桁ノ下ハ、柱メン内、タケハ、柱ホト也、タルキノ、フトサ、下ハ、メン内、半分、タケ、式分マシ、梶、幅、タルキ、下ハ、メン内、タケハ、タケ、半分、カヤヲイノ、セイハ、タルキ、ウラノ、目、ウラカハ、カヤヲイ、半分、出ハ、タケホト、ハシノ、カウラン、高サ、一尺八寸、ホコ木ノ、フトサ、柱、半分、立リ、ツカハ、ホコ木、一本半

翁ナライト云事 役者三人ノ内中本也 キヤウケンニ残テハヤス四座ノ者橋掛リニ屋根ナシ 本ノ松 中ノ松 末ノマツト云 末ノ松ヲ要ノ松共云 越ト云事有リ 幕ノ切ニモ 天井ナシ カメイケ申事 カルメルト云事有 所ニヨリ生サルモ有 尤マロカシテモフク也

役者ハ底ノ内ニ居ル 切戸有リタ、リナリ

鞆懸 蹴鞆之事

想、広サ、三丈六尺、四方也、是ヲ、七間ニ、割也、柱ノ、大サ、四寸二分、椽ノ、幅、三寸六分ニ、アツ、一寸二分、笠木ノ、アツ、式寸二分、幅、四寸五分、上ニ小返リ有リ、水、椽ノ、高サ、地ヨリ、四寸五分、上テ入、内ノリ、椽ノ、間、五尺五寸四分、一寸一分ノ、もの立テニ七本打、内ノリヨリ、ヒスキノ、間、一寸一分、ノ物、拾式本、横ニ打、ヒスキ、ヨリカサ木ノ間、一寸八分ノ、物立ニ、六本打、合、高サ、一丈五尺也、四本掛ハ、一丈八尺、四方也、植木ノ、高、一丈五尺、計、北東ノ間、桜、東南ノ間、柳、南西ノ間、楓、西北ノ間、松、地ヨリ六尺計下ニ、枝ナキヲ、ウユル、口ノ明所、北ノ方、西ヨリ三間目、南ノ方、東ヨリ三間目也

庭ノ内七間間中四方ナリ 懸ノ内ハ式丈三尺 相生ノ松ハ、乾ノ惣ナレハ、楓ノ木ハ、ヒ坤ナリ 青柳ハ、タ、巽ニ立ル物ナレハ、桜ノモトハ、ウ、艮ソカシ 鞆竿長一丈五尺也五寸竹節ヲ削

厩

柱 四寸式分、高サ、石口ヨリ、草ノ間、シキ板、上ハマテ、

脇座ニ地謡座
カウランニ高欄

ホコ木ニ架木

地フクニ地覆

ホコニ架

ツカ木ニ束木

橋掛ニはしがかり、橋懸。

タ、リニ榑束（たたらづか）、高欄の束

鞆懸ニ蹴鞆

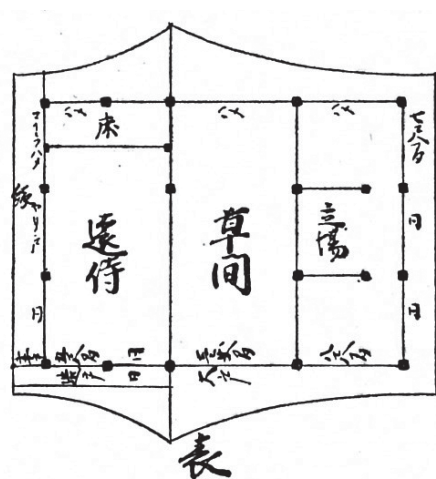
想ニ総（想広サニ総広さ）

椽ニ貫

内ノリニ内法

ウユルニ植える

厩ニ左図『匠明』厩之図



草ノ間ニ立場と遠侍の間の板の間

八寸也、是ヨリ、等[※]侍、長押下マテ、八寸八分ノ、馬舟、入ヤウニ、シテ、長押、三寸六分、シキイ、二寸四分也、^{五尺八寸也}内ノ^{五尺八寸也}ノ^{五尺八寸也}ノ^{五尺八寸也}ノ^{五尺八寸也}ニシテ、カモイ、一寸八分也、^{三寸六分}長押又、有此上ハ、ヨリ、肘木ヲ、桁下ハ、マテ立ル也、尤、右ノ内ニ、ヒシキ有

梁行 等[※]侍、六尺五寸、間、式間也、草ノ間、同、式間、スサリノ間、或ハ、立ノ間、トモ^云九尺也、桁行ハ、三間、五間七間何茂、七尺間

繫^{ツナキ}柱 七寸四方ニシテ、拾メシ、或、見一面八寸ニ、見込、七寸四分ニモ、

押^エ柱 五寸六分、四方、或、四寸式分、ツナキ、柱ヨリ、内ノリ、五尺式寸ニ、立ル

肘木 下ハ、柱、片^タメン、タケ、柱ホト也、長サハ、一小マ目ノ、タルキノ、外^トノ、メン内ヲ、キルナ^上上^{三ツ半}ニシテ一分、桁 下^タハ、三寸四分、タケ、四寸式分

小^櫓 下ハ、柱、一本半、下ハ、柱ホト也、袖切ノ、所ニテ、メン内ニ、仕合ル、下モハ、桁ニカミ合テ、直水也、草ノ間ニモ、一本有リ

大^梁 下ハ、柱、柱式本ニテ、作り合ル、高サ、タルキ、勾倍ニテ、究ル也

タ^檼 下ハ、柱メン、内、式ツ割、タケ、二分マシ、鼻ニモマシ有、常ノ通、勾倍、上ハ、七寸式分、或ハ、九寸、次ハ、四寸五分、或、五寸五分、馬ヤノ上ハ、式寸五分、或ハ三寸、軒ハ、式寸五分、或二寸八分、同、長サ、表五尺式寸、但桁中墨ヨリカヤワイ外^トツラマテ、亦後ハ、

尻^{式尺五寸カ}ヲ、披テカヤワイノ、内ツラヲ、フム、ソハノキノ、長、ワキセウシノ、内ニ、[※]シリ戸、ヲ入ルト申也、其ヨリ、一小マ目、出テ、ハフ也

萱^負 下ハ、柱、柱^片メンヲトシ、下ハ、メン内ナリ、

裏^行 アツ、タルキノ、下ハホト、出^テカヤワイ、ノタケホト、

コ^相 下ハ、タルキノ、タケ、半分也、下ハ、タルキノ、メン内也、歩

破^風 大サ、腰ニテ、柱式本也、上ニ、三分マシ、

葺^地 アツ、タルキ、折廻シ、裏ノ目ニテ、上ニマシ、式分、引渡、三分タルミ

指[※]首 ツカノ、大サ、表八寸ニシテ、アツ、桁、半部、或、長押ノ、セイ、式ツニモ、サスハ^ハ、四寸也、勾倍^ハ八寸也、

大^計 大サ、柱、式本、或、戸尻、八寸ニシテ、高サ、是ヲ、以可^レ簡也

敷^居 下ハ、式寸四分、高サ在前、

鴨[※]柄 アツ、一寸八分、高サ在前、

長^押 幅、三寸六分、ム子、一寸式分、地ト、内ノリハ、高サ、在前、草ノマ、連子ノ、上ハ、内ノリ、ナケシヨリ、柱、式本、ハサム也、亦、天井、長押ノ、高サ、小梁ニ、メン、一ツ、カ、リテ、上ハ也、但、等侍ニ、一ケン、草ノマニ、一ケン有也、

天^井 高サ、カフト、桁ノ上ハニ、板ヲ打、草ノマ、式ケンハ、カ、ミ、板、等侍ハ、サルヲノ、フチ也、柱メン内、二ツ割、

等侍ニ遠侍

スサリノ間、立の間ニ立場(たてば)、

馬を繋いでおく空間。

シリ戸ニ厩の、馬の尻の方(後方)に

ある戸

指首ニサス、扱首

鴨柄ニ鴨居

込板 等待ノ北式ケン、内ノリノ分ニ、立サン、式本ツ、有、大サ、柱、メン内、ニシテ、メン有

敷板 草ノ間ノ、高サ、石口ヨリ、上ハマテ、八寸也、スサリノマニテ、アトノ方、一寸ノ、水タレ有、尤、ガンキ也、等待ノ、高サ在前

大戸口 方立、大サ、四寸二分、四方ニシテ、小壁、四寸、明テ、立ル、尤、戸寄ノ、サクリ、有、カマチホト也、或ハ方立ヨリ内ノ方エニカシテモロノ、

明所、草ノマノ内、等待ノ、方也、カモイノ高サ、内ノリ、六尺三寸也、但シキイナシ、カモイノ、タケ、八寸、アトエノハシテ、尻戸ノ、梲ノ、ハナ、コ子ニ、して、待スル、戸

アト、一ケンハ、ハメ也、ト胴ブチ、大サ、柱、半分ニシテ、フリ分ヨリ下ニ、四本、打、上ニ、式本、中共ニ合、七本也、上、カモイト、同フチノ、明、同、木、一本、下ハシキイニサンノル、

扉仕ヤウ、右ニ同、戸カマチ、アツハ、目返シ也、同上ノ、連子 下モハ、カモイノ、上ハ也、上ハナケシノ、下タマテ也、カウシ、ブチ、ミセヲモテ、柱、式ツ

割ニシテ、キチヤウメン有、レンジ、カス、拾七也、明ト、同幅也、草ノ間、式ケンノ分也、タツワ轡掛稅 高サ、上ハマテ、七尺式寸也、アツ、式寸式分、

幅、六寸、或、五寸六分ニモ、鼻ノ長サ、八寸八分ニシテ、エヤウ、有リ

薬稅 高サ、カフト、桁ノ下ハト、クツワ、カケ上ハト、フリ分ヲ、上ハニシテ入ル、幅、六寸、アツ式寸式分、或、六寸四分ニ、式寸四分トモ、
カ甲桁 タケ七寸、下ハ、ツナキ、柱ニメン一ツ、宛

両へ出ル、高サ、ケサノマ、ウツハリ、上ハト、カミ合也、但、中ノ間二間ノ長押上ハト、メン一ツ、タカシ、

腹[※]ラ掛稅 タケ、柱、一本、下ハ、メン内也、ツナギ維柱、中スミヨリ、ハラカケノ、ツラマテ、一尺八寸也、クツワカケニ、メン一ツ、シカケテ、取付ル也、

申[※]耳 寢テモ、八寸、起テモ、八寸也、アツ、タルキ、ホトニシテ、式ツノ、アイ一尺八寸ナリ、

衣懸[※] タケ、四寸八分、或、五寸六分ニモ、アツ、三寸六分也、同土居、同寸也、※イタラ貝、幅、三寸二分宛、ニシテ、数、九ツ宛、明、式寸式分宛、或、三寸八分宛

ニ、シテ明、一寸八分、ヨリ大ニ、不^レ明、衣掛ノ、高サ、上ハマテ三尺六寸也、
下[※]タノト鉄 高、一尺八寸、上テ、横ニ打、大サ、輪ノ内ニテ、一寸八分、有リ

上[※]ノト鉄 高サ、四尺八寸也、立ニ打、大サ、同断折釘 高サ、五尺八寸、又ハ、クツワ、カケヨリ、八寸下テモ、可打也、

尻[※]リ戸 方立ノ、幅、七寸ニ、アツ、柱、三ツ割、戸カマチ、幅柱、半分、アツ、目返シ也、戸、幅、外^トノリ、式尺七寸五分也、

サン、五本也、高サハ、大戸、カモイヨリ、一寸八分、下テ、梲ヲ入ル也、但、下ハ也、是則、マクサニ、用ル也、同上ノ、連子、カス、拾八本宛也、仕ヤウ前ニ同、

脇障子 柱ノ、大サ、片メン、ヲトシ、高サハ、竹ノ節ヲ、フサ、ホト、長押ニ、カケテ、※カフキ、ヲ入ル也、カフキノ、大サ、アツ、柱、メン内、広サ、メン一ツ宛、出ル、鼻ノ、

腹掛稅 腹掛桁

申耳 Ⅱさるみみ、馬の腹帯を掛けるのに用いる

衣懸 Ⅱきぬかけ、馬を入れておく立場境に渡してある水平材、下は羽目。

イタラ貝 Ⅱ板屋貝か

トチ鉄 Ⅱ椽金（とちかね）、馬を繋いで

おく鉄の輪

尻戸 Ⅱしりど、厩の後方の壁にある開

口部にある戸

カフキ Ⅱ冠木

長サ、其柱ヲ、目返シ也、ドウノ大サ、柱メン内、四方也、是ヲ、三ツニ割、一分ヲ、式ツ宛ニシテ、フシ也、フサハ、ドウニテ、七分半也、同、上ノ柱ハ、フサノカシラニテ、メン内也、上ハ、タルキ、下ハホト也、同、ワキ戸ハ、幅一尺計也、披テ、柱ノ、メンニ合也、但式枚也、ハシハミハ、一寸八分宛、カモイノアツ、式寸四分也、柱中スミハ、三尺一寸五分也、

落縁 高サヲモ、ヨリ、半長押、下ル、カツラ桁、ハ、

長押ホト也、板ノ、アツ、九分、

馬立 梁行、中スミ、六尺五寸、高サ、カサ木、上ハマテ、六尺八寸、桁行、六尺五寸也、但、中スミ也、梁行ノ跡ニ、柱式本宛、立ル、此、高サ、加左木、上ハマテ、三尺六寸也、スソ場 梁行、八尺、桁行、一丈、高サ、前三テ、八尺也、後ハ、勾倍ニテ究ル、

養生場 ツ繋柱間ヒ中スミ、六尺五寸也、高サ、笠木上ハマテ、六尺八寸也、前柱マテノキ、一尺五寸、スサル、同、跡柱、マテ、三尺式寸五分、但、中スミ也、同、左右ノ、ヒラキ、内ノリ、一尺八寸也、同、高サ、梁行カサキ上ハマテ、四尺八寸也、桁行、税ノ、高サ、式尺四寸也、桁行ノ中ニ、ムナキ、有リ

馬舟 長サ、一尺八寸、横、一尺三寸、高サ、八寸也、板ノアツ、九分宛、両方ニ、取テ、有

馬手木 長サ、一尺四寸三分、大サ、コシニテ、一寸六分、

馬櫛 長、四寸八分、幅、三寸二分、齒、八枚也、

同爪打刀 長、三寸九分、広サ、式寸五分、外柄、有、同ツ鎚 想、長、九寸、打、カシラ、サシ渡、式寸五分、竹ノ、フシ、六分、フシヨリ、下、六寸五分、同大サ、一寸式分四方、ノ丸也

四帖半台数寄屋

柱 丸也、大サ、指渡、式寸九分也、吉野杉、赤松、皮付、ナクリキ、栗、榎、何ニテモ、皮付ヲ、用ル、高サ、石口ヨリ、地シキイマテ、一尺七寸也、軒ノ桁、上ハマテ、五尺五寸也、天井ノ、高サ、六尺式寸也、但、廻リ縁下ハマテ也、此所ニ、ヲトシカケ入、天井持ル、

床 長、四尺也、或、四尺式分ニモ、横、式尺四寸也、但、タハミノ寸也、

同カマチ タケ、式寸六分、アツ、一寸五分六リン、寄シキイノ、チリ、五分半也、

ヲ落懸ケ 下ハ、式寸五分、タケ、一寸五分也、高サ、地シキイノ、上ハヨリ、ヲトシカケ、下ハマテ、五尺一寸三分也、釣、舟、掛ノ、折釘、有、ロイ

同天井 高サ、ヲモノ、地シキイ、上ヨリ、タイワ、下マテ、七尺四寸ナ也、台輪一寸三分ノアツ也、懸物、カケノ、釘、有、竹也、ロイ、花生カケノ、折釘床ノ、地シキイヨリ、三尺式寸五分、上テ打

床脇ニ一枚障子 柱、内ノリ、五尺一寸六分、或

馬立 馬繋ぎ

カサ木 笠木

加左木 笠木

スソ場 ？

馬舟 ？うまぶね、まぐさを入れる桶

馬手木 ？

馬櫛 ？うまぐし、馬の毛をすく櫛

四帖半台数寄屋 四疊半台目茶室か？

数寄屋 茶室、囲（かこい）

ナクリキ 栗（榎）の木を手斧ではつたもの。

釣舟 舟の形を呈した花入れ。

ロイ 口伝

タイワ 台輪

五尺一寸四分

十一寸四分三モ、カモイ内ノリ、五尺三寸也、カモイノ、アツ、

一寸一分、幅、柱、ツラヨリ、一分半宛ノチリ有リ、シキイ、

樋ノ、ホリヤウ、前ノ、畔、七分半、ヒ、六分、シマ、式分半、亦、

ヒ、六分、先ノ、畔、七分半也、同、セウシノ事、カマチ、

ク、ミヌリサン、共ニ、見表、五分、見込、五分六リン、也、

但、上セウシノ、カツテノ方ニシテ、シ合ハ、式分、見込

ヲ、ヒロクスル、クミコハ、ミセヲモテ、三分也、ミコミ

同前、ヨコハ三ケンツ、立ハ拾三ケン也、

亭主口 方立内ノリ、式尺也、同見表九分、見込式寸

式分ニシテ、南ノ方ニ、有、則、立付也、小壁、有リ、カ

モイ内ノリ、五尺式寸五分也、カモイアツ、九分也、方

立ニ、カツカ□□也、アツホト、角、カラ出ル也、同障子、

仕ヤウ二枚、セウシニ、同

台面 タ、ミノ、長サ、四尺七寸二分半也、ヨコ、三尺

一寸五分也、中柱ノ、地シキイ、カキ、有リ、幅、式寸式分、

長、一尺五寸七分半也、アツ、一寸七分、

曲柱 大サ、式寸一式分、ユカミニ、ロイ、横木ノ、高、

地シキイヨリ、内ノリ、式尺式寸也、ヨコ木、アツ九分、ハ、

式寸式分也、袋掛ノ、釘ハ、ヨコ木、上ハ、ヨリ、折釘、下ハ、

迄、式寸七分、上ル也、打ヤウニ、ロイ、但、ヨコ木ヨリ、

袋少見ル也、柱ヨリ東ノ方エ袋三ヶ一ミエルヤウニシテ穴ニ

※ニシリ上リ

カモイ、内ノリ、式尺式寸也、ヨコ、内ノリ式尺、刻、シ

キイニシテ、壁ヨリ外ニ、戸有リ、カマチ、ミセ面九分半、

サン、裁本、同、大サ也、見込カヤサハ六分半、外トヨリニ、

アツ六分

板打、カクル、アツ式分半、板、ハ、式枚半也、立付ニ、

半幅物、有リ

刀掛 長、三尺一寸五分、幅、一尺五分、高地シキイ、上ハ、

ヨリ、下棚ノ、下ハマテ、三尺式寸也、タナノ、小アイ、七

寸也、何モ、カマチハ、六分ニ、七分也、子ハ五分ニ、六分也、

上棚、三間ニシテ、アト先ニ、角、カラ、ナシ、下、ナハ、式

ケン也、木ニテ、ツル也、カマチ、スキ共ニ、立ニ、木ヲツカ

ウ也上ハ五分ニ高サ六分ト云事也

軒桁 高サ、ヲモノ、地シキイヨリ、上ハマテ四尺八

寸也

猿戸 口、幅、式尺三寸也、高サ、ニジリ上リ、ハサミ、

カモイ上ハヨリ、九寸五分半、上テ、サル戸カモイノ、下

ハニ用、戸カマチノ長サ、カモイ下ハヨリ、五寸四分半、

下ル、下モハ、踏石ヨリ、式寸七分アキ、サル戸ノ、長サ也、

竹長サ、同寸、カス五本也、税ハ、一寸六分、下テ、上ハニ用、

下モ、一寸五分、上テ、税下ハニ用、税カス、四通、ハ、

九分、アツ、四分八厘也、板、敷、四枚、但、上ハ、竹鼻ヨリ、

四寸九分ノ、アキ、下モハ、竹鼻マテ、四寸四分ニテ、腰板、

打留ル也、押縁ノ、竹四通也、

右、在所ハ、ハ、キカケノ、柱、ヨリ、西ノ方ニ、有リ、

此ワキハ、皆、高サ、三尺ノ、壁ニシテ、上、竹簾、ナトニテ、

用ル也

同所 ツキ上ケ タルキ、一小間半也、半ノ方ハ

刀掛ノ方ニテ也、木舞、五本、切祓也、ヤ子ウラ、ツキ上

ケ、タイメノ、ワキ上ケ、共ニ、マト、長、一尺九寸八分ニ、

樋(ヒ) 敷居または鴨居の溝。

畔 敷居または鴨居の溝と溝の間にあ
る仕切り。

角カラ 角柄(つのがら)、出入口の枠

の隅部分で方立または下枠より外に

出た部分

台面 台目畳

曲柱 中柱

袋掛 中柱に打付ける袋釘。

ニシリ上リ 躰口(にじりぐち)

猿戸 ざらど、露地の入口に設ける簡

単な作りの木戸。

税 貫

ツキ上ケ 突上げ窓

幅一尺七寸七分、也 何モ、寛、内ノリ也、木マイハ、三本ツ、切スク也、

櫛形^{※クシ} カモイ、内ノリ、三尺八寸、広サ、一尺九寸也 塗立、土留ハ、高、三尺五寸也、フスマ有リ

床[※]ノ内窓^{マト} マト、上ハト、ヲトシカケノ、下ハト、合也、高サ、一尺七寸、横、一尺三寸ノ下地マト也、外トヨリ、立式尺^マ式寸^下五分^{塗立ノ寸也} ヨコ一尺七寸五分、カケ、セウシ也、立、打子共ニ、三本、横、同、七本也、尤窓ハヲトシカケノ方ヘヨル也

同^{南ノ}脇竹隔子窓[※] シキイノ、高、上ハマテ、式尺六寸也、アツ、九分、カモイ、内ノリ、ク、リノ、上ノ、マ

トカモイト、合也、アツ、九分、横、内ノリ、式尺三寸七分也、シキイカモイ共ニ、アトヘ通ル、竹カス、五本、セウシ、三ケンニ、立、六ケン也、中柱ノ、方立付也、則是ニ、窓トリ付也、中棧、一本、

ニシ^シリ^リ上^上リ^リノ^ノ窓^窓ノ^ノ事^事 シキイノ、高サ、上ハマテ、式尺式寸九分、カモイ、内ノリ、式尺九寸也、横、幅、方立、内ノリ、三尺一寸式分、連子竹、七本、スキ、一本、セウシ、ヨコ、四ケン、立エ、八ケン、東ノ、角柱、立付也

軒下地窓[※] シキイノ、上ハマテ、一尺九寸六分、横、方立内ノリ、式尺式寸四分也、中柱ニ、一寸式分ノ、塗込ヲ、打カモイ内ノリ、一尺六寸四分、ツリ竹、中柱、ツラヨリ、四尺一寸式分、竹ノ外トツラマテ也、セウシ、ヨコ、三ケン、立エ、五ケン也

同[※]竹隔子窓[※] シキイノ、高、右ニ同、カモイ内ノリ、式尺一寸七分、ヨコ、方立内ノリ、三尺式寸也、中柱、立

付也、セウシ、ヨコ、四ケン、立、六ケン也、竹カス、六本也、^{スキナシ}

風呂先下地窓[※] シキイノ、高上ハマテ、七寸八分、^{一寸余スリ出ス}上ハカモイトスリ出ト全^{スリ立ノ寸也} カモイ、内ノリ、一尺八寸八分、横、幅、一尺五寸四分、角柱

ヨリ、式尺六寸八分、塗廻ノ方ヘ、サシテ、ツリ竹ノ、中スミ也、則、立付也、セウシ、ヨコ、式ケンニ、立、四ケン也、

台面ノ下地窓[※] シキイノ高、上ハマテ、一尺式寸五分也、小ワキ、角柱ヨリ、一尺六寸三分、^{東ノ}藁方ニテ、ツリ竹有、但竹ノ、外トツラ也、ヨコハ、一尺八寸也、ツリシキイ也、セウシ、ヨコ、三ケンニ、立五ケン也、

通有三帖台面窓ノ事^{キタ} 地敷居窓[※] タイメ比ノ方ニ有也、カモイ、内ノリ、式尺一寸六分、小ワキ一尺六寸六分、東ノ方ニ有、横、幅、一尺八寸也、但下地窓也

同上ノ竹隔子窓[※] カモイ、内ノリ、一尺七寸五分、横、幅、方立、内ノリ、式尺七寸八分也、^ルシキイハ下ノカモイヲ用ル^{窓ハ東ノ柱ニ立付也}

窓敷居樋ノ事[※] 前ノ畔、四分、樋、六分、シマ、三分、或、式分半、先ノ畔、七分、シキイ、アツ、凡、九分、同[※]下地窓ハ 前ノ畔、三分、樋、六分、先ノ畔、七分、シキイノ、アツ、凡、九分、亭主口、通口ノ、シキイ、右同断

窓障子 カマチ、見面、四分ニ、見込、四分八厘、ク、ミハ、見面、四分、ミコミ、四分八厘、[※]スリサン、ハミセ面、三

櫛形ノ壁を櫛形に穿った出入口。
床ノ内窓ノ墨蹟窓のことか。

隔子窓ノ格子窓、連子窓
連子ノ連子子（れんじこ）

三帖台面ノ三畳台目
タイメノ台目畳の部分、点前座

隔子ノ格子
樋ノ敷居または鴨居の溝。

下地窓ノ土壁の一部を塗り残して壁下
地を現したもの。

スリサンノ摺棧（するさん）、下棧

飛石ノ、高サ、四寸計、

石鉢ノ、高サ、四尺五寸カ、式尺五寸也、前石ヨリノノキ、
式尺五寸カ、手水式尺三寸カ、

行^{アン}燈、ダイノ高サ、一寸四分、広サハ、サヤヨリ、三分計、

程、宛、ヒロシ、サヤ、八寸四方、上ニテ、スバリ、下ノ内エ、

入ヤウニ、スヘシ、同、高サ八寸也、柱、三分半、四方、

板ノアツ、三分、竹、取手、広サ、八分、高サ、サヤヨリ、

式分、高^シ

燈^イ台、柱、上ニテ、六分四方、下ニテ、七分四方、サ宗[※]、高サ、

一尺式寸也、

台、見全、

ゲタ、七寸一分半、幅、三寸、或三寸式分ニモ、アツ九分、

齒ノ、カギ、長^ケ三ケ一、スタリ、五分、穴、三分四方、

チリトリ塵取枯

薄板 長一尺三寸四分 横九寸四分 アツ 式分半計ニシテ

メン 上下角ニモ 皆丸クトル也 置ヤウ タ、ミノ目 拾

七 或ハ 小板ハ拾九 廿一ホト云トモ 外ニ口傳有リ

鷹部屋

表、六尺五寸、或、七尺、梁行、八尺、庇ノ間、五尺、

高サ、軒ノ桁ニテ、七尺、但、中スミ、上ハ、究也、土台、

厚サ、四寸式分、柱、同ク、※ホコ木ノ、高サ、三尺五寸也、

同、大サ、指渡、一寸三分、内ノ方、四方、板、サクミ、

同板、丸メテ、打、後ニ、水^イ舟、サシ、有、前ニ、※エサシ、

窓、ノソキ、窓、戸前ノ内ニモ、一寸四方、計ノ、窓、有リ、

屋根ニ、嵐、窓、有

大[※]鷹[※]台、ホ[※]コノ 高サ、四尺二寸、長サ、五尺八寸、柱、

内ノリ、四尺也、同、ホコ木、共、大サ、一寸八分也、土居ノ、

長、式尺五寸

小[※]鷹[※]台、ホ[※]コ 長サ、三尺三寸、長サ、四尺三寸、或三尺三寸ニモ両、

ハナヨリ、五寸五分、宛入テ、柱、中墨ニ、用、木大サ、指渡、

一寸三分、土居、長、式尺三寸、下ノ、桁モ、ホコト、同

長ケ也、或書二一尺式寸ノ高サ計テカ子ヲツカフヘシト云々

一[※]具足櫃 前一尺五寸 脇一尺三寸八分 タケ一尺五寸

大方 何モ内ノリ也 猶 長ニ可計

一 碁盤 幅一尺四寸 長一尺四寸八分 厚サ三寸六分或

八分ニモ 足ノ高サ三寸六分 同大サ式寸七分 クリ

ハ大サ三ケ一 高サハ 五ツニシテ 上式ツ 中一ツ

下式ツ

一[※]中将碁ノバン 幅一尺四寸 長サ拾式間ニシテ 一目

長クスル 厚式寸式分 アシ大サ一寸八分 高サ二寸

宗高サニ惣高さ

鷹部屋

ホコ木ニ架木（ほこぎ）、鷹のとまり木

エサシニ餌指

台ホコニ台槩（だいほこ）

具足櫃ニ道具匣（はこ）

中将ニ中将碁、中将碁ハン、将棋盤の一。

八分

※小將碁ハン幅一尺貳寸長九間ニシテ一目長クア

ツ一寸八分 アシ 高サ二寸六分 大サ一寸六分

双六盤 長一尺三寸 幅九寸六分 高サ女中八八寸 男
八六寸四分也

鶴ノ板ノ事 長三尺五寸 広サ貳尺貳寸 厚三寸貳分
足ノ高サ三寸五分 広サ同寸 アツ二寸二分 付所一
ツ宛入テ付

白鳥ノ板ノ事 長三寸三寸 広サ貳尺 アツ貳寸八分
 足ノ高サ三寸貳分 広同寸 アツ一寸九分 足ノ付所
 右ノトヲリ

鯉ノ板ノ事 長三尺貳寸 広サ一尺八寸 厚貳寸八分
足ノ高サ三寸貳分 広サ同寸 厚一寸八分 付所右同
断

中ノ板 長三尺五分 広サ一尺七寸六分 厚式寸三分
足ノ高サ三寸 同広サ同寸 アツ一寸七分 付所 右同
断

下ノ板 長二尺 幅一尺七分 厚一寸八分 足ノ高サ
二寸二分 同広サ一寸八分 厚一寸三分 付所 右同斷
中ノ板ニ又 長二尺六寸一分 幅一尺三寸 厚二寸一
分 足ノ高サ寸六分 同幅二寸四分 アツ一寸三分 付
所 右同斷

庖丁之柄長四寸二分

一マナハシ※長上一尺一寸中一尺六分下一尺四分

一 衣桁ノ事 高サ四尺八寸ニシテ 間ハ足ノ内ノリ四尺
八寸 柱ノ大サ 一寸三分ノ丸 反半 本中※ 梘ノ大サ七
分ニ一寸一分ノ角 大□□有リ 地フク一寸三分ニ

式寸式分 ハナノ出 ハ、ホト 足一尺八寸ニ四寸三分四方也 カサ木ノ出 七寸五分 大方也 猶 長計可用也

一 手拭カケ 高サ一尺七寸或一尺四五寸 横一柱中スミ一尺七寸柱内ノリ一尺四五寸 中梔フ
リ分ヨリ下 柱ノ大サ六分半 カサ木ノ出 三寸ソリ式寸二分反半分也
四分カソエアシ七寸ニ高一横式寸宛式寸二分

一 見台 柱ノ長一尺一寸 大サ八分四方 足ノ高サ貳寸
八分 長七寸八寸 板ノ長一尺貳寸 横九寸 勾倍 九
寸 ハシハミ九分 アツ五分

一 御煎茶三拾斤入 長貳尺三寸 横一尺貳寸五分 高二尺六寸四分内ノリ也

一 同 式拾五斤入 長一尺九寸五分 横一尺一寸五分 高
一 同 式拾斤入 長一尺九寸 横一尺一寸 高一尺四寸三分

半内ノリ
一尺八寸五分一尺一寸五分一尺五分七リ
一 同 拾五斤入 長壹尺八寸 横二尺 高一尺二寸五分内
ノリ也

ノリ也

尺八寸一尺高八寸三分三厘	横九寸	高九寸七分半内ノリ
同 拾斤入 長一尺七寸	横八寸	高五寸八分
尺七寸八寸五分五分二分	同 五斤入 長一尺六寸	

一 同 五斤入長一尺六寸 橫八寸 高五寸八分

小將ニ小將棋、小將碁ハン、將棋盤ノ一。

マナハシ＝真魚箸、魚や鳥を料理する

時に使う箸。

衣桁||着物などをかけて置く家具。

稅
||
貫

見台＝書見台の略、書物をのせて読むための台。

一	御モミカミ 百束入 長貳尺六寸五分 横一尺四寸五分 高サ一尺五寸五分	一	納計舛 長横一尺一寸二分 高サ六寸 法七五貳六四
一	ツ□ワタ五拾把入 長貳尺七寸五分 横一尺六寸 高サ貳尺五分	一	同一舛入 長横五寸二分 高サ貳寸六分
一	御文箱 長七寸七分 横一尺六寸 高サ貳尺五分	一	同一合舛 長横二寸二分 高一寸四分五厘二毛 貳七
一	御机 長三尺貳寸五分 但筆返シノ分貳寸也 高サ八寸 貳分疊摺より板上はまで 板ノ幅壹尺貳寸六分 板ノアツ八分	一	扶持舛 一舛入 長横五寸一分 高サ貳寸五分
一		一	同貳合五勺舛 長横三寸貳分 高サ一寸六分
一		一	京計舛 長横一尺五分 高サ五寸八分八厘
一		一	同一舛入 長横四寸九分 高サ貳寸七分
一		一	京五合舛 長横三寸八分九リン九毛 高二寸一分四リン三毛
一		一	貳合五勺舛 長横三寸八リン七毛 高サ一寸七分一毛
一		一	同一合舛 長横貳寸一分 高一寸四分七リン
一		一	九角八寸四 勾倍 カウハイノ方ヲ引
一		一	七角八寸 勾倍 立水ノ方引
一		一	六角六寸 勾倍 同断
一	白鳥一羽入 長貳尺三寸 横九寸五分 高サ六寸五分	一	五角三寸二分 勾倍 同断
一	黒鶴一羽入 長一尺九寸 横八寸 高五寸五分	一	三角六寸 勾倍 同断
一	鴨貳拾羽入 長貳尺三寸 横一尺五分 高一尺	一	八角 裏目返シ
一	同六羽入 長一尺三寸八分 横九寸 高四寸五分	一	六角或其木ニツニ分 片中墨 其木ノ広サヲ片中スミニ合ヤウニシテヨコテヲ引
一	串鮑百ク入 長一尺七寸 横九寸 高七寸	一	
一	十六嶋海苔五羽入 長一尺五寸 横六寸 高サ五寸五分	一	
一	御道中関札 長貳尺三寸 幅七寸 アツ七分 桧ニ而六十六枚入ル也	一	産屋ノ事 天井ニ子安之綱ノ鉄打也 文有リ 鉄ニ付緒ノ先ニツニ分テ書文有リ

鉄ニ付緒ノ先ニツニ分テ書文有リ

産屋 座ノ下ニ袍衣ヲ納申様ニ道ヲ付ル 但敷板ヲ上ル
ヤウニスヘシ

背掛式ツ キヤウソクノコトシ 高八寸計ニシテ 大方
好ニ可任

寄掛一ツ 如常

枕三ツ 常ヨリ少大ニ

袍衣刀長八寸也 男子ハ女竹 女子ハ男竹
袍衣桶 高七寸ニ指渡六寸二分

町舛

一斗入 一尺七分七リ二毛 五寸三分八リ六毛

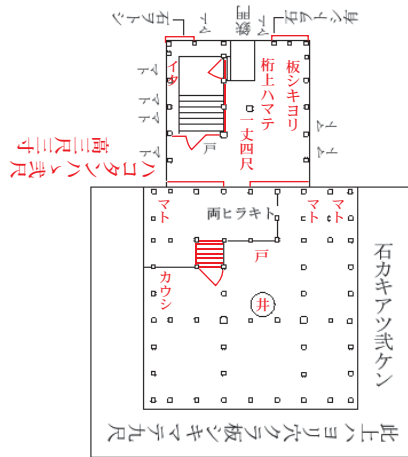
一舛入 五寸四方 式寸五分

五合入 三寸九分六リ 一寸九分八リ

一合入 式寸三分二リ 一寸一分六リ

御本丸中

一 天守之土台石垣高サ式丈五尺 内ニ井有リ 柱地ヨ
リ立同上ニテ広サ東西拾貳間南北拾間有リ 何モ六
尺四寸杖也 則重々図ニ印



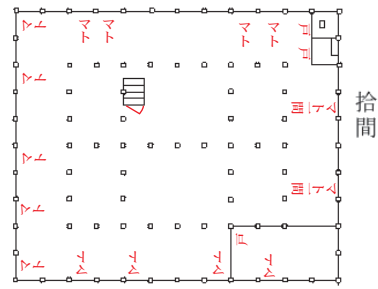
北

右御天守穴藏ノ内 (如カ) 斯出シ五間半四方取付右ノ
通鉄ノ門柱内ノリ六尺四寸也 蹴離マテ式尺余平地
ヨリ高シ

御本丸中 (付図『松江城城郭図』の付
番134)

本丸穴藏図の「井」ニ井戸
穴藏ニ天守地階

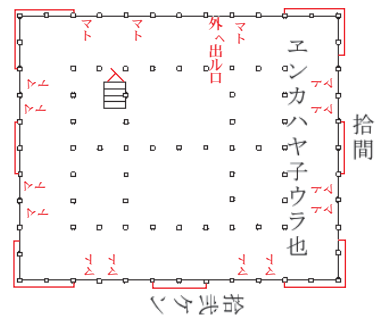
一重目也 石カキ上ハニ土台ヲ居 其上ニ敷板ヲ打也 是ヨリ二重目ノ板下マテ壹丈壹尺有リ 此桁上端通ニ腰屋根有リ



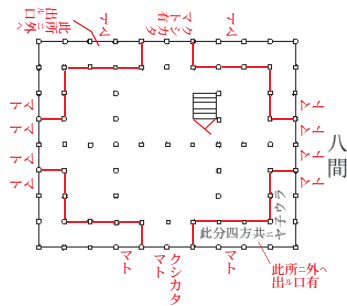
二重目也 西ニ破風有リ此板シキヨリ三重目ノ板下マテ壹丈壹尺三寸也 亦軒ニテ桁行端迄ハ壹丈貳寸有リ 此桁上ハ通り腰屋根ナリ

喜多

三重目也 西ニ破風在リ 四重目ノ板下マテ壹丈壹尺五寸有リ 東西ハ中八間 西ノ縁側八尺 東ノエシカハ七尺 全拾間貳尺余

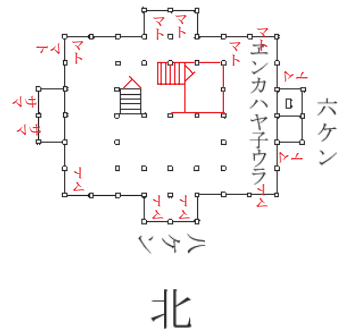


北

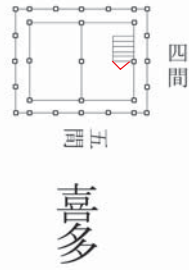


北

四重目也 南北ニ破風有リ 同下ハ貳坪宛対座也 西東ノ貳坪宛ハ一尺五寸宛下座也 内ノ六畳ハ二階也 五重目マテ惣板シキヨリ一丈五尺有リ



五重目滿也 立物側三ケンニ四ケン 外ニ間中宛四方ニエンカハアリ 惣遣戸ニシテカウランアリ 四方トモニ掛戸也 高サ貳尺一寸ニ中敷居入也 立物か己内外共ニ長押在り 内ノリ六尺エンカハカモイ同廻リシキイ上ヨリシキ桁上ハマテ一丈五寸有リ



凡 石垣上ヨリ棟瓦マテ拾貳間計 外石垣貳丈五尺ヲ間ニシテ三間五尺五寸 二口ノ平地ヨリ拾五間五尺余

(本1)

- 一 御天守ヨリ艮ノ角ニ在之瓦塀折共ニ本間四拾六間也 (本2)
- 一 同所東^{*}之出シ矢倉三間ニ六間也 上ノ重ハ貳間半ニ五間半也 (本3)
- 一 右之矢倉ヨリ南へ之太門貳間ニ拾三間 (本4)
- 一 同太門ヨリ南へ之太門三間ニ拾壱間也 但壱間ハ前之矢倉ニ取付在り 南ノ矢倉ニ壱間斗取付在り (本5)
- 一 同所辰巳ノ角矢倉五間ニ八間也 但北ノ太門取付之所ハ八間之内ニ壱間太門入 上之重ハ四間ニ六間也 志やちほこ有リ (本6)
- 一 同矢倉ヨリ西へ之太門三間ニ拾四間 内壱間ハ右之矢倉六間之内也 (本7)
- 一 同太門西南之角へ取付御門 三間ニ五間也 下ハ御門ニシテ 上ハ走リ也 (本8)
- 一 同御門ニ取付之角屋くら 三間ニ五間 上之重ハ貳間半ニ四間半 西ニ五尺ニ貳間之^{*}こけらひさし有 (本9)
- 一 同屋くら西へ取付之太門 貳間ニ拾貳間 下ハ石垣裏雪隠ニ成 内側西方ニ壱間四方ノこけらひさし有 東之方ニ壱間三間半ノこけらひさし有 貳尺四・五寸斗之うて木ニシテこけらひさし八間余有 (本10)
- 一 米申ノ角屋くら三間ニ五間也 上ノ重貳間半ニ四間半 (本11)
- 一 同矢倉北ニ取付之太門三間ニ拾六間貳尺斗 中東之

エンカハ縁側

立物か己建物側

文末の(本1)とは付図「松江城城郭図」に付した番号。以下、本史料に記されている施設ごとに文末に各々番号を付し、『松江城縄張図』と照合できるようにした。

東之出シ矢倉Ⅱ『御城内惣間敷』には祈禱櫓、「矢倉」は「櫓」のこと。

太門Ⅱ石垣の上の長屋、多門櫓、多門長屋

辰巳ノ角矢倉Ⅱ『御城内惣間敷』御武具櫓

志やちほこⅡ鯨走りⅡいわゆる「武者走り」と称される櫓内の廊下。

こけらひさしⅡこけら葺きの庇

米申↓未申

方へた己ミ有 (本12)

一 西ノ唐破風矢倉四間ニ五間 上之重ハ三間ニ四間

西ニ三尺式間ニシテ唐破風仕出シ有リ (本13)

一 同矢倉ヨリ北へ之太門式間半ニ拾四間也 但かきノ

手迄也 是を折太門ト云 (本14)

一 同取付之北ノ太門式間半 (ニ) 拾壹間分 但前之太

門ト取合ニ壹間ノ分也 (本15)

一 右ノ太門ヨリ北之太門三間ニ拾九間壹尺五寸 (本16)

一 同太門ノ先ノ太門ノ間ニ壹間ニ式尺六・七寸宛ノ廊

下有ふミたん也 (本17)

一 同太門ヨリ北ニ式間梁ニ四間半ノひつミ太門 棟東

西ニ立 (本18)

一 同先ニ廊下有リ 式間はり桁行西ニて四尺東ニて壹

間也 同東ノ方ニ壹間四方計之こけら庇有リ (本19)

一 乾ノ角箭倉 三間梁ニ五間 上之重ハ式間之小間ニ

四間半也 亥ノ角ヨリ巳ノ方ニ当テ棟立也 (本20)

一 同楼ヨリ東へノ廊架 式間はり桁行南ニて式間半北

ニて三間 (本21)

一 北行之太門 西之始ハ三間はりニ六間 南北ニ棟立

是ヨリ東へ三間ニ拾四間半ハ東西ニ棟立 夫ヨリ三

間ニ六間ハ南北ニ棟立 〆三間ニ式拾六間半也 下

ニ門在 西ヨリ三間東へよりて四間半ノ間也 (本22)

△ 同所ニ御藥藏式間ニ六間半ニシテ在たるのよし 今

ハなし

〓 同御殿ヨリ御台所へ之廊下三間ニ四間也

〓 御台所五間九間

一 同御殿ヨリ御台所へ之廊架 四間はり三間 棟東西

ニ立テ有リ 同所南之角ニ太門へ出ル廊下在 壹間

ニ式間四尺也 北ノ方ハ廊下東之角へ取付 南ハ太

門 西之角ヨリ式間東へよりて取付也 (本23)

一 御台所五間はりニ九間 棟東西也 三尺ニ式間半ノひ

さし西ノ方ニ北へよりて取付有リ 南ニ壹間ニ式間之

ひさし 西ヨリ三尺よりて取付 戸前ノ上也 (本24)

一 同所南ニ式間半はりニ四間之はん所のよし 西三尺

ニ式間之ひさし 下くれゑんニシテ有リ 棟南北ニ

立 右御台所東ヨリ式間西へよりて取付有リ 此は

ん所ト太門之間ニ式間ノ堀東西ニシテ有リ 戸前在

り 下石かん在也 (本25)

一 御台所取付東之御廊下東北之角ヨリ取付之屏 北へ

之出五間ニシテ 夫ヨリ東へ六間半 夫ヨリ丑寅ノ

角へ式間半ニシテ式間はり之太門米申ノ角へ取付也

御天守東ノ出シやくらヨリ下ニ在之堀 (本26)

一 西ハ高石垣ニ取付 東へ三間半余 棟東西ニ立テ在リ

同堀ヨリ取付北へ式拾間壹尺 棟南北ニ立テ在リ

同堀北ヨリ取付西へ拾式間五尺 棟東西ニ立テ在リ

同堀西ヨリ取付北へ拾五間半 棟南北ニ立テ在リ

同堀北西ヨリ取付西へ四間五尺 棟東西ニ立テ在リ

同堀西ヨリ取付北へ拾間四尺 棟南北ニ立テ在リ

西ノ唐破風矢倉〓『御城内惣間敷』鉄

砲櫓

ふミたん〓踏段

ひつミ太門〓歪み多門

乾ノ角箭倉〓『御城内惣間敷』乾櫓

御藥藏〓彈藥庫か?

御天守南ニ六間半ニ八間之家〓本丸御

殿か?

はん所〓番所

くれゑん〓榑縁

石かん〓石棺か? 亀田山にはかつて古

墳があつたと伝わる。

米申↓未申、西南の方角

此塀南ノ角ヨリ壱間北へよりて西南ノ角へ五間余之
ほり立塀有 西之留リハ矢倉下 高石垣ニ取付也
路地口壱門有リ 戸なし 是ハ惣間之外也

拾間四尺塀北ヨリ取付東へきりく門迄之塀壱間余
也 (本27)

きりく門柱中すミ壱丈貳尺計 棟東西ニ立
同門東ニつまより取付東へ之塀壱間余 棟東西也

但門西ト東ト合二口貳間半計ニシテ

同屏東ヨリ取付北へ六間貳尺 棟南北ニ立 但高石
垣之上ノ東側也

同屏北ヨリ取付西へ九間 棟東西ニ立テ在リ

同屏西ヨリ取付南へ貳間之折 棟南北ニ立

同屏南ヨリ取付西へ貳拾三間壱尺 棟東西ニ立

同屏西ヨリ取付南へ拾三間貳尺 棟南北ニ立テ在

北側太門之内 埋門ノ己き石垣ニ取付終ル 但南ヨリ

五間余北へよりて奥 兵口ノ門有 壱間計也

百貳拾三間半也 貳段目之東ヨリ北迄之壱間

通り之間也 (本28)

三ノ門見付 東側之塀 辰巳ノ角屋くら下之石垣へ

取付 南へ拾間 棟南北ニ立

同塀南ヨリ取付西へ五間 棟東西ニ立

同塀西ヨリ取付北へ壱間半にて終ル 但棟南北ニ立

拾六間半 是も南ノ貳段目之内也 (本29)

二ノ門北之太門 貳間はり四間半 棟南北 (本30)

二ノ門貳間はり三間也 柱中すミ壱丈貳尺余にて南

ニ四尺余り ぐり有リ 棟南北ニ立 南ノ方ニ四
尺五寸ニ貳間ノこけらふきはん所有リ (本31)

但此門ハ二ノ丸ト御本丸境也

一 右門并北ノ太門より北ニ壱間計瓦塀有リ (本32)

一 後山へ出口之御門 桁行柱中すミ壱丈壱尺五寸也

はり行九尺ニシテ棟東西ニ立 東之方ニ方立内ノり

三尺のぐり有リ 此上ノ塀桁之所にて壱間四尺也

門ノ西ニ三尺五寸ノ小己き有リ (本33)

一 右之門西之塀 御門柱通より北へ五尺三寸出テ 夫

ヨリ西へ壱間半 棟東西ニ立テ 此西ヨリ取付之塀

南へ九間半也 棟南北ニシテ南ハ石垣にて留ル (本34)

一 同塀ト二ノ丸局部やノ間之塀六間 棟東西ニ立 (本35)

二ノ御丸之内御局部や

二御丸中

一 北側局長や三間はりニ桁行拾九間半 棟東西ニシテ

こけらや也 南ニ壱間ノひさし 西之角ヨリ三間明

東へ取付六間ト拾間半ト也 (二一)

一 右之長屋ヨリ東之長屋 貳間(三) 拾壱間 こけら

や 棟東西也 北ノ方ハ徒ほね長屋ヨリ壱間半南へ

入て取付也 (二二)

一 御台所へ入口ノはん所 貳間半はり拾貳間半 北ニ

三尺拾間半之ひさし 西ヨリ貳間明て取付 南ニ三

きりく門『御城内惣間数』では「水
ノ手御門」と記されている。

三ノ門『御城内惣間数』三之御門

二ノ門『御城内惣間数』二之御門

後山へ出口之御門『御城内惣間数』

西之御門。後山は本丸北西の内堀内

の広大な敷地。

ぐり門などに付随して設けられる

潜り戸

小己き門横の通用口

局部や御局部屋

二御丸中 (付番 二一―二五六)

徒ほね長屋御局長屋

	尺ニ八間のひさし 西之角ヨリ壱間のきて取付きて 何茂こけら屋也 棟東西ニ立也 (二三)	一	西ノ南ヨリ取付有 棟南北ニ立 こけらヤ (二12)
	下御台所 五間ニ九間半 西ニ三尺ニ五間半ノ庇 北ノ角ヨリ取付 棟南北ニ立 柿屋根也 (二4)	一	同所ヨリ上御台所へ之廊下 式間はり三間 棟東西 也 こけらヤ (二13)
	但 御作事小やニ成て有	一	上御台所 五間はりニ七間 西ニ三尺ニ七間之付下 有 棟南北ニ立 東ニ三尺ニ壱間半ノひさし有 何 もこけらヤ (二14)
一	同所ヨリ御広間へ之廊下四間半梁ニ三間半也棟南北 こけらヤ (二5)	一	同所ヨリ御書院へ取付之廊下 式尺四方 棟南北 御台所之方ハ壱間ノ取合 御書院之方ハ西之角ヨリ 式間 共ニ取付也 (二15)
一	但 御作事小や物置ニ成て有	一	御書院ヨリ御風呂屋へ之廊下 壱間ニ壱間半ハ 棟 東西也 御書院北ノ角ヨリ五間明取付て有り (二16)
一	御式台三間はり拾壱間 西ニ三尺ニ九間半之付下シ 屋根こけら 棟南北也 南ノ方 西ノ壱間半所御広 間ゑん側ニ取付也 (二6)	一	御ふろや東ノひさし 壱間ニ四間 右ノ廊下西ニ取 付 北ハ廊下も庇もかへ壱めん也 御ふろやヨリ間 中北へ出て有り 南北也 (二17)
一	御広間八間半梁拾式間半 棟東西也 北ニ三尺ニ五間之ひさ し有り 北西ノ角ニ壱間ニ壱間半之雪隠有り (二7)	一	御ふろヤ 式間はり五間 棟南北也 南ノ方ニ壱間 ニ式間ノひさし有 此東ノ方ハ壱間ニ式間半ノ所御 雪隠御小便所廊下取合共ニ成 こけらヤ (二18)
一	御広間南ノ方東ノ方御式台南東ノ方共ニくれゑん 三尺ニ式拾九間也 (二8)	一	御ふろやヨリ月見ノ次ノ間へ取付之菱廊下 壱間ハ リニ桁行壱間半 棟巳午ヨリ亥子ニ當テ有 (二19)
一	御広間ヨリ御書院へ之御廊下 壱間半ニ四間半 棟 東西ニシテ式間分東ノ方ろく屋根 壱間半ノ分ハ登 りかんき 屋根も登り也 西之壱間ハ御書院ト対座 ノろくニシテ留り也 同北ニ壱間四方御書院ヨリ之 ひさし也 何れもこけらヤ也 御広間ト御書院座ノ 違六尺三寸 かんき数八つ (二9)	一	月見之北ノ庇 式間ニ桁行東西三間半 東ノ方ニ三尺 ニ式間ノひさしニシテ 内壱疊北ノ方を御雪隠之内ニ 入 外ニ壱疊又庇出て 合テ式疊之御雪隠也 (二20)
一	御書院八間はり拾式間 棟南北ニ立 こけらヤ (二10)	一	同所ヨリ御書院へ之御廊下 壱間半はり桁行南北壱 間 (二21)
一	同所ヨリ御広式へ之廊下 九尺ニ桁行式間 棟南北 ニ立 こけらヤ (二11)	一	月見矢倉 式間半はりニ東西三間ニシテ 北ニ壱間

作事小やニ建築・修繕に伴う作業小屋
かんきニ雁木(がんぎ)、ぎざぎざ、転
じて階段。「かんき数八ツ」は階段が
八段であること。
ろくニ陸、平坦なこと
菱廊下ニ菱形になった廊下
月見ニ月見櫓

	二三間ノひさし有 二階之次之間用ル 下之重ハ東南西ニ折廻し沓間ニ九間半有リ 但東方四間南ニ四間西ニ沓間半也 (二二)	一 御門ノ東ノ屋くら 三間梁五間式尺ニシテ 東西ニ立 此東ヨリ取付南へ桁行六間ニシテ有リ 北ハ三間也 南ノつまハ三間半也 内か己ハか年 [※] のて也 外ハのひて有リ か己 [※] らヤ也 南ニ沓間ニ三間のこけらひさし有リ (二三)
一	同所ヨリ西之御土藏へ之廊下 式間はりニ桁行東西三尺也 下ハはし子戸棚ニシテ 上ハ南沓間之所月見上之重之床ニ用ル 北ノ沓間ハ押込ノたなニ成 こけらヤ也 (二四)	一 大門 桁行柱中すミ沓丈四尺はり行八尺五寸 門柱ハ、式尺四寸也 あつ沓尺式寸也 棟東西也 か己 [※] ら屋年ニシテ やくい門也 (二五)
一	御土藏式間半ニ三間 棟南北也 かワらヤ也 (二五)	一 御門ヨリ長や迄之間ニ方立 内 [※] のり四尺式寸ノく、り有リ 方立共々沓尺式寸 (二六)
一	二ノ御丸ヨリ三ノ御丸へ渡ル御廊下橋へ之間ニ登り塀有 此内側廊架也 北ノ入口ハ沓間半はりニ桁行沓間ニシテ是ヨリ沓間ニ六間半ノ分ハ辰ヨリ戌ノ方ニ当て棟片屋年ニシテ有リ 此南ノはしニ取付 卯子ノ間より申西之間ニ当て棟片屋ねニシテ有リ 此南ノはしニ取付卯子ノ間より申西之間ニ当て拾三間沓尺五寸片屋年也 此東西ニ沓間式尺ハかんきニシテ有リ (二六)	一 同御門ヨリ西へ高石垣ニ取付之塀 地ニて四尺七寸程 屋根ニて八尺五寸斗ノ瓦塀也 (二七)
	合式拾沓間也	一 下御台所西之方ニ式間 沓小間はりニ桁行南北式間半也 こけらヤ也 井筒沓間ニ沓間半計ニシテ亀甲も有リ (二八)
一	二御丸之分 南ノ式重屋くら 下ハ四間半ニ五間上之重ハ三間半ニ四間也 棟亥ヨリ巳ノ方ニ當ル 瓦屋根也 (二九)	一 太鼓屋くら西ニ下雪みん有リ 東西ニ棟立五尺ニ沓丈斗也 (三〇)
一	同広間ヨリ東 [※] 之矢藏三間はり桁行六間也 棟南北ニ立か己 [※] ら也 (三一)	一 二御丸中塀 局部ヤ西之角ヨリ南へ之塀五間 同屏南ヨリ取付東へ折式間 右之屏東之方ヨリ取付南へ拾三間也 但惣長之内ニて沓間西へふり出て有 右之屏南ヨリ取付東へ式間 惣長之内ニて沓尺南へ
一	同やくら北ニ雪隠有リ 五尺ニ沓丈計ニシテ式つニ成 棟南北也 こけらヤ (二二)	
一	太鼓屋くら 三間ニ六間 棟子ヨリ午未へかゝりて當ル かはら也 西ニ沓間ニ式間之こけらひさし有リ	

南ノ式重屋くらニ『御城内惣間数』南
櫓

東之矢藏ニ『御城内惣間数』中櫓

太鼓屋くらニ『御城内惣間数』太鼓櫓

御門ニ『御城内惣間数』三之御門

か年[※]のてニ矩の手、九十度折れ曲がる。

か己[※]らヤニ瓦屋根

大門ニ『御城内惣間数』三之御門

屋年ニ屋根

やくい門ニ薬医門

平地門ニ平棟門か

井筒ニ井戸の地上部分を木・石・土管

などで囲ったもの。

亀甲ニ亀甲形の模様

ふり有り	
右之屏東ヨリ取付南へ四間 長之内にて壺小間ほと西へふり有	一 屏北ヨリ取付東へ式間有 戸前壺ケ所有り (二39)
右之屏東ヨリ取付辰巳ノ角へ壺間	一 右之四辻ヨリ取付 亥ヨリ巳ニ当て式間壺尺 夫ヨリ卯へ当五間 夫ヨリ辰戌ニ当て九間半 夫ヨリ亥巳ニ当壺間壺尺 夫ヨリ寅卯申酉ニ当て拾間 是ニ而南ノ角二重屋くらへ取付
右之屏東ヨリ取付辰巳ノ角へ壺間	一 月見辰巳ノ角ヨリ取付南へ壺間五尺ト東へ六間ト也 何茂角柱ニ取付かねのて也 壺間五尺ノ内ニ戸前有 (二40)
右之屏東ヨリ取付之屏 巳午へふりて式間壺尺	一 御書院辰巳ノ角ヨリ取付東へ壺間 夫ヨリ南へ九間 夫ヨリ西へ式間 夫ヨリ北へ壺間半 内戸前壺ケ所有 何茂連子屏也 (二41)
右之屏東ノ方ヨリ取付 卯辰へ之屏壺間	一 同所下之段 月見南ノ通りニシテ石垣ニ取付 東西三間 夫ヨリ南へ六間也 此六間にて南ノ方東へ壺間ふり有 (二42)
右之屏東ノ方ヨリ取付 米ノ方へ之屏壺間	一 南ノ角式重屋くらヨリ取付 寅申ニ当て三間半 夫ヨリ東へ壺間式尺 夫ヨリ丑米ニ当て拾五間半也 (二43)
右之屏東ヨリ取付 戌ヨリ巳ニ当て四間	一 式拾間式尺 (二44)
右之屏東ヨリ取付 未へ当て壺間	一 東ノ中屋くらヨリ取付 北へ式拾三間 (二45)
右之屏東ヨリ取付 辰巳ニ当て三間	一 式台辰巳ノ角柱ヨリ取付 東へ之屏重門左右之屏門 際六間壺尺 (二46)
右之屏東ヨリ取付 寅卯ニ当て壺間	一 中矢くら北ノ雪隠前ニ北南ニ式間ノ屏有 (二47)
右之(屏) 寅卯ヨリ午未へ当て壺間	一 太鼓屋くら戌亥ノ角柱ヨリ取付西へ拾壺間 (二48)
右之(屏) 南ヨリ西辰ニ当て四間半	
右之(屏) 東ヨリ寅申ニ当て壺間	
右之(屏) 東ヨリ午亥ニ当て壺間	
右之(屏) 南ヨリ取付 酉辰ニ当て五間にて留ル 是ヨリ先ハ南へ式筋東へ壺筋北へ壺すしノ取付有り 惣ベ六拾間壺尺五寸 (二37)	
月見西之楼ヨリ取付西へ之屏 壺間半 (二38)	
同所同屏ヨリ先西之方ヨリ取付きたへ五間五尺 同	

米申↓未申

米ノ方↓未ノ方

壺すし||壺筋

丑米↓丑未

一	同中通り之屏東西八間半折 北へ壱間貳尺 但東ハ太鼓ヤ西ノひさしニ取付也	(二49)	一	かねのてニ有	(下2)
一	御門己きノ太門 東南ノ角柱ヨリ取付南へ壱間(二50)	(二50)	一	御小人身 ※ 貳間はり八間瓦ふき	(下3)
一	御番所ヨリ式台戌亥迄ノ屏 折廻し七間半 但御式たい戌亥ノ角ヨリ取付北へ五間 夫ヨリ御番所辰巳ノ角へ貳間半也	(二51)		源藏居所 ※ 貳間半はり拾貳間 南へ八間半はりニ三間ノ中門有 同方ニ五尺ニ五間之ひさし有 北ニ貳間ニ三間半ノ中門有リ 同方ニ壱間ニ三間ノひさし 壱間半ニ貳間ノひさし 貳間ニ貳間ノ庇 三尺ニ三間ノひさしノ分ハこけら也 同所西ニ壱間半ニ四間半ノ瓦ふき有 下湯との貳間四方若雪隠貳つ惣坪数 ※	
一	下御台所戌亥ノ角柱ヨリ取付御番所迄之屏 南北貳間半	(二52)		こけら屋根六拾坪	
一	局東ノ太門 辰巳ノ角柱ヨリ取付南へ拾三間半ニて御式台へ取付 但南ノ方三間分ハ少高し 誘し戸有	(二53)		瓦ふき屋根拾坪七合五勺	
一	下御台所米申ノ角柱ヨリ取付西へ九間也 誘し口有	(二54)	一	堀 貳拾八間貳尺也	
一	同所西之ひさし 未申ノ角柱ヨリ西へ壱間 夫ヨリ南へ四間也 𠂇五間	(二55)	一	御米藏 貳間半はり東西四拾貳間 北ニ壱間ニ貳拾五間半ノひさし 西ヨリ四間半明て取付 同方ニ壱間五間半ノ庇東ヨリ三間半明て取付 ひさしハこけら也	(下4)
一	上御台所ヨリ御ふるやへ取付之屏 七間半誘し口有 但北ハ御台所米申ノ角柱ヨリ取付 南ハふるや戌亥ノ角柱ニ取付也	(二56)	一	同貳間半はりニ南北貳拾七間也 西方ニ壱間ニ廿七間ノ庇有	(下5)
			一	会所 三間三間半 東ニ壱間半四方之中門共ニ同所己きニ下雪隠貳つ	(下6)
			一	同所己きニ下雪隠貳つ	(下7)
			一	同所近辺ニ屏 ※ 拾壱間貳尺	(下8)
			一	御藏二つ之間ニ 東之方ニ壱間之堀有	(下9)
			一	御藏と荻田居所之境ノ屏 東西本間三拾三間にておゝい也	(下10)
一	同所東之方ニ下雪ちん壱有 左右ニ壱間半斗之堀	(下11)			

御本丸二丸下ノ段

一 大手之御門 三間半梁ニ八間ニシテ貳重成 志やちほこ有 (下1)

一 同所東之方ニ下雪ちん壱有 左右ニ壱間半斗之堀 (下1)

誘し戸ニ透し戸

米申↓未申

誘し口ニ透し戸口

御本丸二丸下ノ段 (付番下01〜下33)

大手之御門ニ松江城の表門、『御城内惣間敷』南惣門

御小人身※ 小人身とは杖突、道中吟味、

小使をなすもので、彼らの詰所となる小屋。

源藏居所ニ不明。『松江城縄張図』には

「此所屋敷地」と記す貼紙の下に、住居とおぼしき平面図が記され「神谷勘左衛門居所」とある。「神谷勘左衛門」は元禄一一年から宝永七年までの十三年間、「御天守鍵預り」を勤めている。

己きニ脇

屏ニ堀

荻田居所ニ配流された荻田親子の住い。

この居所は『御作事御役人帳』には「延宝七年」の項に「荻田屋鋪出来」と記されている。

一	荻田表長ヤ 三間はりニ東ハ弍拾弍間 南北同 内 か己ニテハ北ニ壱間ノ延有 北ハ拾八間也 内ノ方ニ テハ壱間余ノ延有 此長ヤハ辰戌ニ当テ棟立 (下12)	一	南へ四間弍尺 此南ニテ西へ壱間ニテ留ル 右三十六 間屏 南ノ角ヨリ壱間四尺北へよりテ取付 西へ拾三 間弍尺 (下23)
一	右之長ヤヨリ御藏迄之外ノ堀 折廻シ弍拾七間余也 内拾五間四尺ハ南北ニシテ 南ノ方ハ御藏丑寅ノ 角柱へ取付 拾壱間半ハ東西ニ立 (下13)	一	※ 大手御門米申ノ角柱より取付 西へ拾四間半 (下24)
一	右之長ヤ米申ノ角柱ヨリ取付 南へ拾三間也南北 (下14)	一	同所南ノ升形南ノ屏東西廿六間半 (下25)
一	右之長ヤ東ノ方ニ在之小門 柱中すミ壱間弍尺 左 右之堀弍間半余 (下15)	一	右之屏 東ノ方ヨリ取付北へ八間半 此北ヨリ西へ 折弍間也 (下26)
一	※ 東之樓門 三間はりニ七間ニシテ二重 (下16)	一	※ 木戸門 柱中すミ弍間 左右之柵弍間也 (下27)
一	同所角ニ在之下雪隱壱 (下17)	一	同木戸門北ノ屏 東西弍間ニシテ東つらハ一めんニシ テ 右へ東ヨリ取付 きたへ拾六間ニテ石垣ノ中程ニ 取付 大手ノ門東ノ角柱ヨリ四間東へより取付 (下28)
一	※ きりく御門番人居所 三間ニ八間瓦ふき 脇ニ壱 間斗之雪隱有り (下18)	一	大手御門辰巳ノ角柱ヨリ取付東三拾間半ノ堀也 (下29)
一	同所西つらニテ北ノ方ニ七尺斗之屏有 (下19)	一	右之堀 東ヨリ取付北へ三拾六間半 それヨリ東へ 壱間弍尺ノ折有 此東ヨリ取付北へ六間四尺 夫ヨ リ西へ壱間弍尺折有 此西ヨリ取付北へ三拾七間四 尺 此北ヨリ東ノ御門迄之堀七間ニテ御門辰巳ノ角 柱ニ取付終ル ㄞ (下30)
一	同所御門柱中すミ七尺五寸計 (下21)	一	※ 東ノ御門未申ノ角柱ヨリ取付西へ七間弍尺 此西ヨ リ取付北へ拾間壱尺ノ折也 此北ヨリ取付西へ三間 半 此西ヨリ取付南へ壱間半ニテ終ル ㄞ (下31)
一	同所堀之中ニ在之さく海陸共ニ拾五間 (下22)	一	右之御門丑寅ノ角ヨリ取付東へ壱間之堀有 此東ヨ リ取付北へ弍拾間 此北ヨリ取付西へ四拾壱間半也 少戌ノ方へ振ル 此西ヨリ取付北へ五間 此北ヨリ 取付戌亥ニ当リテ三拾九間五尺弍寸 此内忍折込六 ケ所有 先ハ新御屋布分堀也 (下32)
一	此北ヨリ 夫ヨリ卯辰ニ当テ拾八間弍尺 此東ヨリ南 午米当テ弍拾壱間四尺 此南ヨリ東へ当テ壹間弍尺 此東ヨリ南へ拾間 此南ヨリ西へ折拾壱間弍尺 此 西ヨリ南へ弍拾弍間 此南ヨリ西へ拾弍間半 右之 廿弍間屏 南ノはしニテ壱間半ほと内西へ入候而取付 南へ三拾六間四尺 夫ヨリ東へ壱間四尺 此東ヨリ	一	荻田表長ヤハ荻田長屋、荻田居所を囲 む、北側と西側に鍵の手に折れ曲が る建物。 米申↓未申 東之樓門ハ『御城内惣間敷』北之惣門 きりく御番人居所ハ『御城内惣間敷』 同所御番所弍間半梁桁行五間 牛米↓午未 大手御門ハ大手之御門 米申↓未申 木戸門ハ屋根のない開き戸の門 東ノ御門ハ東ノ樓門

一 右之塀西ヨリ取付未申ニ当て六間 此南ヨリ取付成 (奥書)

亥ニ当りて七間半ニて新御屋敷御門東ノ柱へ取付御
門式間也 同西ノ塀長屋迄ノ間三間式尺 (下33)

新御屋敷之内[※]

一 南ノ表長屋三間梁ニ拾五間未申ヨリ辰巳ニ当リ棟立

者ゝかりなから

[※]書徒希於き候

此書物もし

おとし候ハゝひとへ

に目くらの杖

越うしなへるにニて候

御ひろい被成候方様ハ

可被下候ハゝ忝存

たてまつりへく候

以上 竹内右兵衛

新御屋敷Ⅱ『御城内惣間敷』上御殿

書徒希Ⅱ書付のこと。これと末尾の「竹

内右兵衛」により、この史料名を『(竹

内右兵衛書つけ)』とした。

『(竹内右兵衛書つけ)』

和田 嘉 宥

縁が切れている。

いずれにしても、この『(竹内右兵衛書つけ)』は代々竹内家で大切に保存されてきた家伝書であることは間違いない。

『(竹内右兵衛書つけ)』の内容は次の通りである。

- 一・年表 四枚
- 二・地形及び方位 四枚
- 三・武家之部 六五枚
- 四・松江城城郭之部(御本丸中、二御丸中、御本丸二丸下ノ段、新御屋敷之内) 二四枚
- 五・奥書 一枚

一・「年表」は、永正から元和までは年号の年数が記されている。永正から始まっている理由については不明であるが、竹内家が永正時代まで遡る工匠の家柄であることを物語っているようにも思われる。

寛永元年から正徳三年までは、年次が一つひとつ箇条書きで記されている。そして、「寛永九年」の下段には「従是信州松本御在城」、同十五年の下段には「御入国」とあるが、これらは、松平直政の松本城移封、松江城移封と関

『(竹内右兵衛書つけ)』が伝わる竹内家は、松江藩御大工の家柄として知られている。この竹内家は、『列士録』^{〔注1〕}によると生国を播磨とする竹内宇兵衛(『列士録』には祖父竹内宇兵衛とある)を祖先とする。この祖父竹内宇兵衛は寛永七年(一六三〇)に江戸にて松平直政に仕え、寛永十年(一六三三)には松本城の修理に携わり、寛永十五年(一六三八)直政の松江入府に伴い、松江藩御大工頭になり、承応三年(一六五四)に亡くなっている。この宇兵衛の跡を継いだ二代目宇兵衛(『列士録』では父竹内宇兵衛とある)も寛文十一年(一六七二)まで御大工頭を勤め、三代目宇兵衛(『列士録』では元祖竹内宇兵衛とある)が御大工頭、御作事所元締役(一九ヶ年)を勤め、御作事奉行(一七ヶ年)となり士列に取立てられている(『列士録』では、士分となつたこの宇兵衛が初代と記されている)。「御作事所御役人帳」^{〔注2〕}には、「寛永十五寅 御大工 竹内有兵衛」、「承応三年 御大工 竹内有兵衛 但親有兵衛ト入代リ」「寛文十一亥 御大工親有兵衛ト入代リ 竹内有兵衛」「元禄六酉 御目見御大工頭 竹内有兵衛」「享保二酉 十一月廿二日御奉行被仰付 竹内有兵衛 享保十八丑迄」などがあり、竹内家が、松平松江藩では、直政入封以来、三代にわたって御作事所に勤めていた御大工の家柄あることが確認できる。ただ、竹内家は、四代目以後は、大工職ではなく、留守居番組、奥納戸役、組外などを勤める士分となり、御作事所とも

わりが強いことを伝えるものである。

年表下の記載は、延宝五年から元禄五年まであり、延宝六年「六月十五日
ホロ町出火 田マチ奥谷マテ」、同七年「荻田配所十一月出来唐門」、同八年
「平田御茶や七月ヨリ十一月迄」、天和二年「楽山六月・十月迄」、同三年「五
月月照寺御堂上ル」、貞享元年「十月ヨリ大橋二取付」、同二年「大橋掛ル」、
同三年「天神橋三月・五月マテ 四月未刻三光有リ」、貞享四年「佐田本社
八月十八日棟槌 十九丑刻遷宮」、元禄元年「佐田ワキミヤ無残出来 八月
七日センクウ（遷宮）」、同二年「土橋十月ヨリ極月マテ」、同三年「新御寝
間二月・五月マテ」、同四年「六月七日洪水」、同五年「ヲク御普請三百坪
余八月より十一月マテ」と、天和元年を除いて毎年、災害や作事の名称とそ
の期日等が記されている。作事については、『御作事所御役人帳』にも同様
の記述があるが、このことから、これらは、これを記したと思われる竹内
宇兵衛にとって記録すべき重要な出来事であり、作事（建築）であったこと
が伺える。

二.「家相之部」は地形之事、二十二相之事、五姓之人家ノ事、門尺之事、
龍臥之事について記され、五行相生が図示されているが、竹内家が風水や方
位を大切にしていた御大工の家柄であったことが伺われる。

三.「武家之部」は本書で最も多くの頁数を割いている。記載事項を見ると、
棟門之事、唐棟門之事、四足門之事、唐四足之事、唐門之事、向唐門之事、
薬医門之事、上土門之事、平地門之事、同取付塀之事、向塀重門之事、広間
之事、中門之事、奥寄之事、違棚之事并図、舞台、鞠懸 蹴鞠之事、厩、四
畳半台数寄屋、腰掛之事、雪隠、鷹部屋、諸調度品（盤、まな板、衣桁、茶

箱、文箱、その他箱等）、産屋ノ事、町舛などで、武家住宅に関する木割が
多岐にわたって記されていることが分る。

木割は、わが国の伝統的な建築において、各部の比例と大きさを決定する
システムまたは原理である。木割書の最古のものとしては『愚子見記』に一
部引用されている『三代巻』が知られているが、全体に及ぶ木割の存在が明
確化されるのは桃山時代で、平内家伝書の『匠明』^{（注3）}が著名である。『匠
明』は「門記集」、「社記集」、「塔記集」、「堂記集」、「殿屋集」の五巻からな
るが、当時、工匠家では、このような木割書が秘伝書として記され、代々伝
えられるようになっていた。『（竹内右兵衛書つけ）』の「武家之部」は、記
載事項を見ると、『匠明』の「殿屋集」にあたるが、「殿屋集」にないものと
して、数寄屋之事、違棚之事并図、四畳半数寄屋、鷹部屋、諸調度品、産屋
之事などである。

武家住宅に関する事項が多岐に渡って記されているが、諸大名に仕える工
匠家の主な仕事は武家住宅を中心に行われるようになったことを現わしてい
ると思われる。

ところで、木割書は江戸時代になると多く作られるようになり、木版本も
刊行されて、広く流布するようになる。木版本となった木割書^{（注4）}を見ると、
『武家雛形』、『棚雛形』、『数寄屋雛形』、『小坪雛形』（家具調度の類）などに
分かれて出版されるようになるが、『（竹内右兵衛書つけ）』の「武家之部」は、
これらを網羅して記されているところに特色がある。『（竹内右兵衛書つけ）』
の制作年代については後述するが、「広間之事」に始まる武家住宅に関する
木割の記述は、竹内家が大名に仕えるような工匠家の家柄であることを表し
ていると思われる。また、個々の木割に関する記述はやや断片的ではあるが、
「広間之事」の冒頭には「六七曲金ト云事有リ」とあるように、『匠明 殿

『屋集』でいう古法の木割法に則って記されている。このことから、竹内家が伝統を重んじる工匠家であると推察される。また、「諸調度品」のうち「箱」等についての記述の一つに「十六嶋海苔五羽入」とあるが、十六嶋は島根半島にある地名で、十六嶋海苔はこの土地の名産品である。このことから、この伝書は竹内氏（竹内右兵衛）が松江藩の御大工になってから記したものであることが分る。

四．「松江城郭之部」は「御本丸中」、「二御丸中」、「御本丸二丸下ノ段」、「新御屋敷之内（未完）」よりなる。「御本丸中」ではまず天守閣各階の間取図が描かれ、続いて本丸に建つ諸建物の規模、大きさ、屋根材等が記され、「二御丸中」、「御本丸二丸下ノ段」でも本丸同様諸建物の規模、大きさ、屋根材等が記されている。この「松江城郭之部」は、竹内氏が、当時存在していた天守や矢倉（櫓）など全ての建物や施設を調査し、その大要を記録したものであることがわかる。

これによって当時の松江城（本丸、二之丸、二之丸下ノ段）にどのような建物と施設があったかがわかるが、最後の「新御屋敷之内」では「一 南ノ表長屋三間梁二拾五間末申・辰巳ニ當リ棟立」の一項目しか記されておらず、また、「三ノ丸御殿」に関しては記載されていない。「新御屋敷之内」は天守閣の北東に位置する奥御殿のことであると見られるが、「南ノ表長屋」だけの記載で終っている。このことから、この伝書に「城郭の部」が記された時期は、「新御屋敷」すなわち、「奥御殿」が建てられはじめた頃のようにも思われる。

なお、「三ノ丸御殿」については、何も記されていない。この理由については、不明であるが、この伝書に「城郭の部」が記された頃には、「三ノ丸

が大きく整備し直される時代であったのかもしれない。

五．奥書には、「者ゝかりながら／書徒希於き候／此書物もし／おとし候ハゝひとへ／に目くらの杖／越うしなへるに二て候／御ひろい被成候方様ハ／可被下候ハゝ忝存／たてまつりへく候／以上 竹内右兵衛」とある。このことから、この伝書が、「竹内右兵衛」が記しはじめたものであり、工匠（御大工）の家柄である竹内家の家伝書であることが理解できる。

この伝書の制作年代について検討しておきたい。奥書から、この伝書は直政に伴って来松した竹内右兵衛が書きはじめた伝書であることは伺えるが、「四．松江城郭之部」には天和元年に松江城に蟄居する荻田父子に関連する荻田長屋についての記述があり、「一．年表」を見ると、元禄五年の記述まで下っている。このことから、この伝書が今のようになったのは一七世紀後半と見なすこともできる。

また、筆跡について全体を通してみると、書体は楷書体、草書体などであるが、本文の大半は一人の人物の筆跡とみなしてよいだろう。そして、その筆跡は「佐太神社指図板」^{（注5）}と極めて類似している。そして、「貞享六子六月 竹内宇兵衛」の奥書がある「佐太神社指図板」は竹内右兵衛の孫にあたる宇兵衛が三十三歳の時に書き記したものである。

ただ、前述したように、この伝書が書き始められたのは奥書からも伺えるように竹内右兵衛が来松した当時と見なされる。また、「広間之事」を見ると、『匠明』とも類似する記述が随所に見られ、前述したように木割は古法によっている。また、「棚之図」を見ると、五十二棚が図示されているが、これらの棚をみると、後のいわゆる「四十八棚」には見られない名称の棚がいくつ

が見られる。

このことから、『竹内右兵衛書つけ』の「武家之部」は、元々あった祖本を元に、書き写したものと見られている。また、「柵之図」を見ると、図の上部に、例えば「雁行柵」の「合木ト云」、「飛乱」の「雁ト云」、「藤枝」の「楓柵ト云」など朱の添え書きがある。このことは、この伝書が改めて筆写されるにあたって、例えば木版本として江戸時代に流布する雛形本を参照し、頭注としたと見なしてよいだろう。

とすると、「柵之図」に朱で添え書き付されたのは、木割書が公刊本として現れはじめた頃か、それ以後と見なすこともできる。

また、主文を補うために付されている朱の添え書きは、書体も主文と同じであり、同じ人物によって書かれていると考えられる。従って添え書きは主文が記された年代とほとんど同じ時期と見なしてよいだろう。

以上のことから、本書が現存する姿になったのは一七世紀後半、「烈士録」にある初代竹内宇兵衛が御大工の時代と考えられる。

ただ、本書の「柵之図」には、江戸時代に定形となる四十八柵にはない柵（砂浜、花カタミ、源氏、御腰物、化粧、衆三他）がいくつか見られるところなどから『竹内右兵衛書つけ』には祖本があるとの見解（岡本真理子『近世建築書―座敷雛形』）もある。

本書（祖本）の制作年代は、こうした指摘も含めて改めて検討してみる必要がある。

（注1） 原本／国文学研究資料館所蔵。写本／島根県立図書館所蔵。

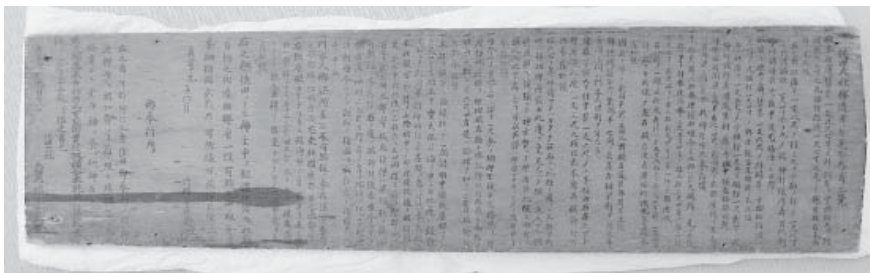
（注2） 個人蔵。

（注3） 江戸時代初期に平内政信が記した木割書。全五巻で慶長十三年（一六〇八）の奥書がある。

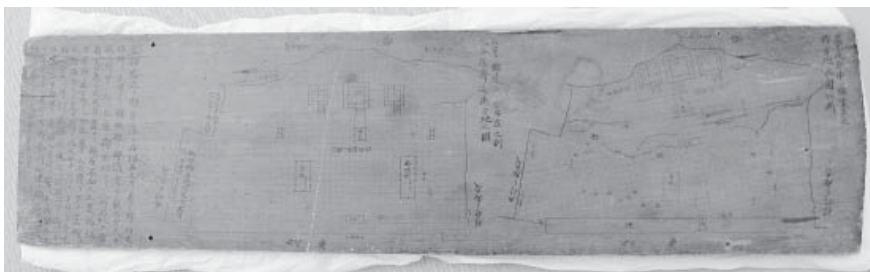
（注4） 木割書が木版本の形で公刊されるようになったのは、明暦元年（一六六五）の『新編雛形』が最初期のものとされる。また、柵雛形では、万治元年（二六五八）中秋に上梓された『新編四十八柵雛形十分一のぢわり』が最初期である。

（注5） 出雲古代博物館所蔵。佐太神社は貞享元年（一六八四）に造替されるが、この造替工事を指揮したのが竹内宇兵衛で、指図板には、この時、改変されることになった社殿について配置図も含めて造替工事の要点が記されている。

（写真添付）



表面



裏面

佐太神社指図板

松江城研究 第1号 執筆者紹介

- 山根正明 松江市教育委員会文化財課史料編纂室 専門官
- 山上雅弘 兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部 課長補佐
- 和田嘉宥 米子工業高等専門学校 名誉教授
- 松尾信裕 大阪城天守閣 館長
- 中井 均 滋賀県立大学人間文化学部 准教授
- 渡辺正巳 文化財調査コンサルタント(株) 代表取締役
- 瀬戸浩二 島根大学汽水域研究センター 准教授

松江城研究第1号

発行 平成24年3月21日
松江市教育委員会
〒690-8540 島根県松江市末次町86番地

印刷 (有)太陽平版
松江市馬潟町356番地6

Studies on Matsue Castle 1

March 2012

Featured Articles

Report session on Matsue Castle survey

“The latest news on Matsue Castle -What has been found and what will be found in the future-”

Keynote report:

The latest news on Matsue Castle YAMANE Masaaki (1)

Field reports:

Basic design of Matsue Castle YAMAGAMI Masahiro (8)

Donjon of Matsue Castle and castle facilities WADA Yoshihiro (15)

Remains of Matsue Castle Bourg and housing allocation MATSUO Nobuhiro (21)

Panel Discussion

Facilitator NAKAI Hitoshi (28)

Panels YAMAGAMI Masahiro, WADA Yoshihiro, MATSUO Nobuhiro

Articles

Branch castles under the domination of Horio in Izumo district (1) -Mitoya Ozaki Castle- NAKAI Hitoshi (43)

The environment of Matsue Plain before laying the foundation of the government (1)

..... WATANABE Masami, SETO Koji (49)

Reprint of historical literature and the notes Records by TAKEUCHI Uhei WADA Yoshihiro [1]

松江市教育委員会
Matsue City Board of Education
Suetsugu, Matsue-city, Shimane-pre, Japan

ISBN978-4-904911-15-0

C3321 ¥2000E

松江市教育委員会

定価(本体2000円【税別】)



9784904911150



1923321020009